

町内遺跡発掘調査報告書2（平成18年～令和5年度）

閏田1号古墳地中レーダー探査報告書

町内遺跡発掘調査報告書2
（平成18年～令和5年度）
閏田1号古墳地中レーダー探査報告書

岐阜県加茂郡富加町教育委員会

2024

岐阜県富加町教育委員会

町内遺跡発掘調査報告書 2 (平成 18 年～令和 5 年度)
閏田 1 号古墳地中レーダー探査報告書

2024

岐阜県富加町教育委員会

例 言

1. 本書は富加町教育委員会が平成 18 年（2006）～令和 5 年度（2023）に実施した町内遺跡発掘調査事業の報告書である。
2. 当事業は、「国宝重要文化財等保存整備費補助金」の交付を受けて実施した。
3. 令和 5 年度の本書刊行における事務局組織は以下の通りである。

教育委員会事務局	教育長	坂井 伸生
	教育課長	川合 耕平
	文化財専門官	島田 崇正
	調査補助員	佐藤 梨帆
6. 本書の第 1 章に町内で実施した埋蔵文化財試掘調査の結果を報告しているが、一部の地域については、今後の基礎資料とするため立会調査成果も掲載した。
7. 出土遺物の洗浄・注記・実測図化作業、図版作成は島田と佐藤が行った。
8. 本書の第 1 章の執筆は島田が、第 2 章は松本拓（株式会社パスコ 文化財技術部 史跡整備二課）と島田が担当し、文末に執筆者名を記した。本書の編集は島田が担当した。
9. 土色注記の土色は『新版 標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編、日本色研事業株式会社、1993、東京）を用い、基準とした
10. 本書に使用した地図は、富加町が作成した 25,000 分の 1 都市計画図（縮小）及び国土地理院「地理院タイル」を一部加工して使用した。
11. 出土品及び調査記録類は富加町郷土資料館にて保管している。

目 次

第1章 町内遺跡発掘調査事業の成果

第1節	加治田地区の調査	1
第2節	夕田地区の調査	4
第3節	羽生・滝田地区の調査	26
第4節	高畑地区の調査	46
第5節	大平賀・大山の調査	58

第2章 閩田1号古墳地中レーダー探査の成果

第1節	経緯と目的	60
第2節	墳丘測量	60
第3節	地中レーダー探査	62
第4節	まとめ	81

第1章 各遺跡の調査報告

第1節 加治田地区の調査

上之屋敷遺跡 H24 地点 立会調査

- ・調査原因 駐車場造成
- ・調査種別 工事立会調査
- ・所在地 加治田字上之屋敷
- ・調査期間 平成24年5月22日
- ・調査概要

上之屋敷遺跡は、加治田城に関連する城館跡の可能性が推定されている遺跡である。

遺跡内で盛土による駐車場の造成工事の過程で龍福寺参道の縁を削平する可能性があるため工事立会調査を実施した。

龍福寺の参道は土手状を呈しており、城館の土塁の可能性が指摘されている（島田 2005）。断面を観察すると下層が拳大の砂岩・チャート礫を含む土で構成され、上層も砂利を多く含む。周辺の表土や耕作土は砂質土でそれほど礫を含んでおらず、地山も砂質シルトで構成されており、人為的な盛土であることが分かる。構築時期は、遺物の出土が無いため定かにはならなかったが、礫を含む土で基礎部分を構成する点は土塁の盛土工法に通ずる。



図1-1 加治田地区調査箇所位置図

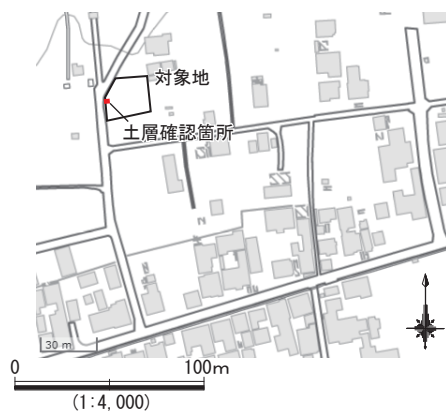


図1-2 上之屋敷遺跡 H24 地点 立会調査位置図

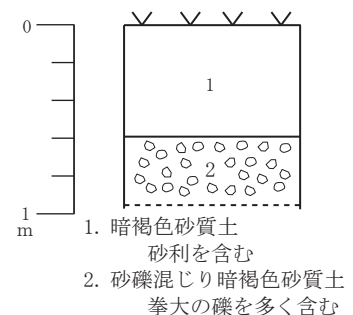


図1-3 参道部分土層柱状図

上之屋敷遺跡 H26-1 地点 立会調査

- ・調査原因 倉庫新築
- ・調査種別 工事立会調査
- ・所在地 加治田字上之屋敷
- ・調査期間 平成26年4月22日
- ・調査概要

倉庫の新築に伴い基礎工事掘削の際に工事立会調査を実施した。

四隅の柱基礎のみの小規模な掘削であった。表層は小砂利混じりの暗褐色土が10cm程あるが、これは造成時に入れたものであり、その下層には旧表土である黒褐色砂質土が残る。地山層である3層褐色砂質シルトまで30cm程度と非常に浅い。遺構・遺物の出土は無かった



図1-4 上之屋敷遺跡 H26-1 地点 立会調査位置図

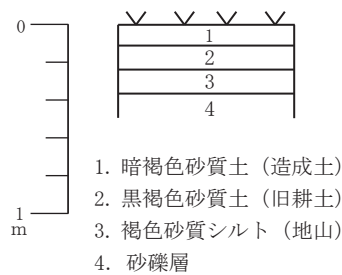


図1-5 上之屋敷遺跡 H26-1 地点 土層柱状図

上之屋敷遺跡 H26-2 地点 立会調査

- ・調査原因 個人住宅新築
- ・調査種別 工事立会調査
- ・所在地 富加町加治田字上之屋敷
- ・調査期間 平成27年3月16日
- ・調査概要

表土を10～15cm程度すき取り、20cmの採石盛土造成の上からの基礎施工であった。

すき取りは10cm程度で地下の埋蔵文化財への影響は少ないものと思われたが、面的に実施されるとのことで、工事立会調査をおこなった。すき取った表土は、対象地の北東側にある畑地に集められている。また基礎の掘削も採石盛土後に20cm程度の掘り下げであったため、影響は無いものと思われた。

対象地から遺構・遺物の確認は無かった。

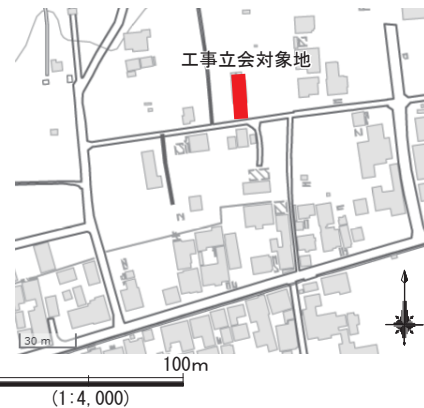


図1-6 上之屋敷遺跡 H26-2 地点 立会調査位置図

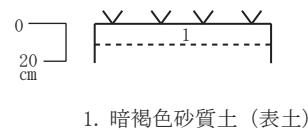


図1-7 上之屋敷遺跡 H26-1 地点 土層柱状図

絹丸堀畑遺跡 H23 地点 試掘調査

- ・ **調査原因** 個人住宅建て替え ・ **調査種別** 工事立会調査
- ・ **所在地** 加治田字絹丸
- ・ **調査期間** 平成23年3月10日
- ・ **調査概要** 表土10cmをすき取り程度であり、遺構・遺物の確認は無かった。

絹丸堀畑遺跡 H24 地点 試掘調査

- ・ **調査原因** 個人住宅新築 ・ **調査種別** 工事立会調査
- ・ **所在地** 加治田字絹丸
- ・ **調査期間** 平成23年3月10日
- ・ **調査概要** 基礎掘削は30cm程度であったが造成土内であり、遺構・遺物の確認は無かった。

第2節 夕田地区の調査

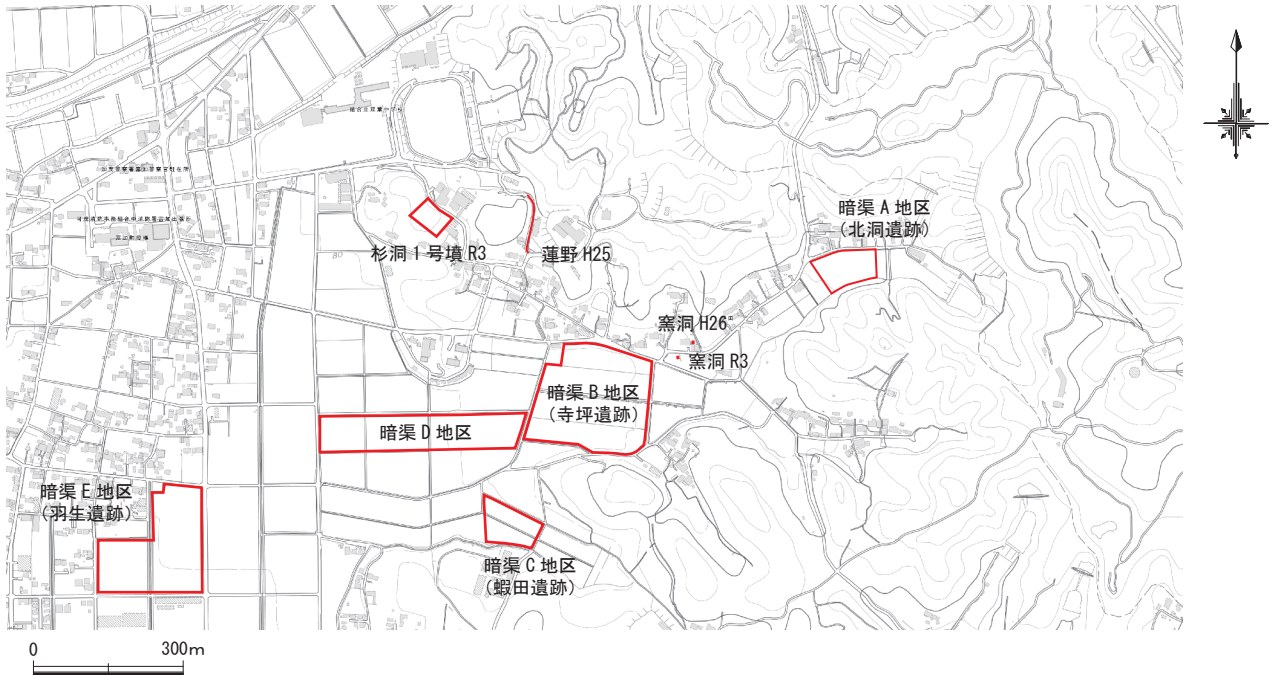


図1-8 夕田地区調査箇所位置図

暗渠排水整備事業に伴う寺坪遺跡ほか確認調査

・調査の経緯

令和元年8月8日、岐阜県可茂農林事務所（事業主体）より富加町羽生・夕田地内での暗渠排水整備事業を行う旨の94条通知が提出され、事業と併行して富加町教育委員会にて各遺跡の確認調査を行うこととなった（令和元年9月26日付け 文伝第94号の97にて「内容確認調査」通知）。令和2年度に寺坪遺跡・蝦田遺跡・北洞遺跡、令和3年度に羽生遺跡・寺坪遺跡の確認調査を実施することとなった。

・**実施方法** 富加町教育委員会が実施し、民間調査会社へ業務支援を委託した。

・**実施期間** 令和2年11月12日～令和4年3月18日

※現地調査は令和2年12月3日～令和3年2月26日（北洞・寺坪・蝦田遺跡）A・B・C区

令和3年10月4日～10月8日（羽生遺跡）E区

令和3年11月26日～11月29日（羽生遺跡）E区

令和3年12月22日～令和4年1月11日（寺坪遺跡）D区

・実施方法

暗渠排水の施工を実施する部分のうち埋蔵文化財包蔵地内及び隣接部分の工事箇所について、①確認調査と②工事立会にて対応した。

確認調査は、事前に実施する調査する調査箇所を選定し、工事掘削後に一旦工程を止めて、壁面精査と土層図作成を実施した。今後、作成した断面図を基に地形や堆積を、広域で把握できるように確認箇所を選定した。

北洞遺跡に該当する箇所をA地区（A-1・2）、寺坪遺跡に該当する箇所をB地区（B-1～24）・D

地区（D-1～13）、蝦田遺跡に該当する個所をC地区（C-1～6）、羽生遺跡に該当する箇所をE地区（E-1～10）として整理した。確認調査の総延長は987.69mであった。確認調査については調査支援業務を委託して実施した。工事立会は、確認調査で得た所見をもとに工事中に適宜実施した。

・調査成果

A-2において竪穴状遺構（図1-13のS1）を確認した。S1の2層は被熱土と炭化物層であり、地床炉の可能性はある。2層下部からは内湾直口壺（ヒサゴ壺か）の口縁部（図1-29の1）が出土しており、おそらく廻間I・II式前半のものと想定できる。以上の点から考えて、S1については弥生時代終末期の竪穴建物の可能性が高い。竪穴の落ち込み長は約7mであるから、比較的大型の建物を想定できる。

今回の竪穴状遺構S1の確認から、近接する夕田茶臼山古墳（廻間II式期、3世紀中頃築造）と同時期、あるいはやや先行する集落が近くに存在した可能性を示唆する重要な確認となったのは大きな成果と言える。さらに、調査中に周辺住民の方からA地区周辺で耕作中に表採された土器を寄贈していただいた。重要な資料があるためこの機会に図1-29に示した。これらの表採資料の中にも、弥生時代終末期である廻間I式期後半の高坏脚部（図1-29の3）や、廻間II式期の高坏脚部（図1-29の2）が確認できる。おそらく夕田茶臼山古墳の築造に関係する集落が、北洞遺跡周辺に存在しているとみて良いだろう。竪穴状遺構S1と表採資料の確認は、国史跡「夕田墳墓群」の築造主体に関する重要な成果である。

その他にもA地区では、A-1表土から須恵器甕片が出土している。表採資料でも須恵器甕片は多くみられる。

B地区（寺坪遺跡）ではB-13にてSK01、B-16でSK02・03、B-23東でSK04・05の土坑を確認している。これらの遺構の性格は定かではないが、B-23東の地山上面にて古瀬戸陶器片が出土していることから、中世の遺構の可能性を考えておきたい。

C地区（蝦田遺跡）では遺構・遺物の確認は無かったが、周辺で須恵器甕の破片を表採している。

D地区（寺坪遺跡）では山茶碗や近世染付陶器が出土したが、遺構の確認は無い。

E地区（羽生遺跡）では、E-1の中央の浅い落ち込みにて8世紀前半の須恵器有台坏（図1-29の13）が出土している。E-1の南端では炭化物を含む4・5層、焼土を含む7層を確認しており、何らかの遺構である可能性もある。E-7では灰釉陶器の段皿片が出土しており、平安期の活動がうかがえる。また、E-7では山茶碗や天目茶碗の高台部（加工円盤か）など中世～戦国期の遺物も出土している。

今回の調査により、A・B地区の北側は帯水層がやや低く、褐色粘土層の地山層や黒色土層もあり、黒色土層からは中世遺物もみられることが分かった。水田北側は、近世以前には水田以外の土地利用も可能だったと思われる。夕田地区は、溜め池を灌漑に利用している。北洞の谷奥に池があり、そこから用水を引いて寺坪より西下は南寄りを通している。灰褐色の帯水層は、この用水周辺に広がっており、水路は沼田のような土地の排水も兼ねていたのだろう。現在のような一面が水田地帯となった景観が成立したのは、おそらく近世以降だろう。土層や遺物出土、表採資料からみると、古代・中世にはA地区であれば南丘陵の裾あたり、B地区は南半が沼田のように利用ができたと思われる。そしてD地区については水捌けが悪く沼状であったと推測できる。

幅30～40cmで深さ60～80cmの狭小な調査区であり、水田地帯であるため帯水による困難さもあり、難しい調査であった。夕田地区谷部の水田地帯には今まで調査が及ばなかったが、今回の調査により、地形や土地の状況、遺跡に関する多くの所見を得ることができた。

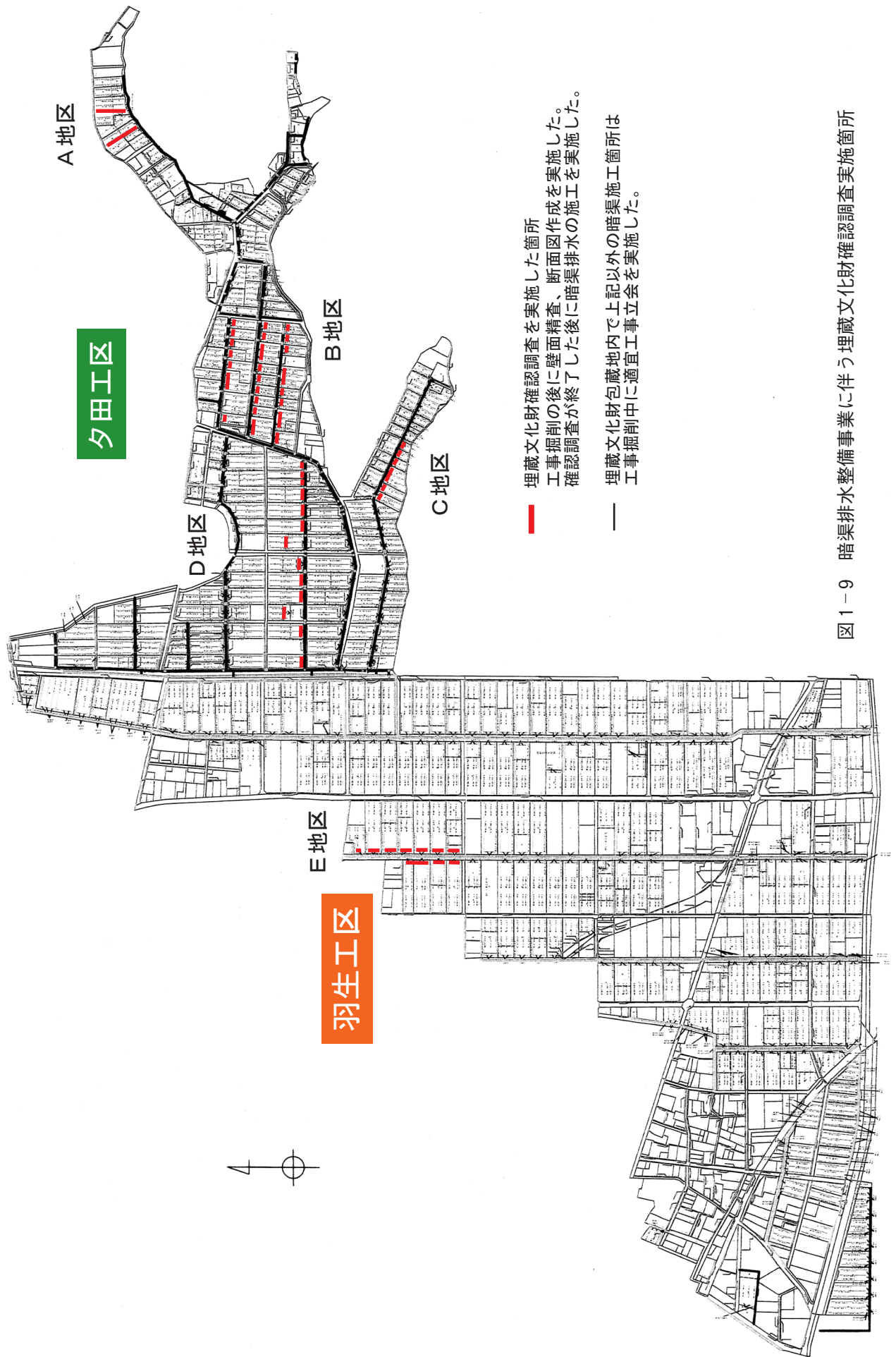


図1-9 暗渠排水整備事業に伴う埋蔵文化財確認調査実施箇所

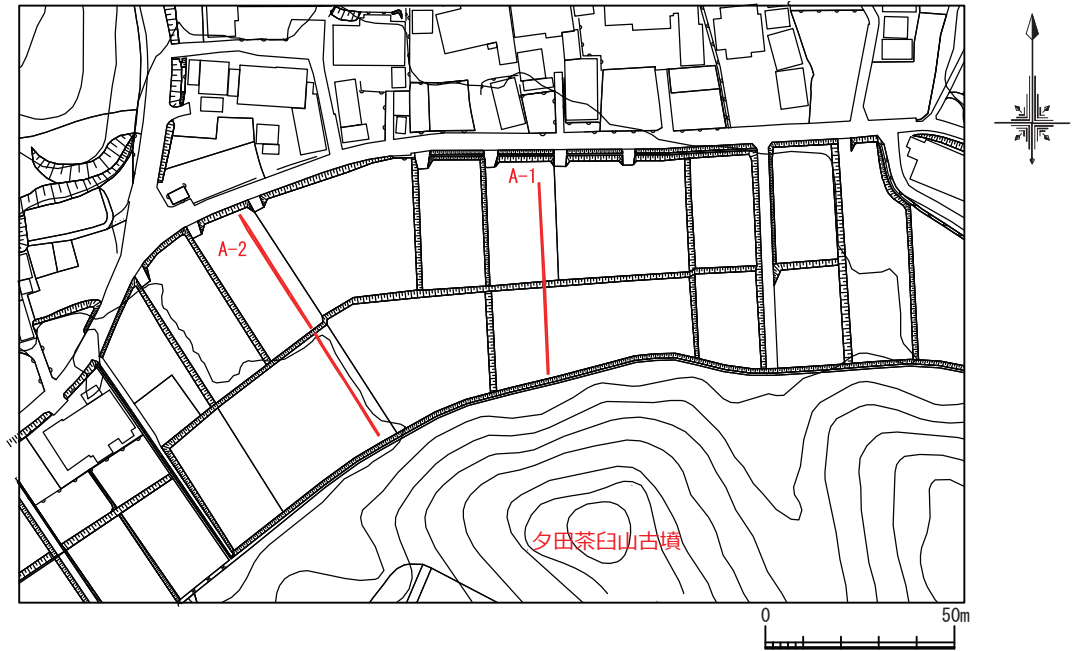
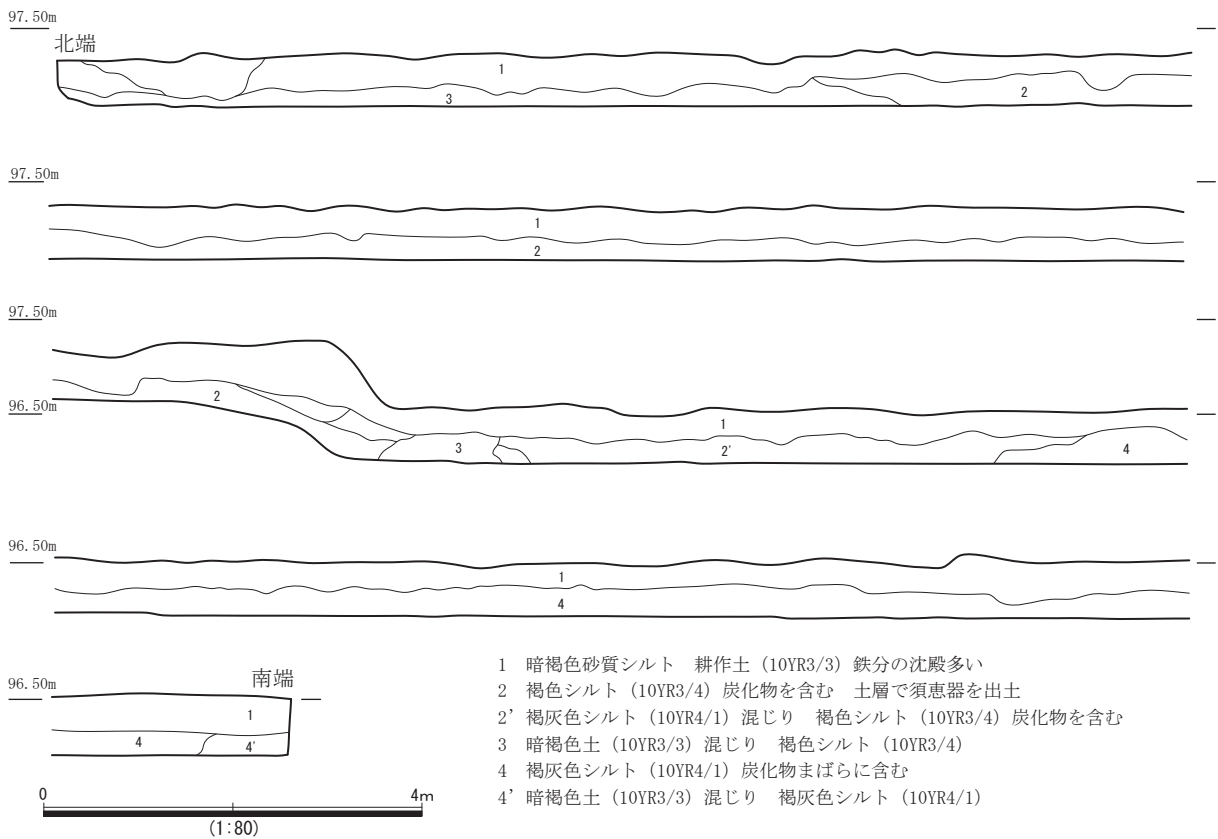


図1-10 暗渠排水整備事業確認調査 A地区確認箇所位置図

【A-1 土層断面図】



A1 北半 (北西から)



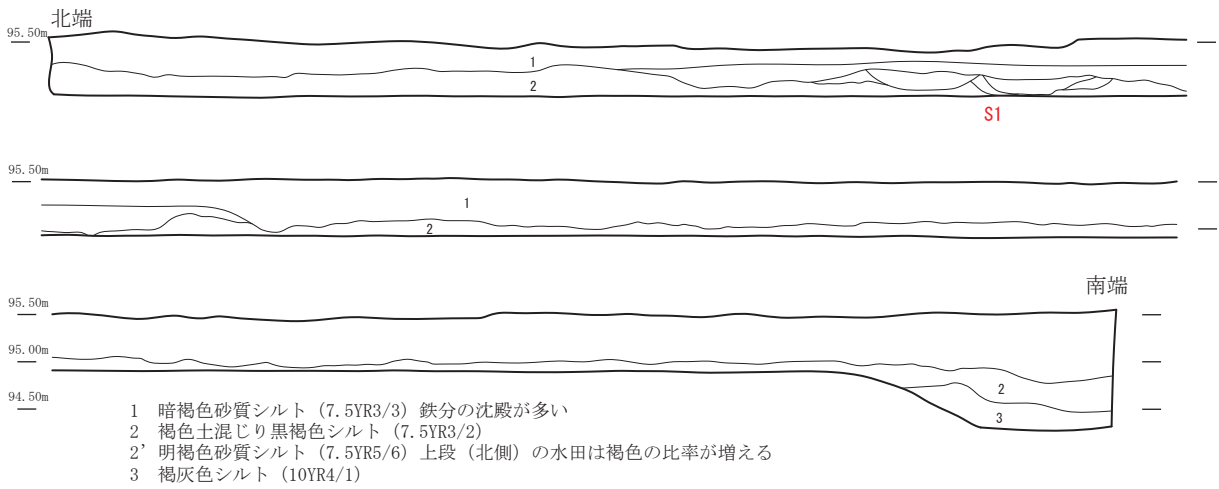
A1 南半 (北西から)



堆積状況 (西から)

図1-11 暗渠排水整備事業確認調査 A-1 土層図

【A-2 土層断面図】



【竪穴状遺構 (S1) 土層図】

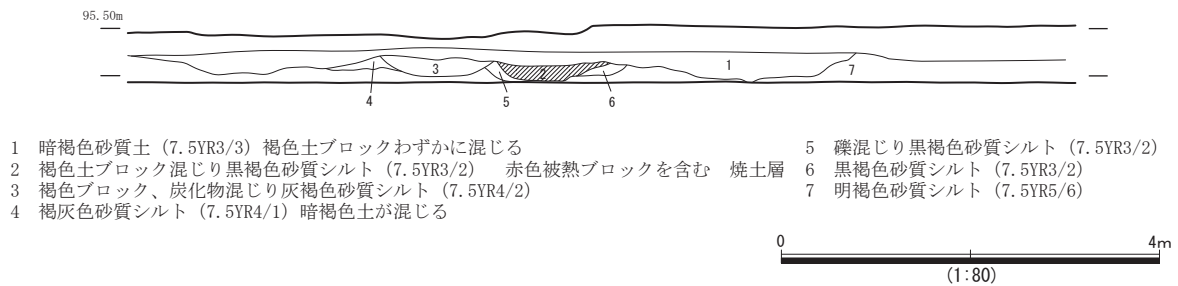
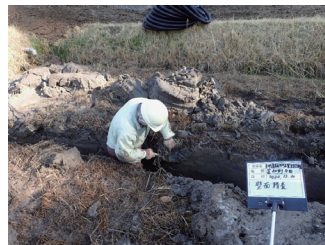


図1-12 暗渠排水整備事業確認調査 A-2 土層図



夕田地区水田遠景 (西から)



作業風景 (西から)



A-2 北半 (北から)



A-2 南半 (北から)



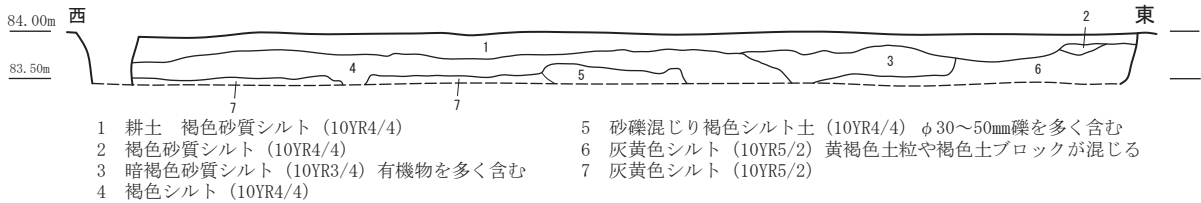
A-2 竪穴状遺構 S1 : 2層下部からの短頸壺片出土状況 (西から)

図1-13 A-2 (北洞遺跡) 調査区写真

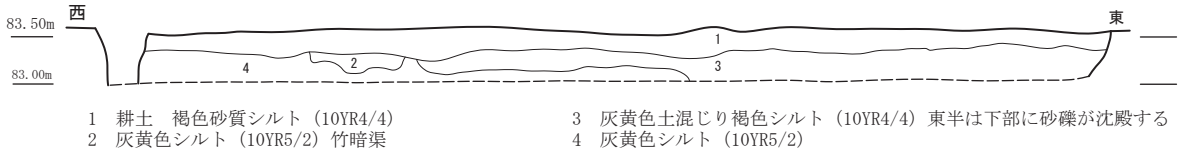


図1-14 暗渠排水整備事業確認調査 B地区確認箇所位置図

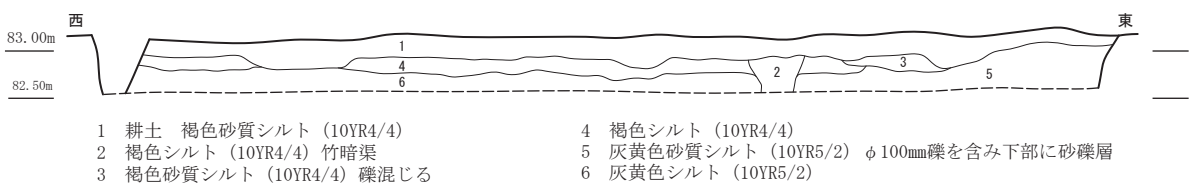
【B-1 土層断面図】



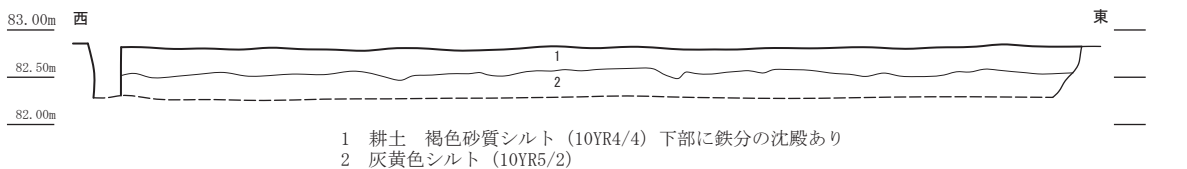
【B-2 土層断面図】



【B-3 土層断面図】



【B-4 土層断面図】



【B-5 土層断面図】

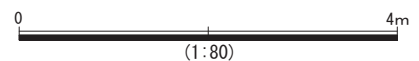
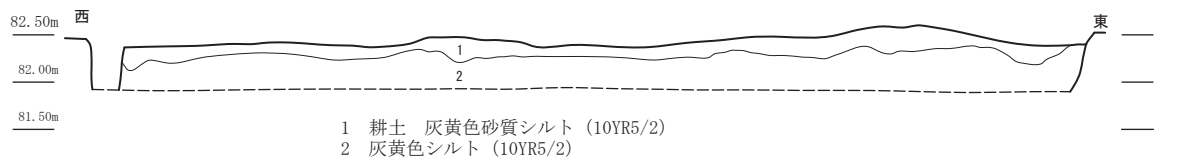
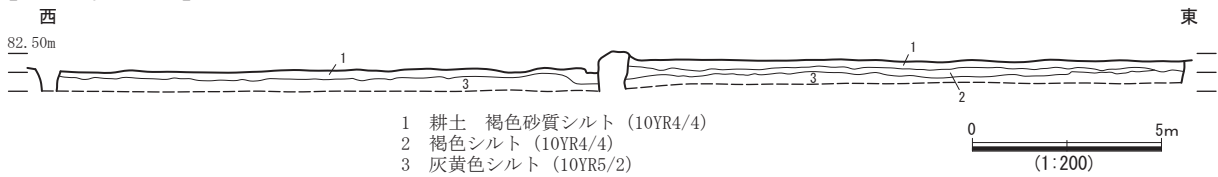
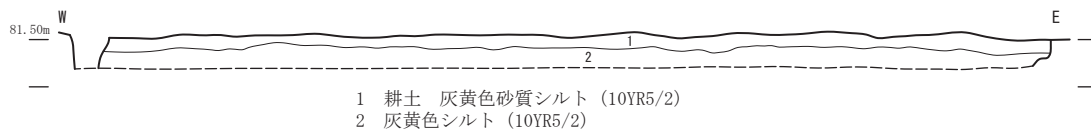


図1-15 暗渠排水整備事業確認調査 B-1～B-5土層図

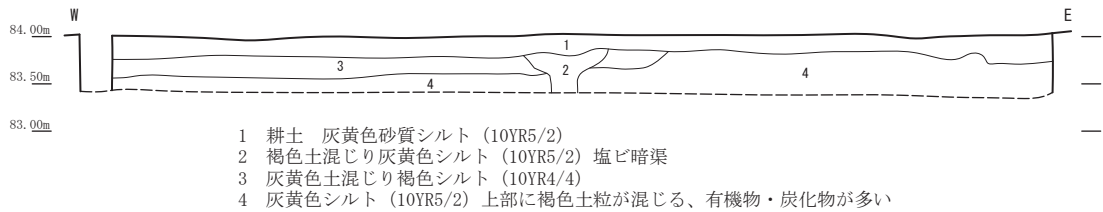
【B-6 土層断面図】



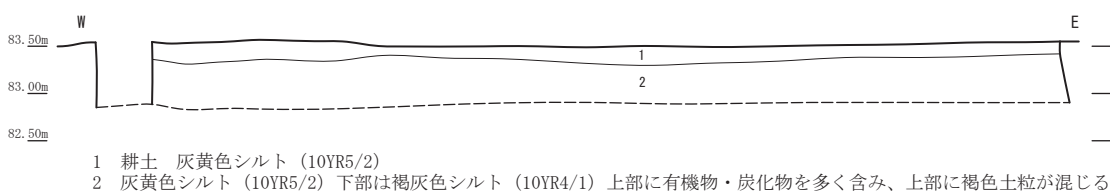
【B-7 土層断面図】



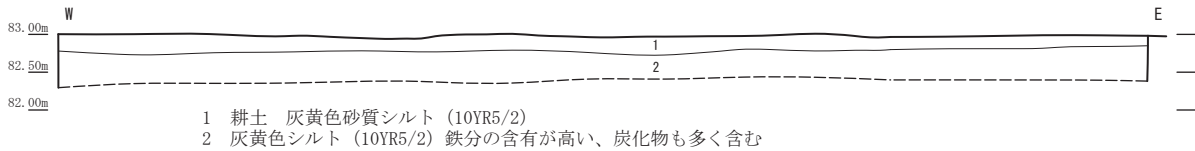
【B-8 土層断面図】



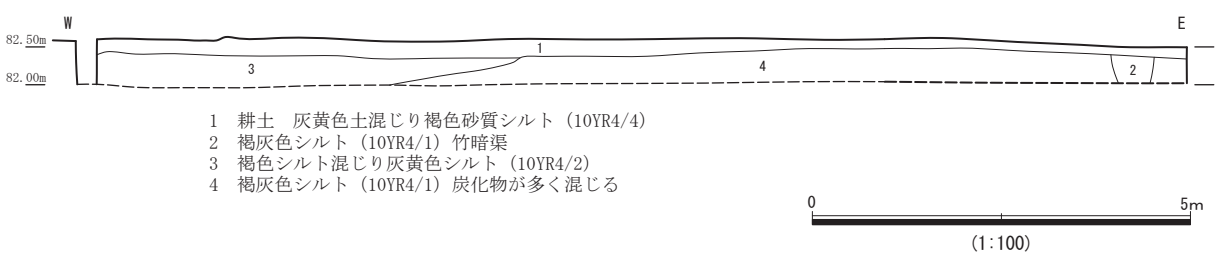
【B-9 土層断面図】



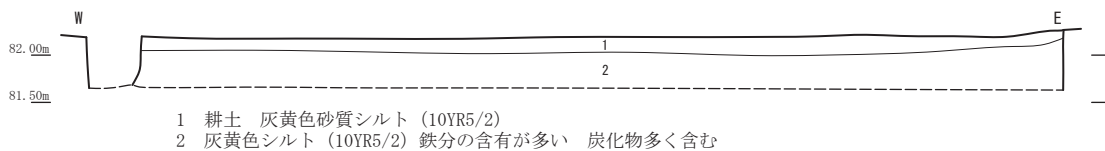
【B-10(東) 土層断面図】



【B-10(西) 土層断面図】



【B-11 土層断面図】



【B-12 土層断面図】

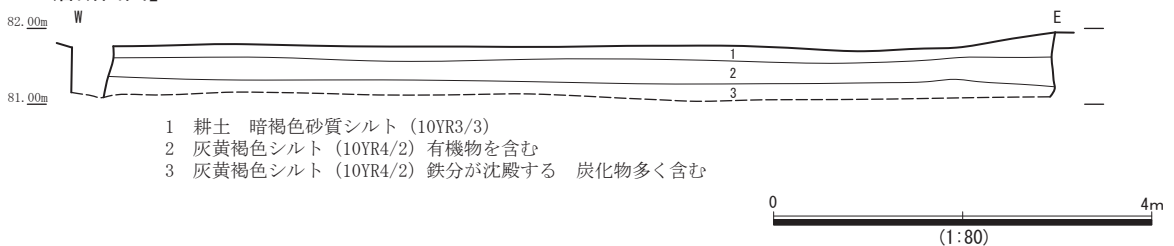
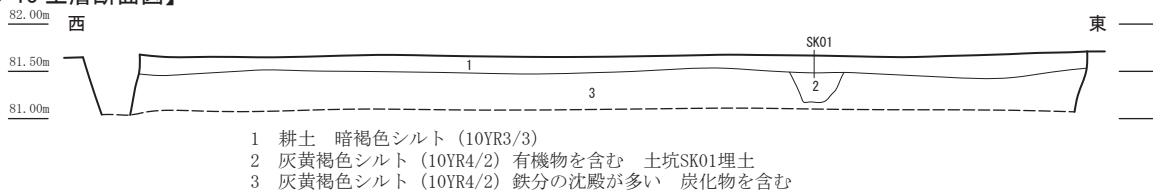
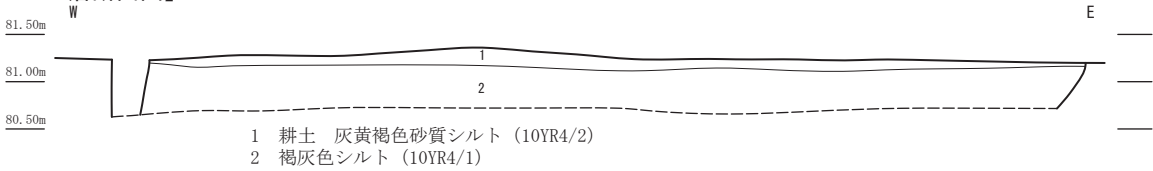


図1-16 暗渠排水整備事業確認調査B-6～B-12土層図

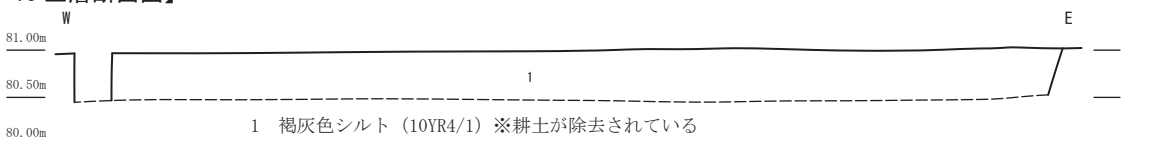
【B-13 土層断面図】



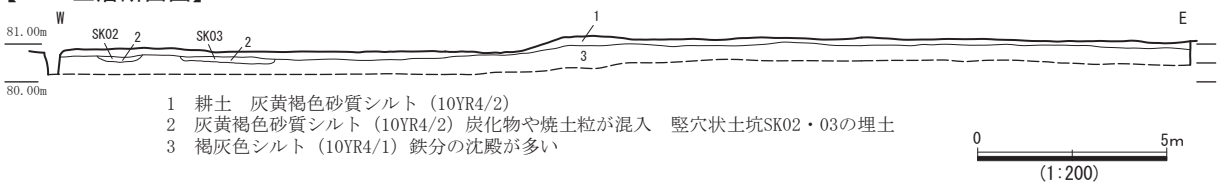
【B-14 土層断面図】



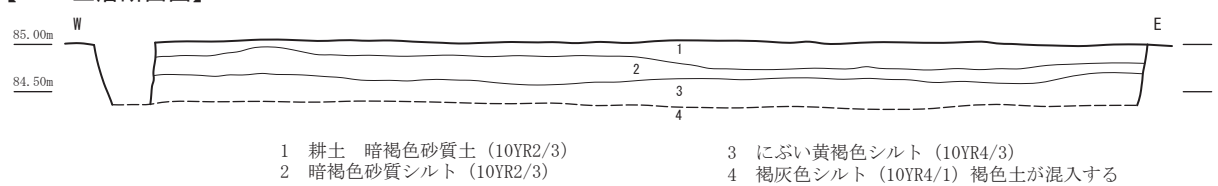
【B-15 土層断面図】



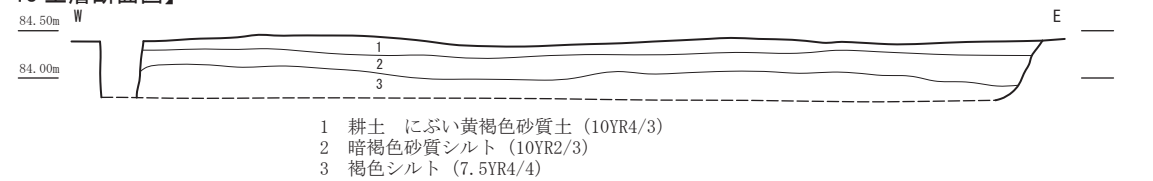
【B-16 土層断面図】



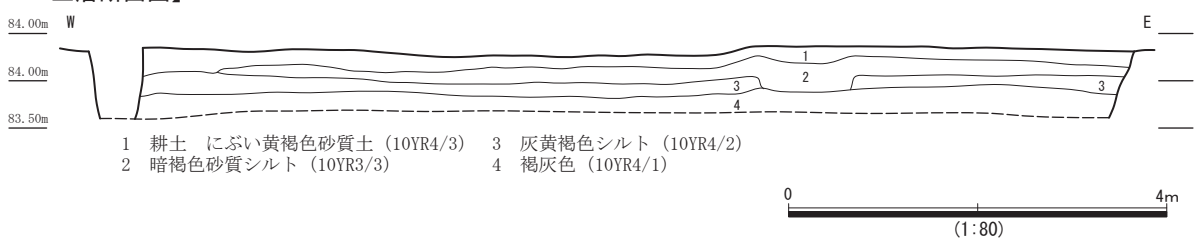
【B-17 土層断面図】



【B-18 土層断面図】



【B-19 土層断面図】



【B-20(東) 土層断面図】

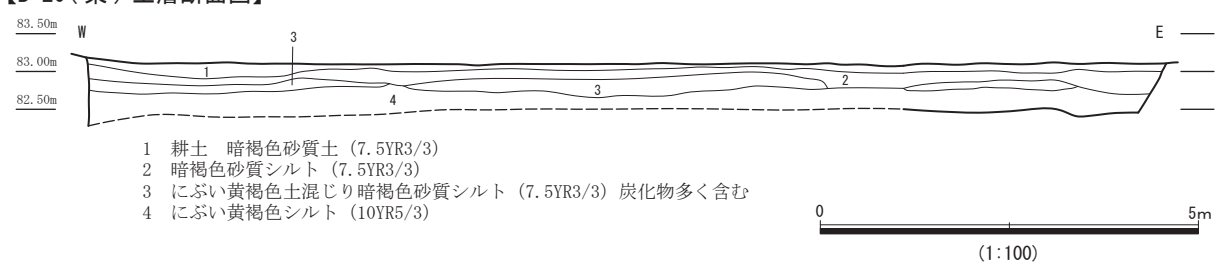
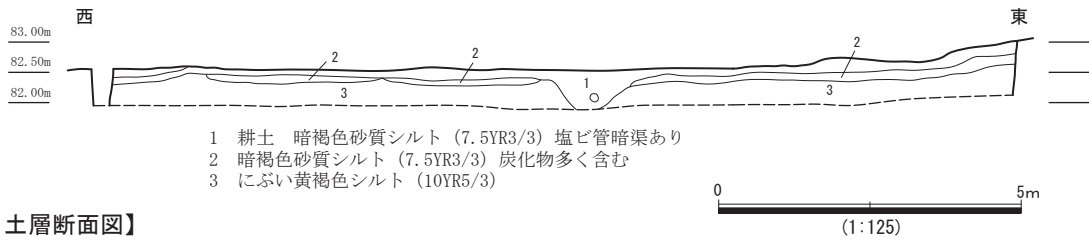
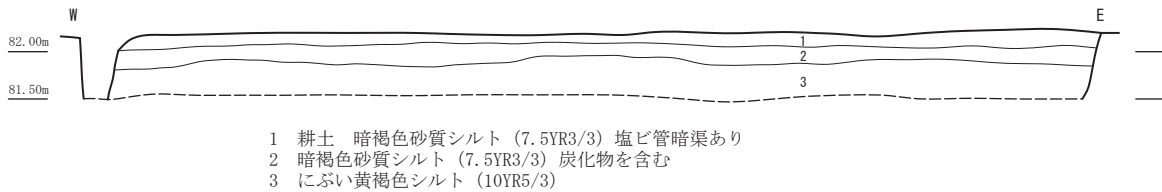


図1-17 暗渠排水整備事業確認調査 B13～B20(東) 土層図

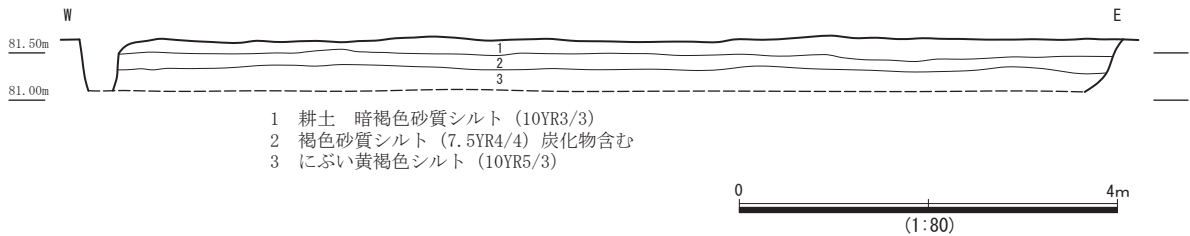
【B-20(西) 土層断面図】



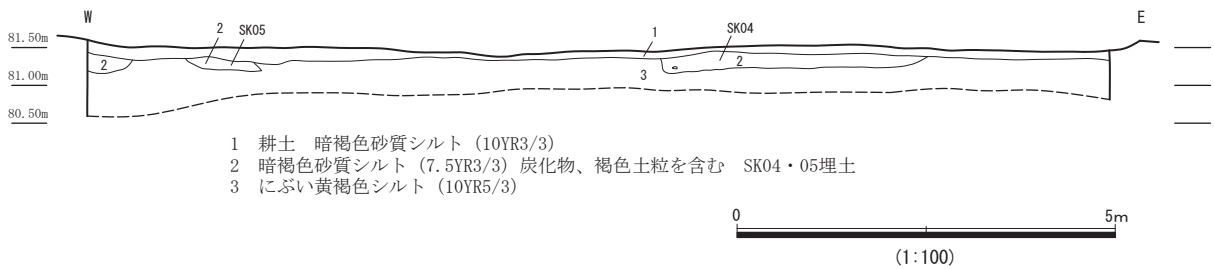
【B-21 土層断面図】



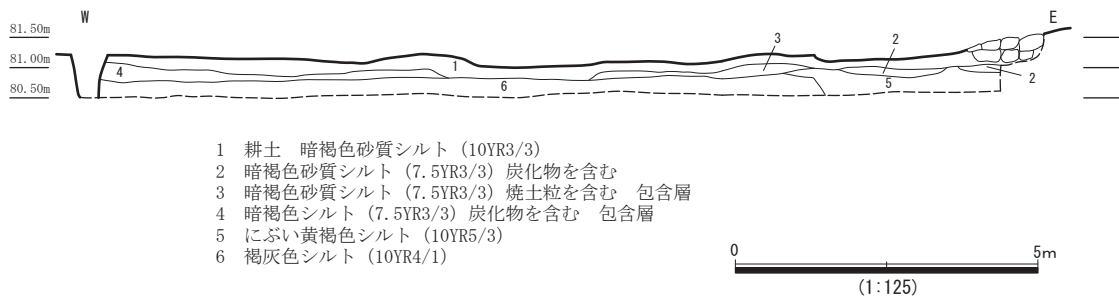
【B-22 土層断面図】



【B-23(東) 土層断面図】



【B-23(西) 土層断面図】



【B-24 土層断面図】

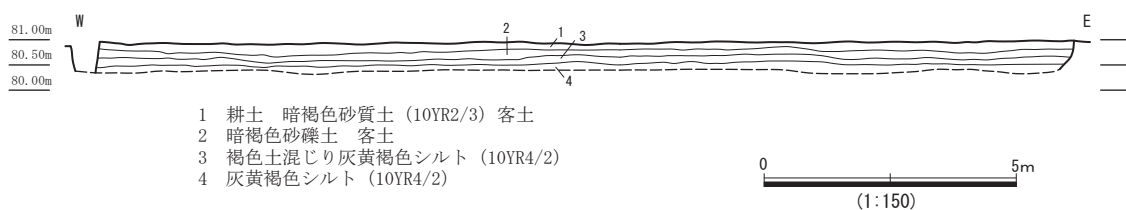
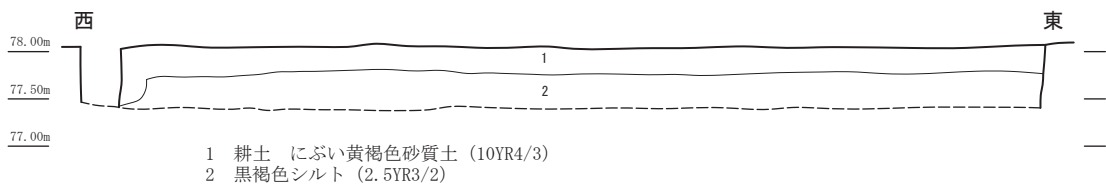


図1-18 暗渠排水整備事業確認調査 B-20(西)～B-24 土層図

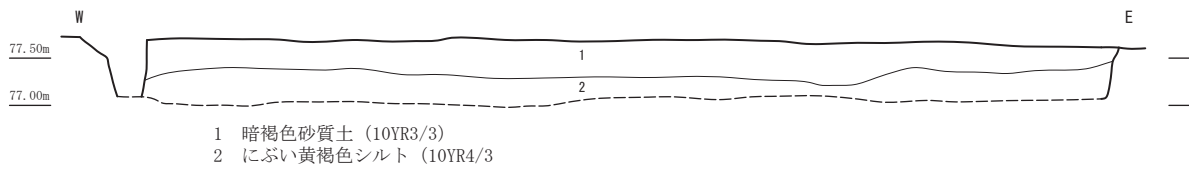


図1-19 暗渠排水整備事業確認調査 C地区確認箇所位置図

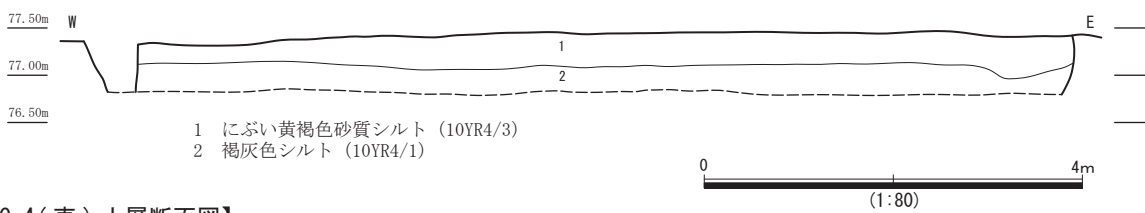
【C-1 土層断面図】



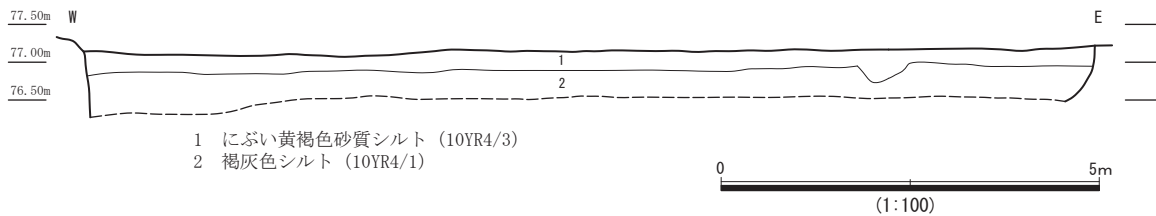
【C-2 土層断面図】



【C-3 土層断面図】



【C-4(東) 土層断面図】



【C-4(西) 土層断面図】

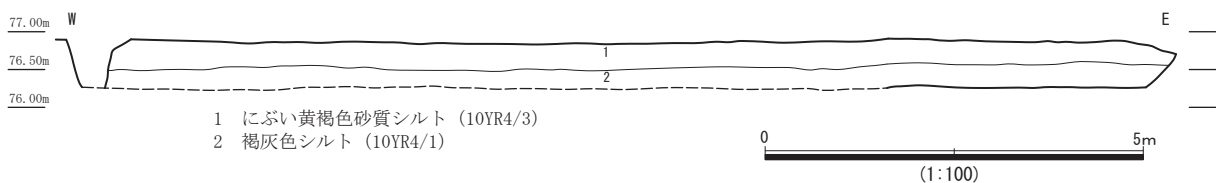
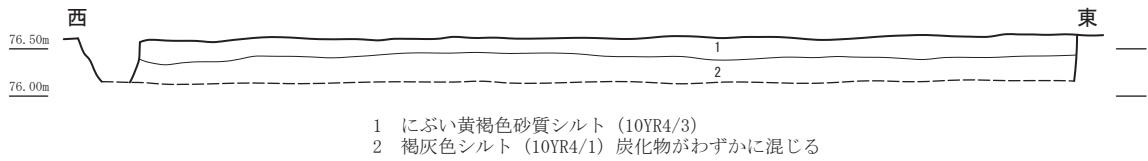


図1-20 暗渠排水整備事業確認調査 C-1～C-4(西)土層図

【C-5 土層断面図】



【C-6 土層断面図】

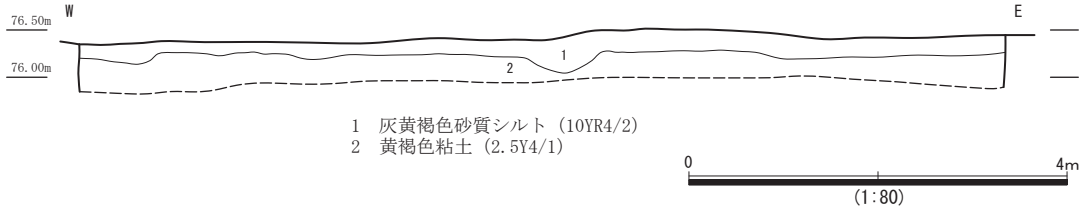
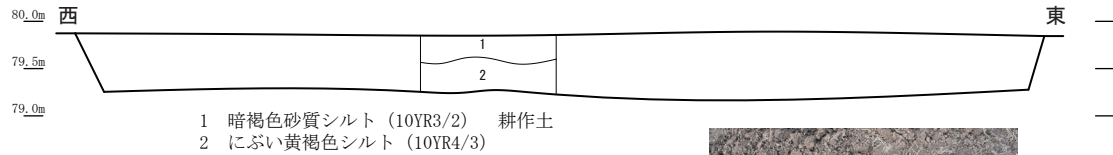


図1-21 暗渠排水整備事業確認調査 C-5～C-6土層図



図1-22 暗渠排水整備事業確認調査 D地区確認箇所位置図

【D-1 土層断面図】



【D-2 土層断面図】

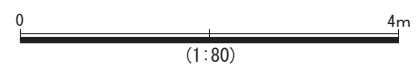
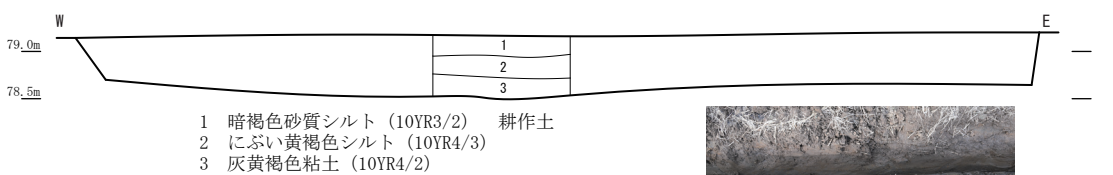
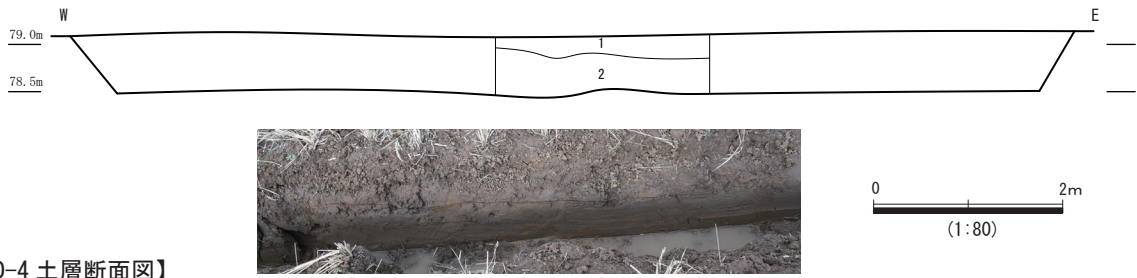
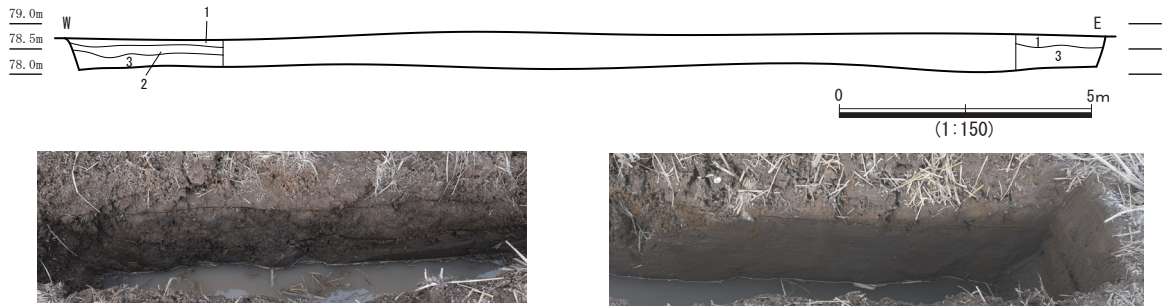


図1-23 暗渠排水整備事業確認調査 D-1～D-2土層図

【D-3 土層断面図】



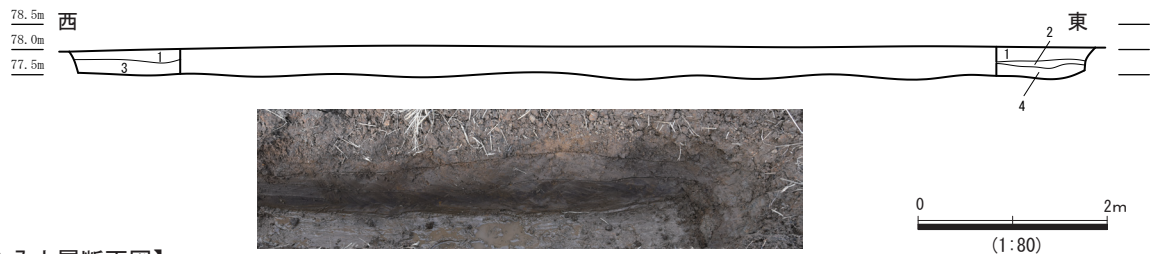
【D-4 土層断面図】



【D-5 土層断面図】



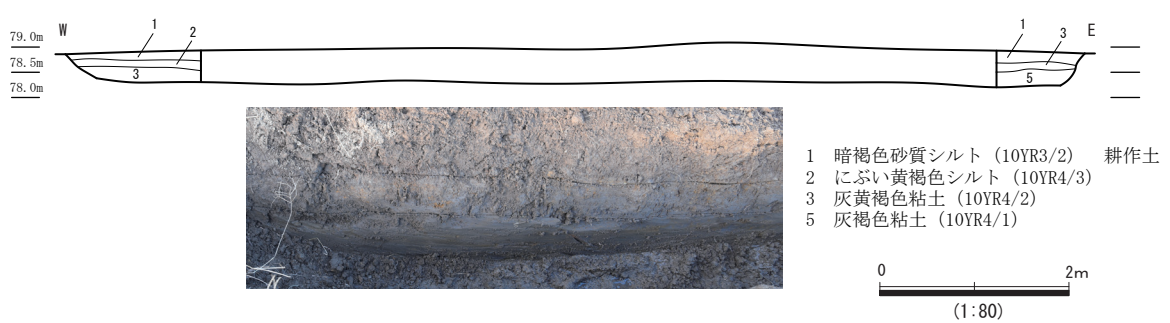
【D-6 土層断面図】



【D-7 土層断面図】



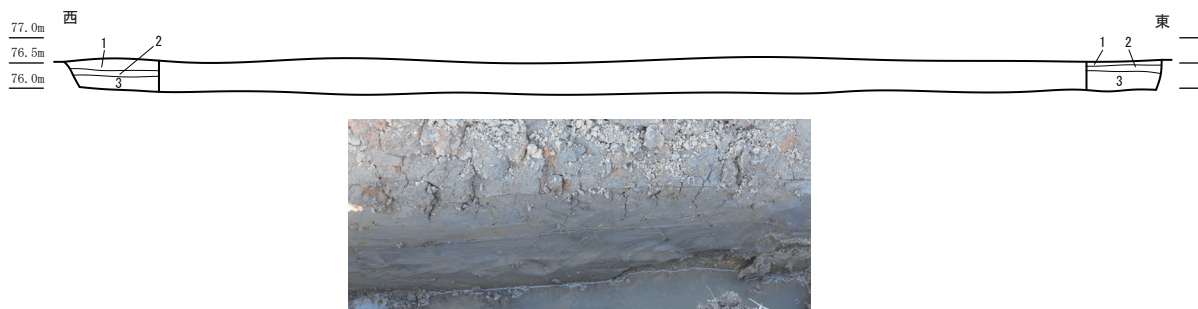
【D-8 土層断面図】



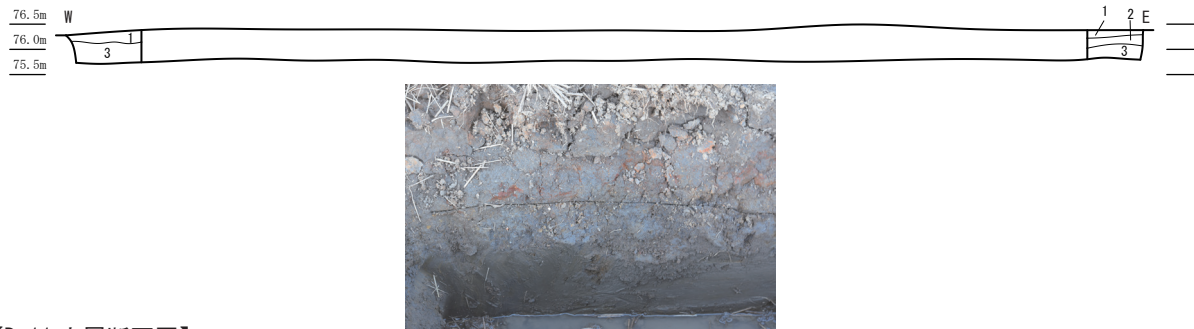
- 1 暗褐色砂質シルト (10YR3/2) 耕作土
- 2 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)
- 3 灰黄褐色粘土 (10YR4/2)
- 5 灰褐色粘土 (10YR4/1)

図1-24 暗渠排水整備事業確認調査 D-3～D-8土層図

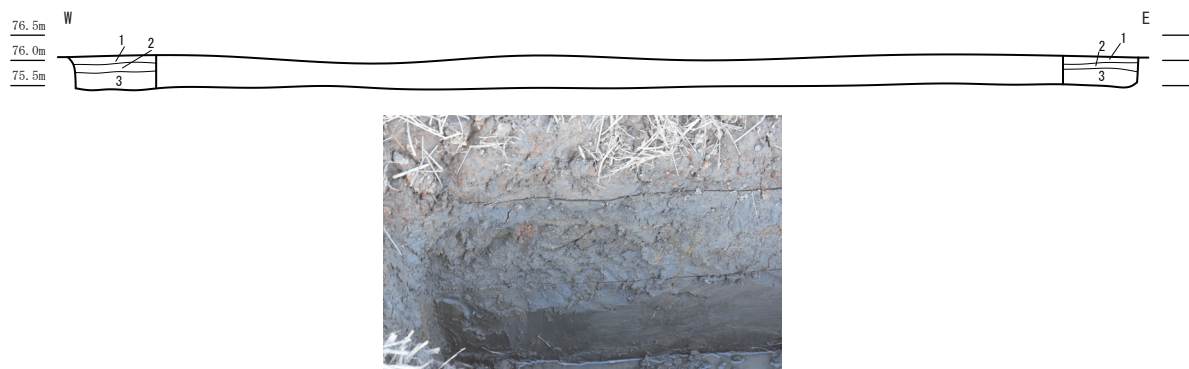
【D-9 土層断面図】



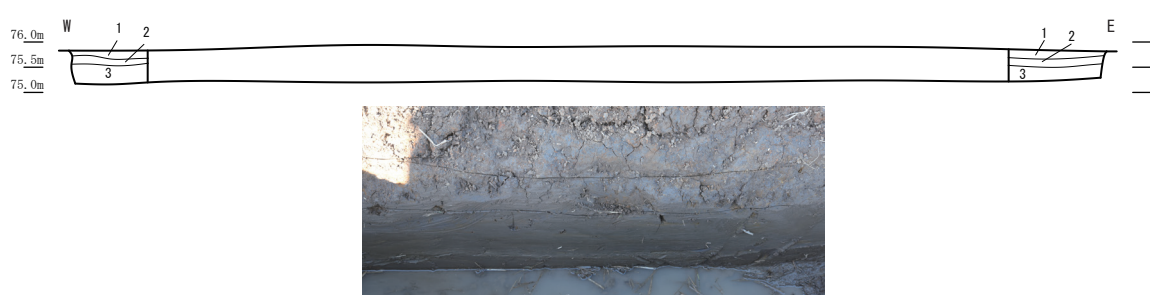
【D-10 土層断面図】



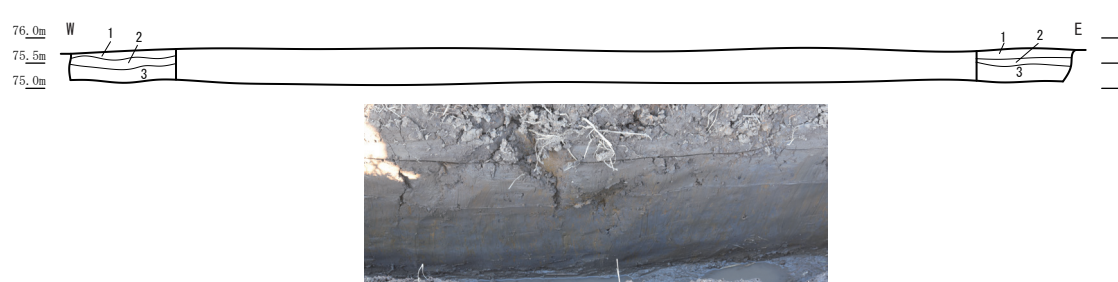
【D-11 土層断面図】



【D-12 土層断面図】



【D-13 土層断面図】



- 1 暗褐色砂質シルト (10YR3/2) 耕作土
- 2 にぶい黄褐色シルト (10YR4/3)
- 3 灰黄褐色粘土 (10YR4/2)

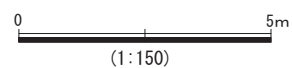
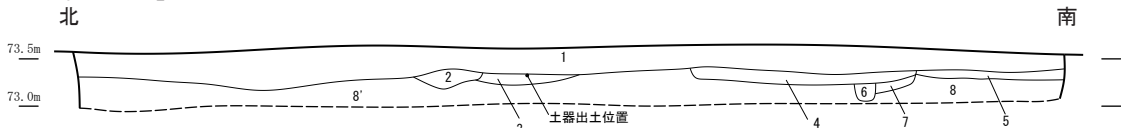


図1-25 暗渠排水整備事業確認調査 D-9～D-13土層図

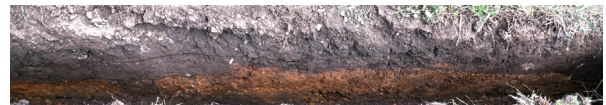


図1-26 暗渠排水整備事業確認調査 E地区確認箇所位置図

【E-1 土層断面図】

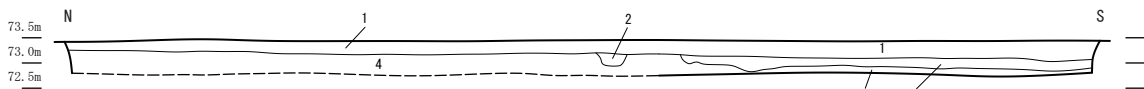


- 1 極暗褐色砂質土 (7.5YR2/3) 現耕作土
- 2 黒褐色砂質土 (10YR2/1)
- 3 褐色砂質シルト (10YR3/4) ϕ 30~50の砂岩礫を多く含む
- 4 黒褐色砂質シルト (10YR3/2) 炭化物をまばらに含む 遺構埋土
- 5 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 褐色土ブロックを多く含む 遺構埋土
- 6 黒褐色砂質シルト (7.5YR3/2) 褐色土粒をまばらに含む 遺構埋土
- 7 褐色砂質シルト (10YR4/6) 炭化物、焼土粒を含む 被熱層か ※炉床の可能性あり
- 8 褐色シルト (10YR4/6) 地山
- 8' 黒色土混じり褐色シルト (10YR4/6) ϕ 30~50の砂岩礫混じる ※8と8'の境界は漸移的



0 2m
(1:80)

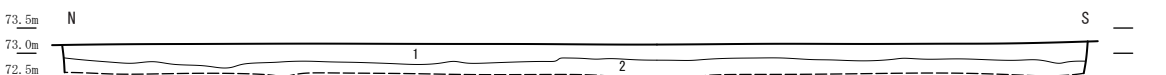
【E-2 土層断面図】



- 1 極暗褐色砂質土 (7.5YR2/3) 現耕作土
- 2 黒色シルト (7.5YR2/1) 炭化物をまばらに含む SK埋土 肩部崩落堆積がみられる
- 3 黒色シルト (7.5YR2/1) 下部と地山(4層)との境界は漸移的であり、水田耕土の可能性を考えたい
- 4 褐色シルト (10YR4/6) 下部は100程度の礫層となる



【E-3 土層断面図】



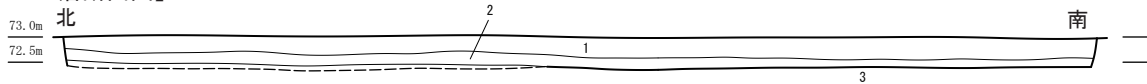
- 1 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 現耕作土
- 2 黒色シルト (7.5YR2/1) 下部はやや明るい土色となる 水田床土



0 5m
(1:150)

図1-27 暗渠排水整備事業確認調査 E-1~E-4土層図

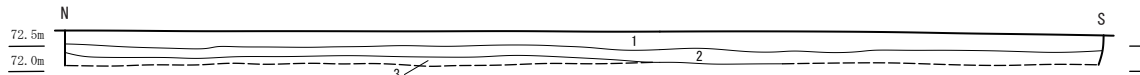
【E-4 土層断面図】



- 1 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 現耕作土
- 2 黒色シルト (7.5YR2/1) 水田床土
- 3 褐色粘土 (10YR4/4)



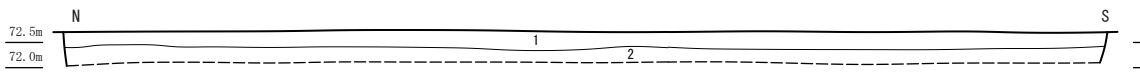
【E-5 土層断面図】



- 1 黒褐色砂質シルト (10YR2/2) 現耕作土
- 2 黒褐色シルト (10YR3/1) 水田床土, 褐色土ブロック混入
- 3 褐色粘土 (10YR4/4)



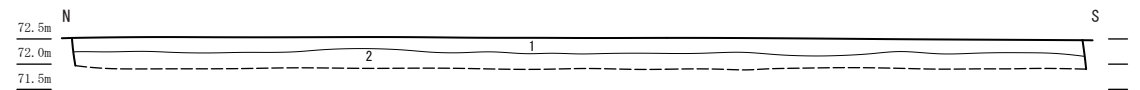
【E-6 土層断面図】



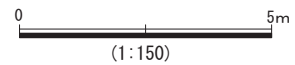
- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 現耕作土
- 2 黒色シルト (10YR2/1) 水田床土
下部は地山との漸移層となり色調がやや明るい



【E-7 土層断面図】



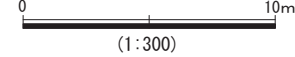
- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 現耕作土
- 2 黒色シルト (10YR2/1) 水田床土
下部は漸移層で褐色土ブロックがまばらに混入する



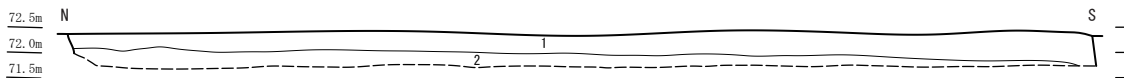
【E-8 土層断面図】



- 1 黒褐色シルト (10YR3/2) 下部は褐灰色 (10YR4/1) に漸移的に土色が変わる
- 2 黒色シルト (10YR2/1) 須恵器片が出土しており生活層と考えられる
- 3 にぶい黄褐色粘土 (10YR5/4) 1層との境界は黄褐色 (10YR6/4) に漸移的に変わる



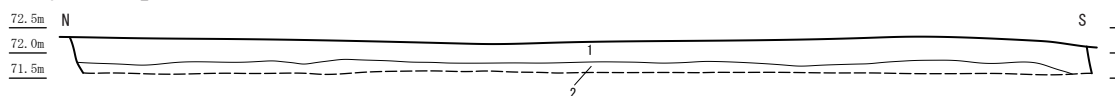
【E-9 土層断面図】



- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 現耕土
- 2 にぶい黄褐色粘土 (10YR6/4) 鉄分沈殿あり



【E-10 土層断面図】



- 1 黒褐色シルト (10YR3/1) 現耕土
- 2 灰黄褐色粘土 (10YR6/2) 南端ではやや暗い土色 (10YR4/2) 変化は漸移的

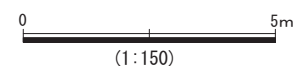


図1-28 暗渠排水整備事業確認調査 D-6～D-13 土層図

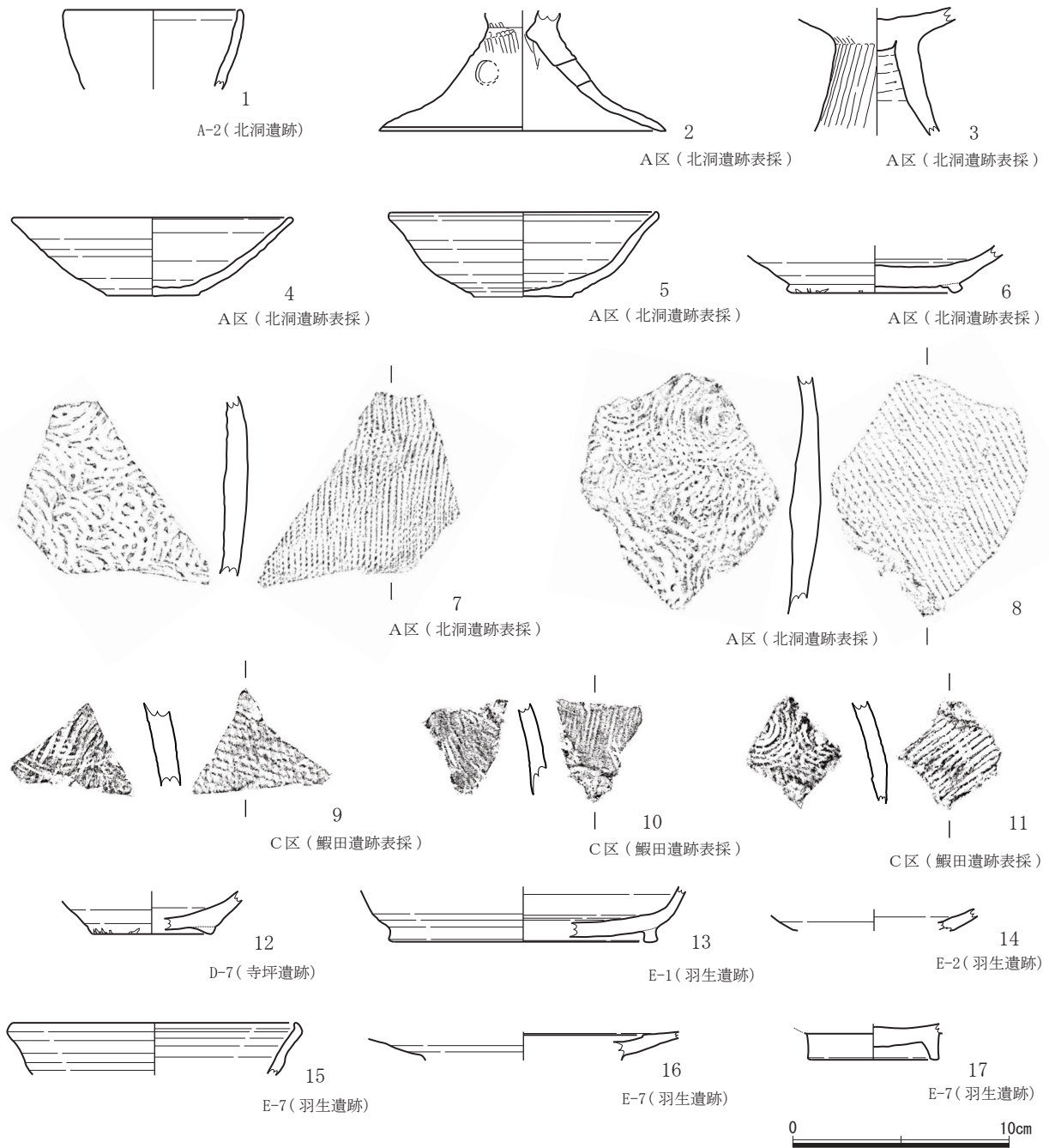


図1-29 暗渠確認調査事業遺物実測図 (S=1/3)

表1-1 暗渠排水事業出土遺物観察表

報告番号	地区	遺跡名	層位等	種類	器種	時期	口径	器高	その他	調整等
1	A-2	北洞	2層	弥生土器	直口壺	廻間Ⅰ式後半～Ⅱ式前半	(8.2)	—		外面ナデ
2	A	北洞	表採	弥生土器	高坏	廻間Ⅱ式前半	—	—		外面ミガキ、内面ナデ
3	A	北洞	表採	弥生土器	高坏	廻間Ⅰ式後半	—	—		外面ミガキ、内面ヨコナデ
4	A	北洞	表採	山茶碗	椀	脇之島3	(128)	3.7		内外面ロクロナデ、底部糸切り
5	A	北洞	表採	山茶碗	椀	大洞東1	(122)	3.9	底径7.5	内外面ロクロナデ、底部糸切り
6	A	北洞	表採	山茶碗	椀	南部系6型式	—	—		内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台貼付後ナデ
7	A	北洞	表採	須恵器	甕	美濃須衛窯	—	—		外面叩き目、内面同心円状当て具痕
8	A	北洞	表採	須恵器	甕	美濃須衛窯	—	—		外面叩き目、内面同心円状当て具痕
9	C	鰐田	表採	須恵器	甕	美濃須衛窯	—	—		外面叩き目、内面同心円状当て具痕
10	C	鰐田	表採	須恵器	甕	美濃須衛窯	—	—		外面叩き目、内面同心円状当て具痕
11	C	鰐田	表採	須恵器	甕	美濃須衛窯	—	—		外面叩き目、内面同心円状当て具痕
12	D-7	寺坪	2層	山茶碗	椀	明和1～大畑大洞4	—	—	底径5.4	内外面ロクロナデ、底部糸切り、高台貼付後ナデ
13	E-1	羽生	地上上面	須恵器	高台坏	美濃須衛Ⅳ-2	—	—	底径11.8	内外面ロクロナデ、底部ヘラ切り、高台貼付後ナデ
14	E-2	羽生	1層	土師器	皿	かわらけ	—	—		外面ヨコナデ
15	E-7	羽生	2層	山茶碗	椀	白土原1～明和1	(130)	—		内外面ロクロナデ
16	E-8	羽生	2層	灰釉陶器	段皿	O-53	—	—		外面ロクロナデ
17	E-9	羽生	2層	古瀬戸?	天目茶碗		—	—	底径6.0	内面底鉄釉、高台削り出し

杉洞1号墳隣接地の試掘調査

・調査原因 宅地分譲地造成造成 ・調査種別 試掘調査 ・所在地 夕田杉洞

・調査期間 令和4年3月23～25日

・試掘調査に至る経緯

富加町夕田字杉洞地内における分譲敷地造成工事について事業者から町都市計画部局への開発事業計画の提出を受け、次の3点を指示事項として提示した。①開発事前協議にて合意したとおり杉洞1号墳の現状保存を確実に図ること、②工事計画地と杉洞1号墳の位置関係を現地にて明示すること、③杉洞1号墳の隣接地であるため事前の埋蔵文化財試掘調査（以下、試掘調査）を実施すること。これを受け、③について令和4年2月25日に事業者と協議がおこなわれ、試掘調査の実施で合意し、令和4年3月5日付で地権者から承諾書の提出を受けて調査の準備に入った。

・試掘個所の選定

杉洞1号墳に関連する遺構が工事計画地内に広がっていないかを確認する観点での調査トレンチ（以下、トレンチ）を設定した。工事計画地の北半は低丘陵、南半は低地が広がり、丘陵と平地の間に北東と南西から谷が入り込んでおり、杉洞1号墳は南西から入り込む谷側に築造されている。北半の低丘陵は踏査を実施したが古墳らしき高まりはない。

現地形の観察から丘陵部の南裾には東西から狭い埋没浅谷が入り込んでおり、この部分には墓域や建物の展開は難しいと予想されるので、谷を避けて平地部にトレンチ（T①～T⑥）を設置した。ただし、対象地は非常に密に植林されているため、これらを避けながら掘削が可能な場所6箇所を調査した。

・調査所見

T④で土坑を確認したが遺物の出土は無く所蔵時期は不明である。埋土は表土に近い土であったので近現代の掘削と考えられる。上記以外のトレンチからは遺構・遺物とも確認されなかった。

調査区の基本層序は以下のとおりであった。

I層：表土、II層：土壤層（暗褐色土）、III層：地山層（褐色砂質シルト）

IV層：風化基盤層（凝灰岩基盤）

調査区の堆積の特徴として、腐葉土を剥ぐとすぐに地山層（III層）が露呈するケースが多い。3・6トレンチにおいては表土直下に凝灰岩風化基盤層（IV層）を検出している。杉洞1号墳確認調査時（平成28年）に周辺の堆積状況を確認するために掘削したトレンチにおいても同様な状況であった。こうした土壤層の堆積が無い又は薄いという状況は、杉洞1号墳築造時に周辺の表土を切り取って盛土としたのではないかとの調査所見と調和的である。

今回の試掘調査で遺構・遺物の確認が無いことから、当該工事計画地には墓域や集落が展開した可能性は低いと考えられる。

・開発事業の対応

今回の調査において埋蔵文化財の確認は無かった。現在の工事計画地での開発工事着手は問題が無いと考えるが杉洞1号墳の隣接地であるため、事業者は施工に際して十分注意を払い、もし埋蔵文化財を発見した場合は速やかに富加町教育委員会と協議することとした。また、工事計画範囲や内容を変更する場合は必ず富加町教育委員会と事前に協議し、必要であれば再度試掘調査を実施することとした。

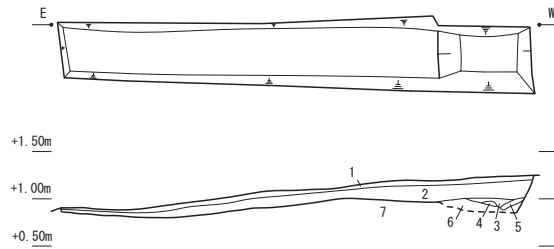


対象地近景（北から）

- T① 1m×5m
- T② 1m×5m
- T③ 1m×5m
- T④ 1m×5m
- T⑤ 1m×5m
- T⑥ 1m×5m

図1-30 杉洞1号墳周辺 R03 地点 試掘調査位置図

【T①】



- 1 表土(腐葉土)
- 2 暗褐色砂質土(7.5YR2/4)
- 3 褐色砂質土(7.5YR4/3)
- 4 赤褐色砂質シルト(2.5YAR4/6)
- 5 褐色砂質土(7.5YR4/3)
- 6 褐色砂質シルト(7.5YR4/3)
- 7 褐色砂質シルト(7.5YR4/6)地山

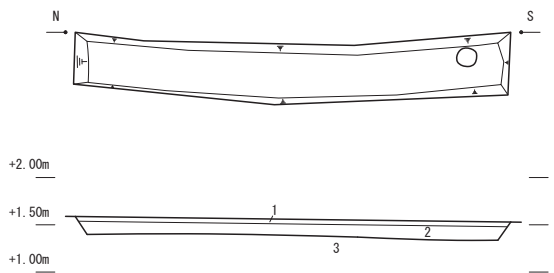


T①完掘（北東から）



T①完掘（南西から）

【T②】



- 1 表土(腐葉土)
- 2 褐色砂質土(7.5YR4/6)
- 3 赤褐色砂質土(5YR4/8)、凝灰岩基盤層、地山



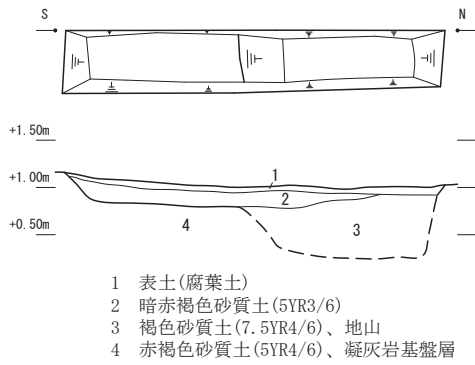
T②完掘（北西から）



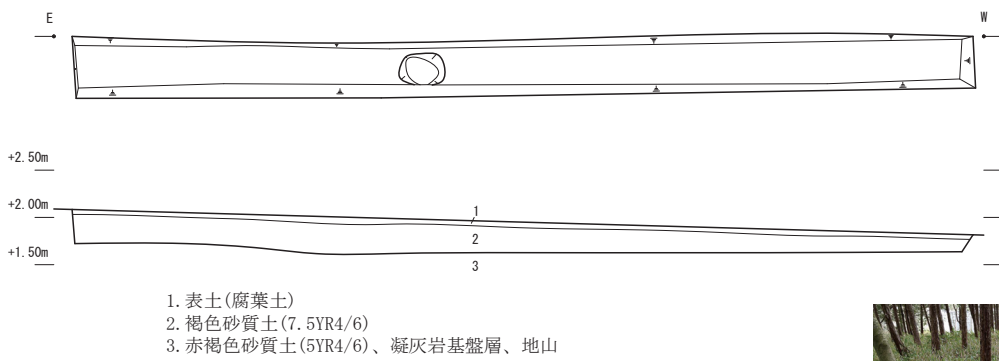
T②堆積状況（東から）

図1-31 杉洞1号墳周辺 R03 試掘調査 T①・T②

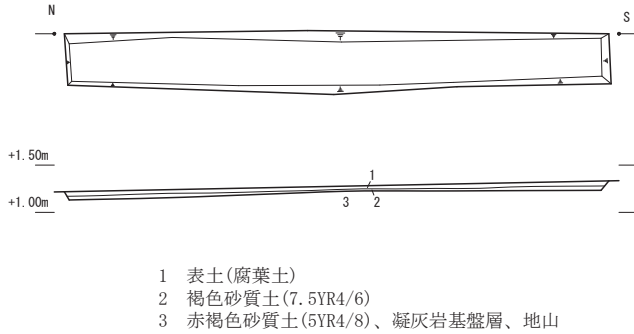
【T③】



【T④】



【T⑤】



【T⑥】

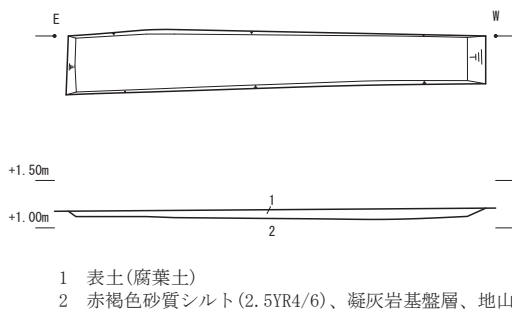


図1-32 杉洞1号墳周辺R03 試掘調査T③～T⑥

蓮野遺跡 H25 地点立会調査

- ・調査原因 管敷設工事 ・調査種別 立会調査 ・所在地 富加町夕田字蓮野
- ・調査期間 平成25年11月
- ・調査概要 遺構遺物の出土は無かった。

釜洞遺跡 H26 地点立会調査

- ・調査原因 個人住宅増築 ・調査種別 立会調査 ・所在地 富加町夕田字釜洞
- ・調査期間 平成26年6月25日
- ・調査概要 遺構遺物の出土は無かった。

釜洞遺跡 R3 地点立会調査

- ・調査原因 倉庫建築
- ・調査種別 立会調査
- ・所在地 富加町夕田字釜洞
- ・調査期間 令和3年5月24日
- ・調査概要

幅40cm、深さ40cmの布掘り。1層の耕作土が35cmで、地山である2層褐色砂質土に至る。層理は明瞭で、耕作の影響を受けている。遺構、遺物の出土は無かった。



釜洞遺跡 R3 地点の位置図

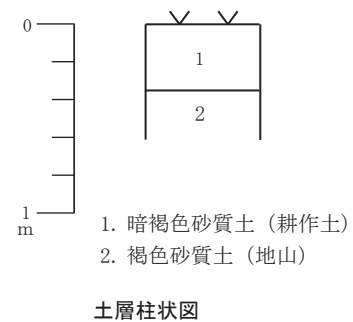


図1-33 釜洞遺跡 R3 地点

堂洞城跡 R2 地点立会調査

- ・ 調査原因 看板設置
- ・ 調査種別 立会調査
- ・ 所在地 富加町夕田字堂洞
- ・ 調査期間 令和2年10月28日
- ・ 調査概要

堂洞城跡は、永禄8年（1565）織田信長の東美濃攻略において最大の激戦地となった山城である。信長公記によれば、織田方に味方した加治田城の佐藤氏を牽制するために築かれた取出とされ、岸勘解由ら美濃方の在地諸将が詰めたとされる。堂洞城攻略に駆けつけた織田信長は山裾まで詰め、火攻めを織り交ぜながら巧みに堂洞城を攻略した。そのため近年まで堂洞城では焼米（炭化米）が出土したと伝わっている。

今回は、地元有志により地域の大切な歴史を顕彰する説明板の設置が企画された。説明板の柱部を地下に埋設するために掘削するため、立会と記録採取を行った。説明板柱用の穴は、径20cm程で深さ50cm程を掘削した。掘削後に断面図の作成と撮影を行った。

堆積状況は、1層がやや明るめの褐色砂質土、2層がにぶい褐色砂質土、3層が基盤層で凝灰岩系の礫層である。注目すべきは、2層の上部で炭化物が多く検出された点である。中には穀物類のような形状の炭化物もみられた（図1-34-写真7）。そして、こうした炭化物は1層では確認されなかった。

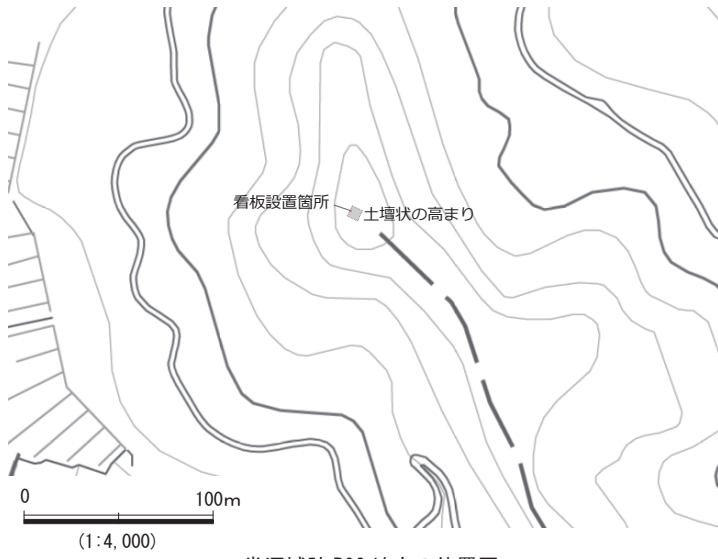
おそらく2層が丘陵地山と考えるのが妥当であり、炭化物の検出から考えて丘陵上で火を使う何らかの行為が行われた可能性が高い。そして、当該地は丘陵の頂部であり上部からの土砂の流れ込みが無い事を考えると、炭化物層を覆う1層は人為的に盛られた土と考えるのが妥当であろう。確かにやや明るく、締まりの無い土質であった。2層からは2点の不明出土遺物が出土している。粘土が被熱し焼けたものと思われる。土器の可能性もあるが特定することはできなかった。

さて、現状の地形を観察すると主郭の中央部には一辺約6mの高まりが確認できる。この高まりは概ね方形を呈しており、土壇状である。この上に今回の看板が設置されたわけであるが、立会調査で確認した1層は、この土壇状の高まりの盛土ではないだろうか。

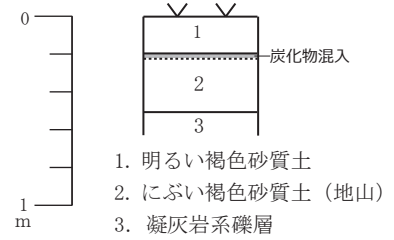
『信長公記』首巻の堂洞取出攻めに関する記述の中に、堂洞取出には「天主構」があった事が記されている。記述から考えて二ノ丸取出の奥にある事が分かるため、主郭部にあったものを指すと考えられる。この記述を信頼すれば、後の天守台のような大規模な施設ではない（高田1998）にしても、主郭に何らかの構造物があった可能性はある。まずは、こうした構造物の基礎整地の可能性が考えられる。

しかし1層を土壇状盛土とすると、その下層である2層上部で炭化物が出土している点には注意する必要がある。これらの炭化物がどのような過程で生成されたかは、現段階で詳細不明であるが、仮に上記の永禄8年（1565）織田信長による堂洞城攻めの火攻めによるものであったとすると、1層の堆積は、それ以降ということになる。つまり炭化物の生成が堂洞城攻めであると確定すれば、土壇状盛土の構築はそれ以降ということになる。ただし、この点については、江戸期に記された『堂洞軍記』等で天正10年（1583）の森長可による加治田城攻め（加治田・兼山合戦）において森氏が堂洞城を再利用したと記述されている。つまり森氏による改修も想定に入れておくべきであろう。

今回の調査ではこれ以上は踏み込めないが、今後調査が及ぶ場合は、構造物のための土壇状盛土による整地の可能性に十分留意しておくべきである。



堂洞城跡 R02 地点の位置図



- 1. 明るい褐色砂質土
- 2. にぶい褐色砂質土 (地山)
- 3. 凝灰岩系礫層

土層柱状図



1 看板設置用柱穴 土層



2 看板設置用柱穴 土層



3 炭化物採取



4 柱穴掘削風景



5 看板設置風景



6 看板設置



7 出土炭化物



8 炭化物を含んだ土壌



9 不明出土物

図1-34 釜洞遺跡 R03 地点の調査

第3節 羽生・滝田地区の調査

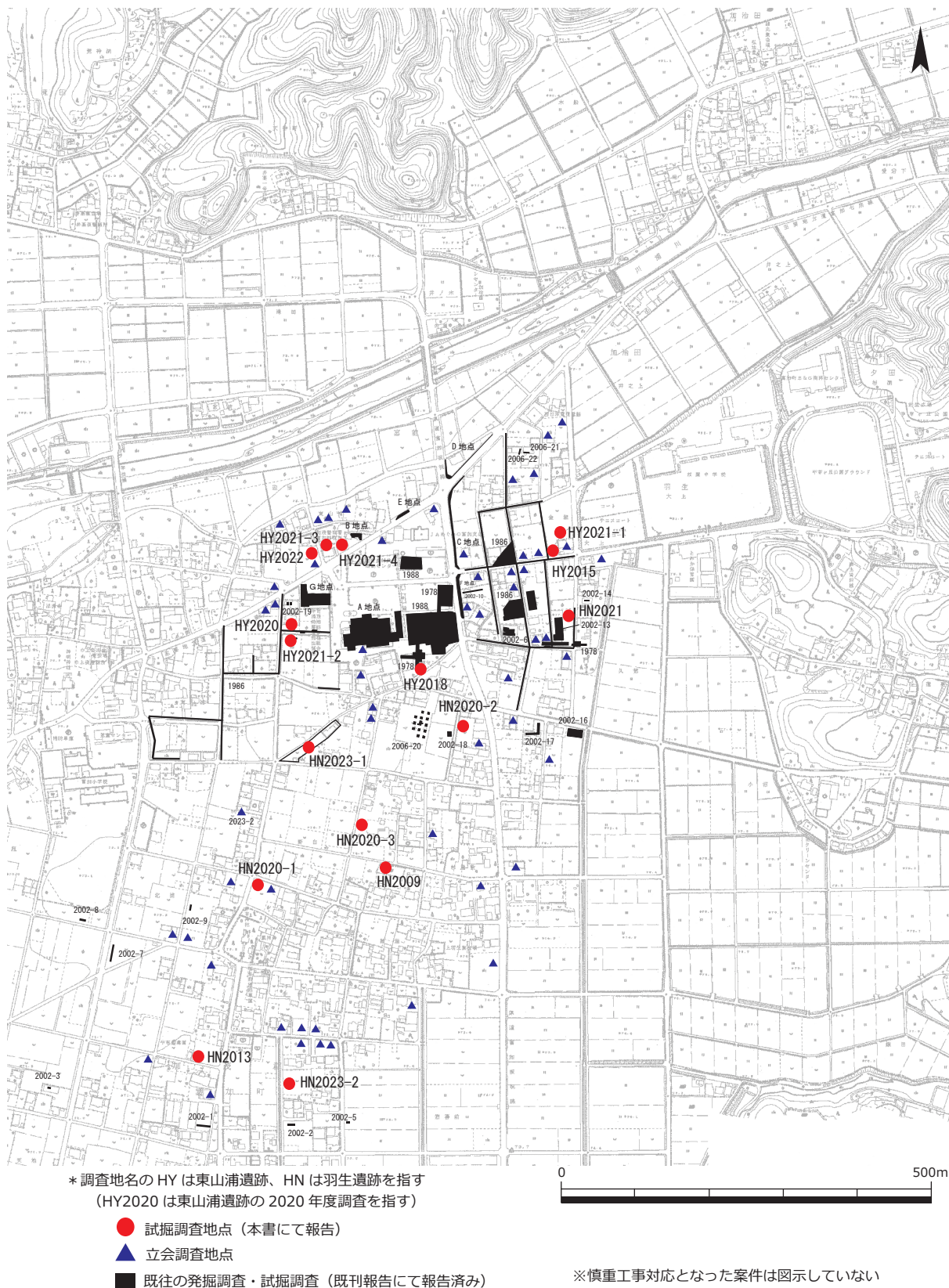


図1-35 東山浦・羽生遺跡の試掘・立会調査箇所位置図

羽生遺跡 2009 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 アパート建設
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 羽生字鍛冶屋堀
- ・ 調査期間 平成 21 年 12 月 12 日
- ・ 調査概要

羽生遺跡は、東山浦遺跡と合わせて「半布里遺跡」と呼称された遺跡であり、飛鳥時代の大宝二年（702）半布里戸籍との関係が注目される遺跡である。

周知の埋蔵文化財包蔵地にてアパート建設が計画されたため試掘調査を実施した。

対象地に 2 × 10 m と 1.5 × 5 m のトレンチ 2 箇所を設置し、遺構や遺物包含層の有無の確認を行った。

東側のトレンチは、後生の攪乱の影響を受けており、十分に堆積状況を掴めなかった。

西側のトレンチの状況から、1・2層は旧耕作土であり、60cmほどの堆積があり、3層の地山に至る。周辺で中世の山茶碗が表採されるが、トレンチ内から遺物の出土は無い。

3層と2層の層理が明瞭であることや、東側トレンチの攪乱の状況から、後生の人為的改変がかなりあるものと考えられる。包含層と考えられる堆積も認められなかった。

調査後にはアパート建設の計画は無くなり、現在は太陽光パネルが設置されている。



図 1-36 羽生遺跡 2009 地点 調査位置図

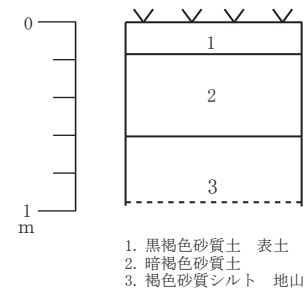


図 1-37 羽生遺跡 2009 地点土層柱状図

羽生遺跡 2013 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 事務所建設
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 羽生字鍛冶屋堀
- ・ 調査期間 平成 25 年 10 月 22 日
- ・ 調査概要

遺跡の南半部では古代の遺物が出土するのは希で、中世遺物の散布が認められる。調査地は鍛冶屋堀の地名が残っているが鍛冶屋が営まれた形跡はない。散布遺物からすれば中世～江戸期に鋳物師が展開していたのかも知れない。調査地の南には江戸期の黄檗宗寺院である大梅寺がある。

事務所棟の予定箇所に 2 × 5 m のトレンチを設置し、遺構や遺物包含層の有無の確認を行った。1・2層は旧耕作土であり、3層の地山との層理は明確である。遺物の出土はなく包含層と考えられる堆積も認められなかった。



図 1-38 羽生遺跡 H25 地点 調査位置図

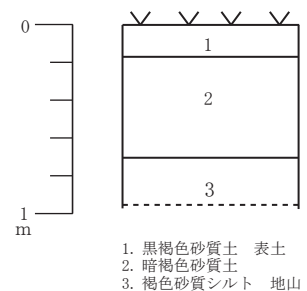


図 1-39 土層柱状図

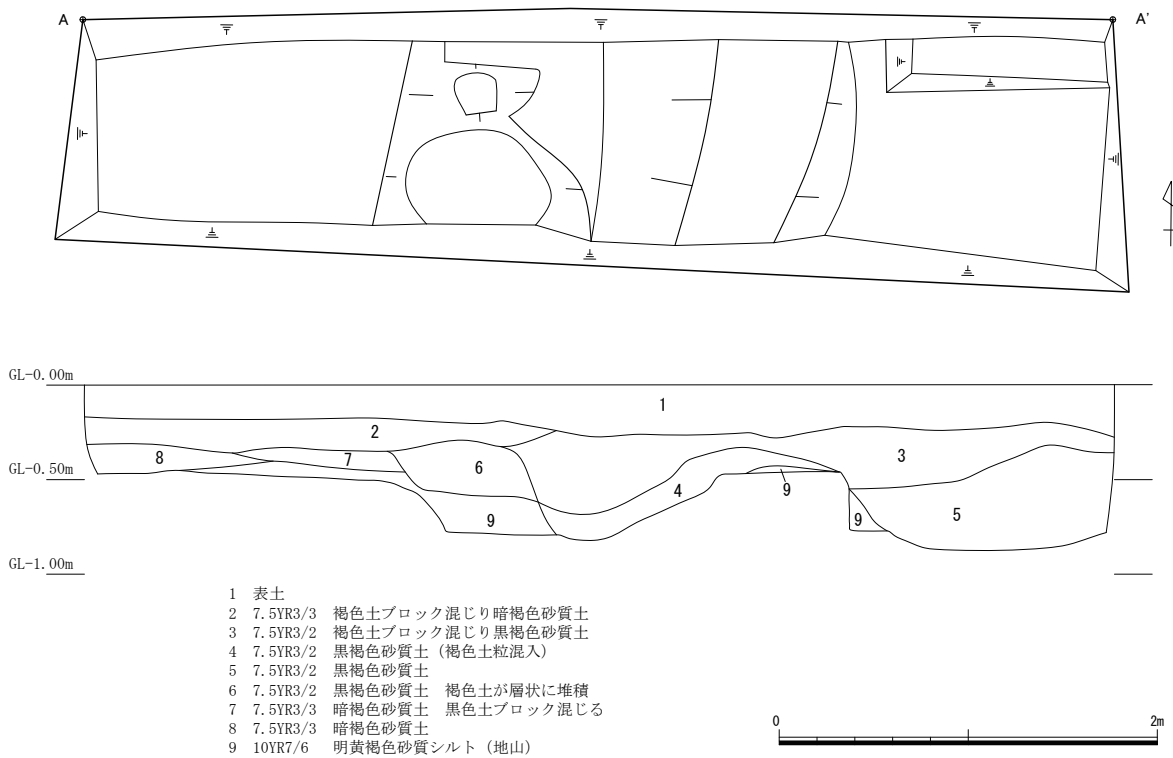
羽生遺跡 2020-1 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅新築
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 羽生字野白
- ・ 調査期間 令和2年9月29日
- ・ 調査概要

1.5 × 5.0 mのトレンチを設定した。土地改良の攪乱が地山面まで及んでおり、遺構、遺物包含層は残存していなかった。現GLから-500で地山(明黄褐色シルト)に至る。



図1-40 羽生遺跡 2020-1 地点 調査位置図



完掘状況 (東から)



完掘状況 (南西から)

図1-41 羽生遺跡 2020-1 地点

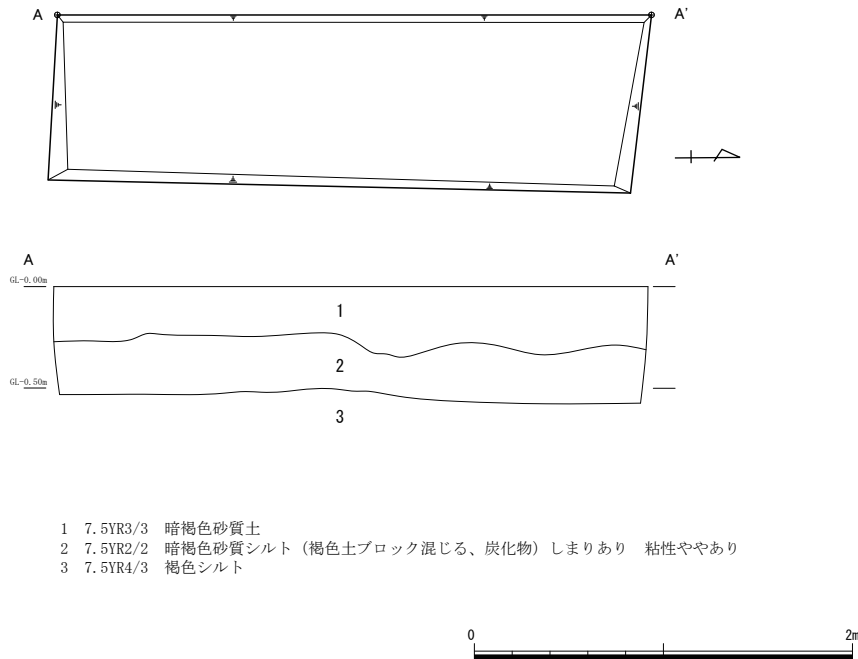
羽生遺跡 2020-2 地点 試掘調査

- ・調査原因 土のすき取り及び造成
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 羽生字マトバ
- ・調査期間 令和2年10月5日
- ・調査概要

1.0 × 3.0 m のトレンチを設定した。遺構・遺物及び包含層の確認はなかった。25 ~ 30cm で褐色シルト層の地山に至る。



図1-42 羽生遺跡 2020-2 地点 調査位置図



完掘状況北東から

図1-43 羽生遺跡 2020-2 地点

羽生遺跡 2020-3 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 倉庫新築
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 羽生字野白
- ・ 調査期間 令和2年10月29日
- ・ 調査概要

1.0 × 1.5 m のトレンチを設定した。地山直上まで、攪拌された痕跡があり、プラスチック等が出土した。後世の攪乱の影響が遺構、遺物包含層は残存していなかった。現GLから-750で地山（黄褐色砂質シルト）に至る。

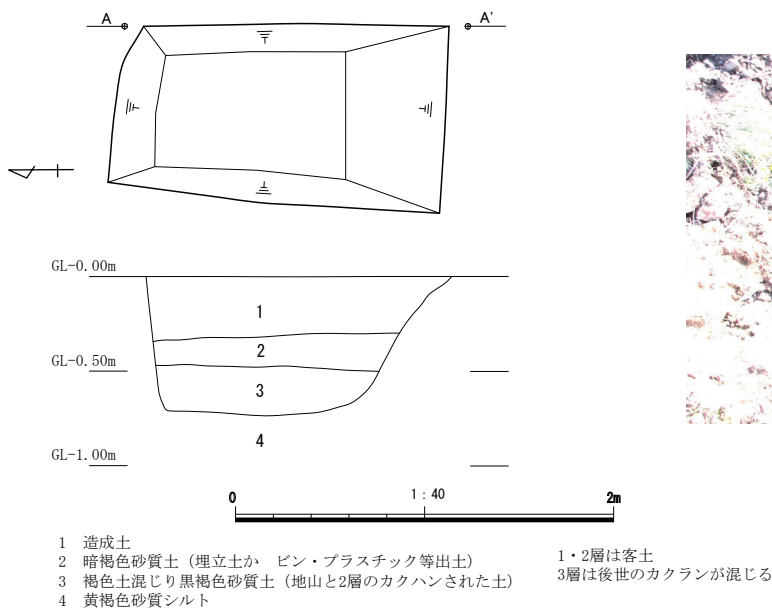


図1-45 羽生遺跡 2020-3 地点

羽生遺跡 2021 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅新築
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 羽生字野白
- ・ 調査期間 令和3年11月24日
- ・ 調査概要

1.0 × 5.0 m のトレンチを設定し、遺構検出後に北と東へ拡張した。調査面積は 10.5m²である。調査で、竪穴建物と土壇を検出した。竪穴建物には北壁際にサブトレを設定し貼床を確認した。床面からは7世紀後葉の坏蓋が出土しており所属時期を示す。埋土には赤色の焦土や炭化物が多く混じり、床面で甑の把手が出土しており、竪穴住居と考えて良いだろう。土壇の所属時期は不明である。包含層は耕土化しており、地山面が遺構検出面である。なお、住宅建築による掘削が地山面まで及ばないため、遺構検出にて終了し



図1-44 羽生遺跡 2020-3 地点 調査位置図

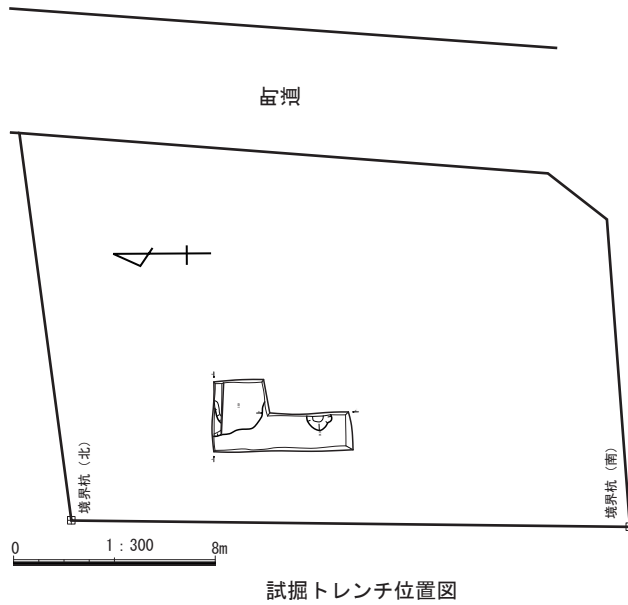


完掘状況北東から



図1-46 羽生遺跡 2021 地点 調査位置図

た。当該遺構は建物下に保存されているので、建て替え等では留意が必要である。



調査風景（北から）



調査風景（北西から）

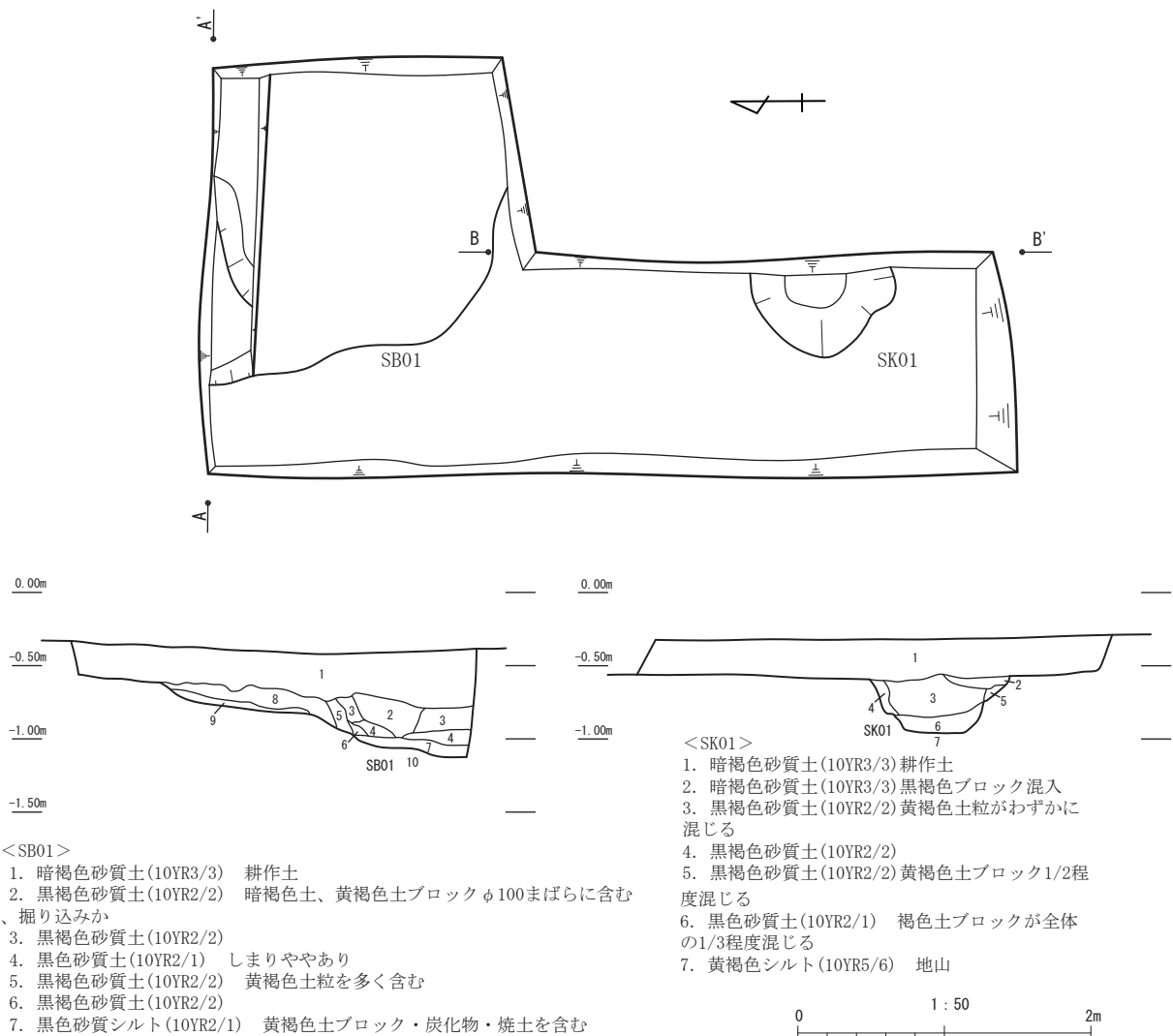


図1-47 羽生遺跡 2021 地点



SB01 検出状況（北西から）



SB01 検出状況（南西から）



SB01 検出状況（北から）



SB01 北壁サブトレンチ（西から）



SB01 北壁サブトレンチ（南西から）



土坑埋土状況（西から）

図1-48 羽生遺跡 2021 地点 SB01 検出写真

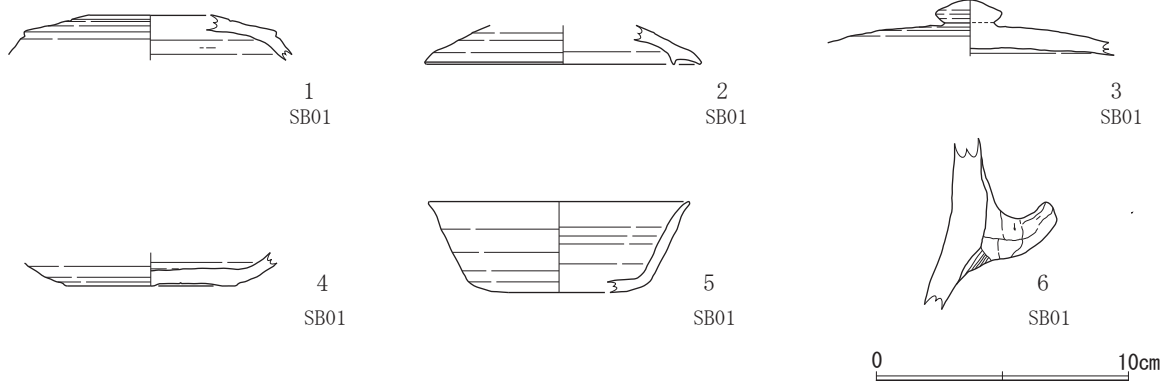


図1-49 羽生遺跡 2021 地点 出土遺物実測図 (S = 1/3)

羽生遺跡 2023-1 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅建築
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町羽生字の場
- ・ 調査期間 令和5年5月31日
- ・ 調査面積 9.2㎡
- ・ 調査概要

幅1m・延長8mのトレンチを設定し、試掘調査を行った。基本層序は1層が現耕作土、2層は耕作土と地山が混在した層、3層が地山である褐色砂質シルトである。トレンチの北東ではGL - 100で地山に至り、トレンチ南西ではGL - 200で地山となるため、地形が北東から南東へ僅かに傾斜していると思われる。

地山までの堆積の薄さや2層の混層の状況から考えて、日常的な耕作や、土地改良の影響をかなり受けていると考えられる。地山と上層の層理が明瞭である点から考えても遺物包含層が残存する可能性は低い。

トレンチ南西で検出したS1は深さ3cm程度の浅い土坑と考えられる。遺物の出土は無く、断面で2層からの掘り込みと確認したため耕作に伴う新しい掘り込みと考えた。

以上のとおり遺構・遺物の出土は無かった。

・ 調査後の措置

念のため擁壁基礎の掘削部分を立ち会ったが、試掘調査が同様の状況であったため慎重工事にて対応した。

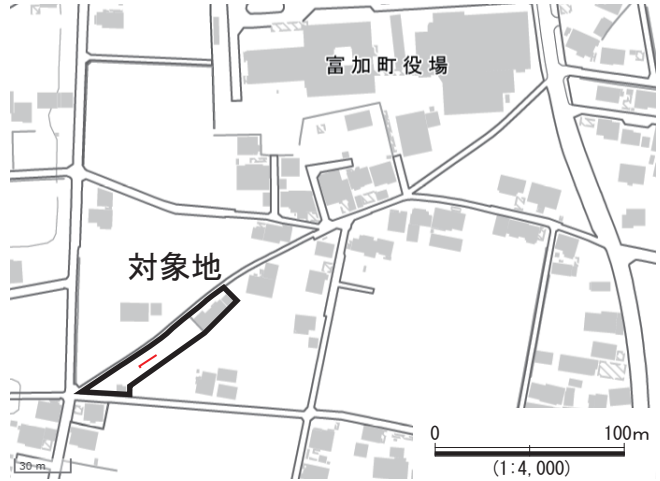


図1-50 羽生遺跡 2023-1 試掘調査位置図

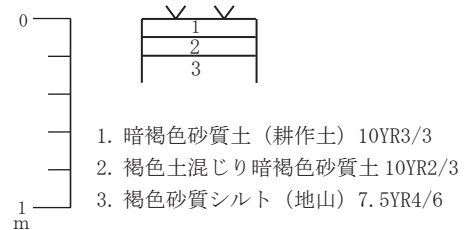


図1-51 羽生遺跡 2023-1 地点 土層柱状図



掘削状況



S1確認状況（北東から）



トレンチ全景（南西から）

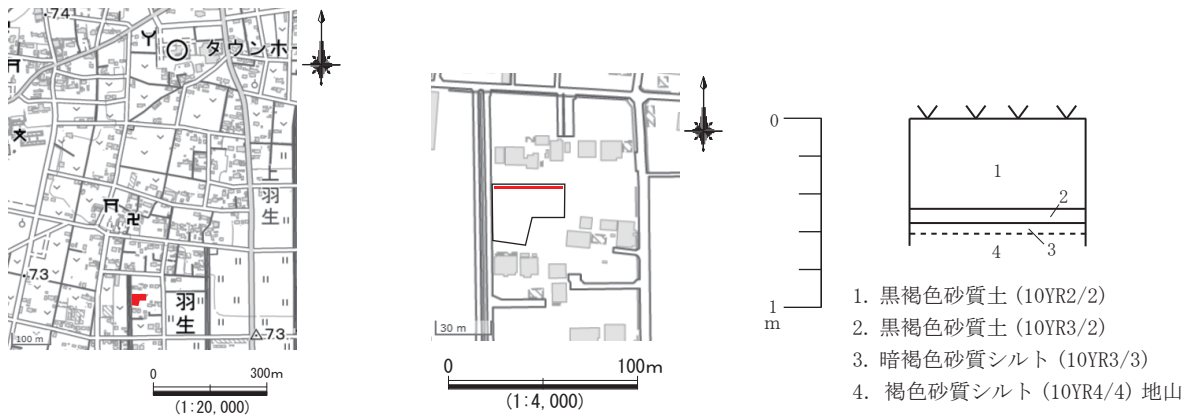
図1-52 羽生遺跡 2023-1 調査写真

羽生遺跡 2023-2 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 宅地造成工事
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町羽生字惣善前
- ・ 調査期間 令和5年7月7日
- ・ 調査面積 10㎡
- ・ 調査概要

調査地の堆積状況は、上層は黒褐色の耕作土（1・2層）が50cmほどあり、その下層に暗褐色土（3層）が堆積し、地山層は褐色砂質シルト（4層）を呈する。調査中に、地表面で中世陶器（白瓷系陶器）の破片を表採したが、明確な遺物包含層や遺構は確認されなかった。

施工については擁壁基礎部分として約30センチ幅で深さ20～25cmを掘削されたが、現耕作土内で施工が完結し地下の埋蔵文化財に至っておらず、保護層も確保できていると思われる。



掘削風景（西から）



堆積状況（南から）

図1-52 羽生遺跡 2023-2 地点

東山浦遺跡 2015 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅新築工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町羽生字金塚
- ・調査期間 平成 27 年 9 月 28 日
- ・調査面積 7m²
- ・調査概要

1.0 × 7.0m のトレンチを設定し調査をおこなった。

30cmほどの耕作土の下部には、非常にしまりのある砂礫が混じった暗褐色土（2層）が堆積していた。地山層ではないと思われるので、さらに下部をGL - 800cmまで掘り下げたが、地山層には達しなかった。2層はおそらく客土と考えられる。いつの時期の改変かは不明であるが、昭和50年代の土地改良事業によるものか、昭和40年代後半の中学校造成の際が候補として考えられる。遺物の出土はなかった。

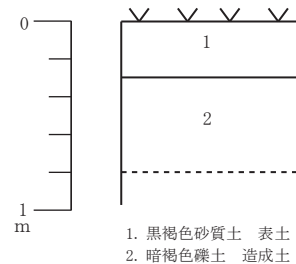
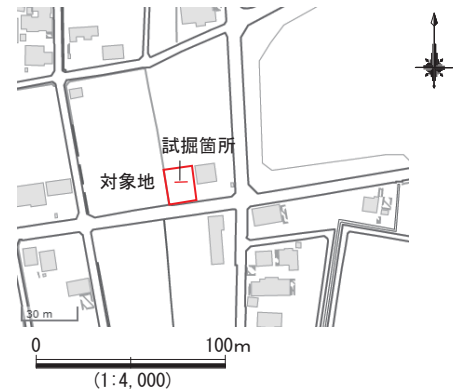


図1-53 東山浦遺跡遺跡 2015 地点

東山浦遺跡 2018 地点 試掘調査

- ・調査原因 公共非常用発電設備建設
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町滝田字東山浦
- ・調査期間 平成 30 年 11 月
- ・調査面積 21.85m²
- ・調査概要

富加町による非常用発電設備工事が計画された。設置箇所は昭和54年度に岐阜県教育委員会が実施した半布里遺跡範囲確認調査が実施された箇所であり、竪穴建物SB38が検出された箇所に該当するため、事前の確認調査と工事立会を実施した。

表土を掘削すると途中で遺構保護用の砂を確認し、それを除去するとSB38の北半を再検出した。昭和54年度調査がどこまで調査しているか判断できないため、念のため遺構底面を断ち割って堆積の確認を行った。この結果、おそらく昭和54年度調査において遺構埋土も掘削しており、貼床面も残存していない状況であった。ただし、遺構保護用の砂を除去した後に、遺物が確認されたので、精査を行った。

SB38の底部は円礫が露呈していた。おそらく地山層下部の基盤礫層が顔を出しているのだと思われるが、このままでは住居の床面とするには不都合であり、本来は貼床を敷いていたことが推測される。

出土遺物は須恵器片22点、土師器片（甕）2点、灰釉陶器片2点、山茶碗片28点、大窯3点、近世



図1-54 東山浦遺跡遺跡 2018 地点位置図

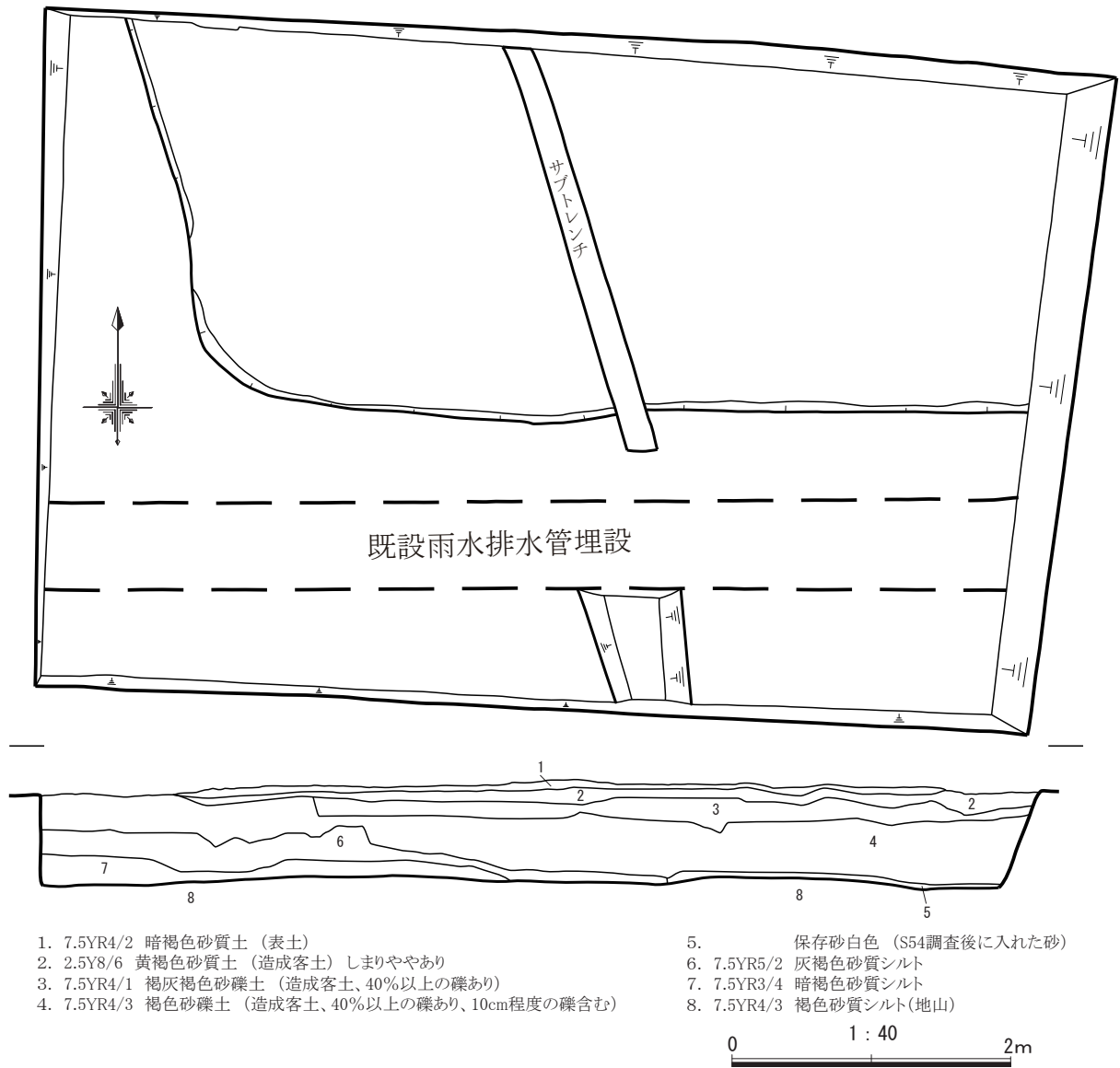


図1-55 東山浦遺跡 2018 地点

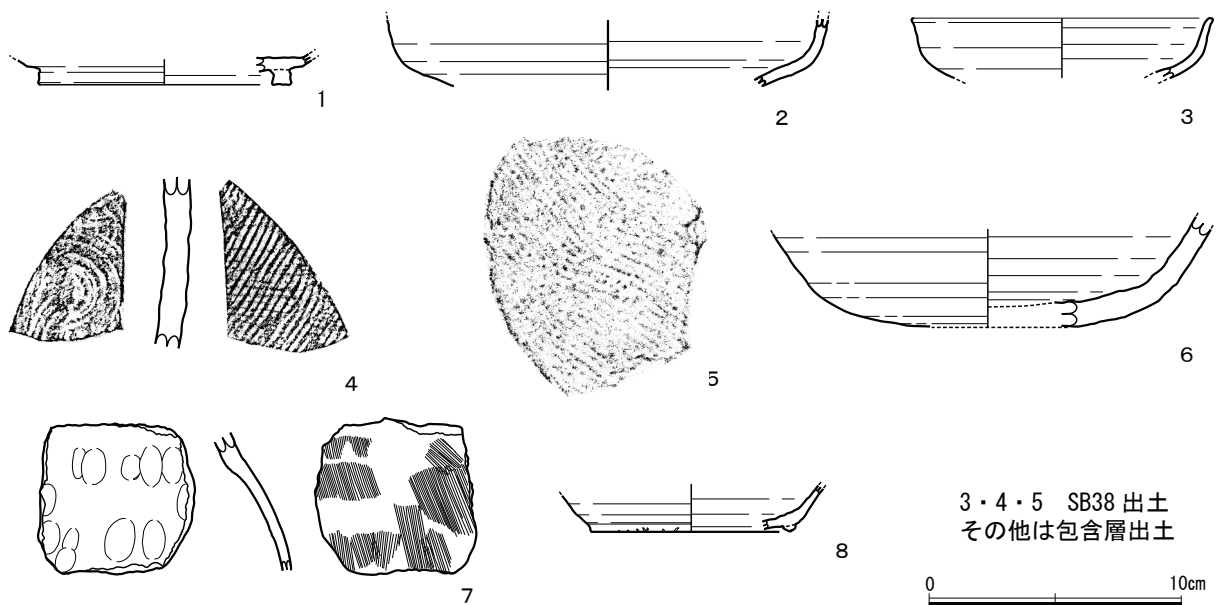


図1-56 東山浦遺跡 2018 地点出土遺物 (1 : 3)

陶器7点であった。須恵器は、概ね8世紀代を中心とする時期である。また山茶碗は大畑大洞窯(8型式)以降のもので、大洞東窯(10型式、14世紀後葉から15世紀前葉)以降が主となるようである。

1は調査区北側で出土した須恵器有台坏である。底径は約10cm程度で小さく、高台端部は鋭く仕上げられてつぶれはない。坏身底部はヘラ切り後に丁寧にナデ仕上げが施される。上記の特徴から美濃須衛編年のⅣ-3前半、8世紀後葉と想定しておく。2は調査区南側で出土した須恵器の碗か鉢類である。体部が薄く、8世紀前半を遡らないだろう。他の共伴遺物から考えて8世紀後半と想定される。

3はS B 38の埋土より出土した須恵器坏の体部である。高台の有無は不明なため、器種の判読は難しいが、口縁端部が外反する点から碗あるいは坏Gの可能性もある。小型であり、8世紀後半以降のものであろう。4、5はS B 38埋土から出土した須恵器甕である。外面に格子叩目、内面が同心円の当具痕が残り、体部と推定されるが甕類としてはやや薄手であろう。

6はS B 38埋土から出土した須恵器の鉢あるいは瓶類の底部である。底部は回転ヘラ削りを施し、体部と内面は回転ナデ整形である。厚手であり、中型から大型製品かと思われる。7は土師器甕片である。頸部下端から肩部にかけての破片である。内面はナデ、外面は細かいハケメ調整が施され、肩部は張らず器壁は厚手である点から、中濃東部分類(島田2004)のB2a類に該当し、8世紀前半を想定する。8は包含層出土の山茶碗である。底部径は約8cmと小型で、高台外縁よりやや内側に高台を貼り付ける。大洞東窯期、15世紀前半を想定する。

東山浦遺跡 2020 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅新築工事
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町滝田字東山浦
- ・ 調査期間 令和2年12月16・17日
- ・ 調査面積 10.5㎡
- ・ 調査概要

1.0×9.0mのトレンチを設定して調査を行ったところ、東端で竪穴状遺構を確認したため南へ拡張した。

トレンチの東端で方形プランの遺構を確認した。

浅い掘り込みであったが、非常に固く円礫を包含する埋土であった。こうした状況は、竪穴建物の住居床面によく似た状況であり、埋土から8世紀の須恵器が出土したためSB01とした。明確な柱穴は認定できなかったが、ここでは竪穴建物と考えたおく。遺構の検出の面は現地表(GL) - 40cmであった。

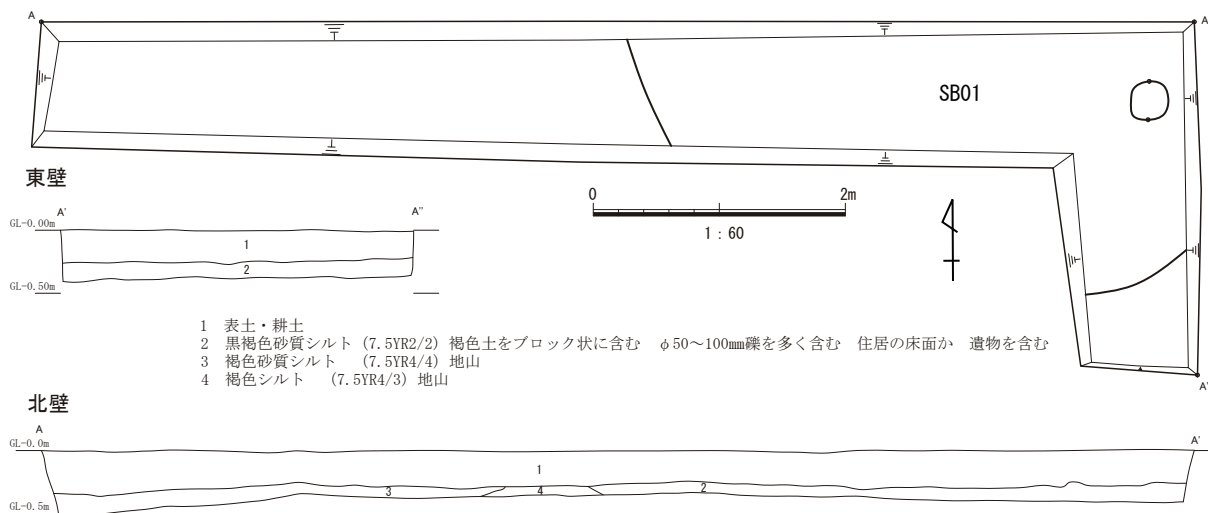
埋土からは須恵器2点、山茶碗2点、土師器片7点、不明1点が出土した

建築予定の建物基礎の掘削が浅く保護層を確保できるため工事立会にて対応した。工事の掘削は遺構面まで達しておらず、遺構は保護されている。

須恵器2点を図示した(図1-59)。1は坏身であり、口縁部が外反し丸みを帯びる形状であり、美濃須衛窯Ⅳ-3期またはⅤ期と考えられる。2も坏身であり小型で口縁が外へ開く。いずれも8世紀後葉～9世紀初頭のものでSB01の年代を示すものとする。



図1-57 東山浦遺跡遺跡 2020 地点位置図



調査風景(東から)



SB01(北から)



SB01(南西から)



SB01(北西から)

図1-58 東山浦遺跡 2020 地点

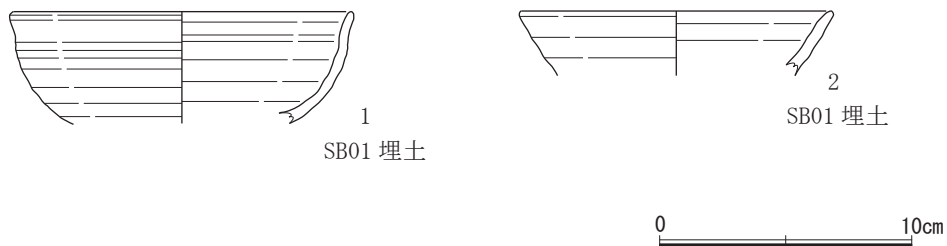


図1-59 東山浦遺跡 2020 地点 出土遺物実測図 (S = 1/3)

東山浦遺跡 2021-1 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅新築工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町羽生字金塚
- ・調査期間 令和3年9月27日
- ・調査面積 5.0㎡
- ・調査概要



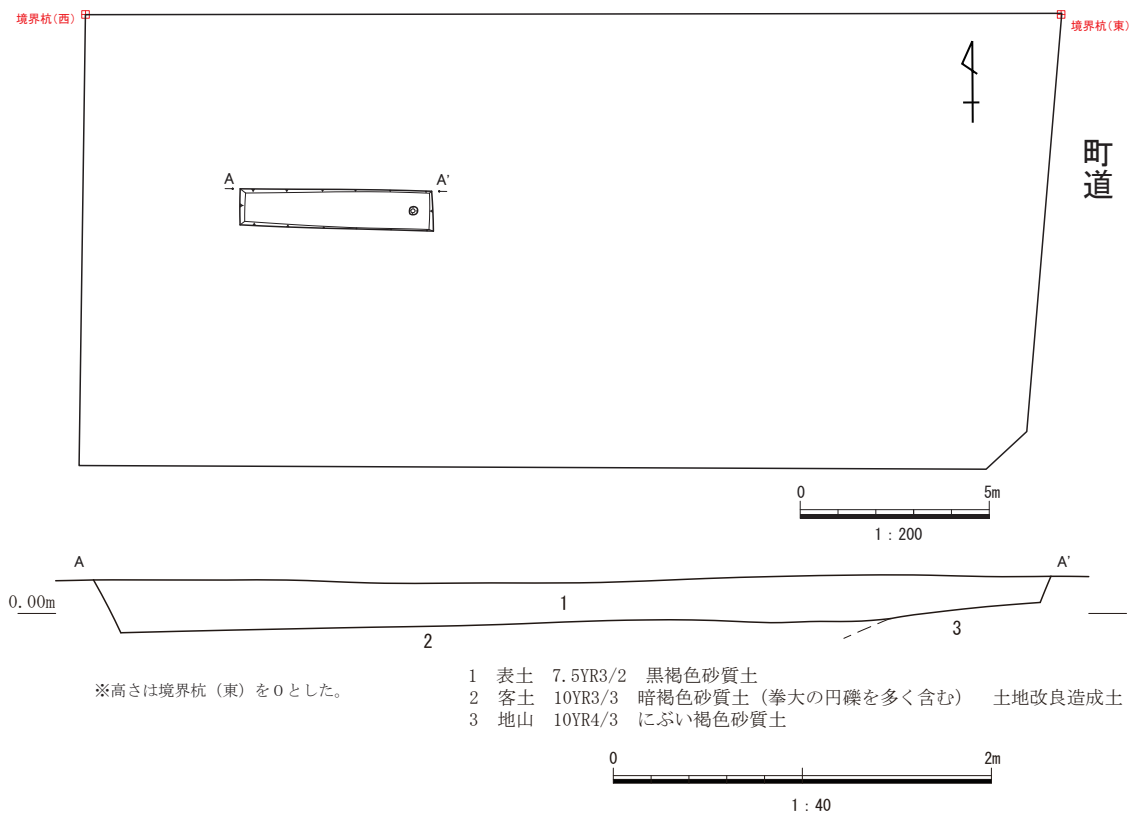
図1-60 東山浦遺跡 2021-1 地点位置図

1.0 × 5.0m のトレンチを設定して調査を行った。

ピットを1基検出したが、所属等は不明である。

土層図(図1-61)の2層は礫が多く混じる暗褐色砂質土

質土であり、令和2年度に実施した当該調査地から50mほど西の工事立会調査においても確認した土層である。おそらく土地改良時の造成土と考えられ、厚さ30～50cmの層である。トレンチの東端では地山を検出していることから、本来は西へ向かって傾斜する地形を造成で平坦にしていると思われる。以上の点が判明したことと、工事掘削が地山まで及ばない点、遺物の出土が無い点から、これ以下の掘削は行わなかった。



完掘状況(南西から)



完掘状況(東から)



作業状況(南東から)

図1-61 東山浦 2021-1 地点

東山浦遺跡 2021-2 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅新築工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町滝田字東山浦
- ・調査期間 令和3年10月18日
- ・調査面積 7.5㎡
- ・調査概要 1.0 × 5.0m のトレンチを設定して調査を行った。幅5m以上の溝（自然流路か）の埋没後に竪穴状遺構が掘削され、埋土から飛鳥・奈良時代の須恵器が出土したためここではSB01としておく。過去に調査した近接地の東山浦遺跡G地点においても埋没流路が確認されており、埋土等が似ている。溝埋土は切り合い状況から飛鳥・奈良時代と考えられるが、出土遺物が無いため詳細な時期は特定できない。



図1-62 東山浦遺跡 2021-2 地点

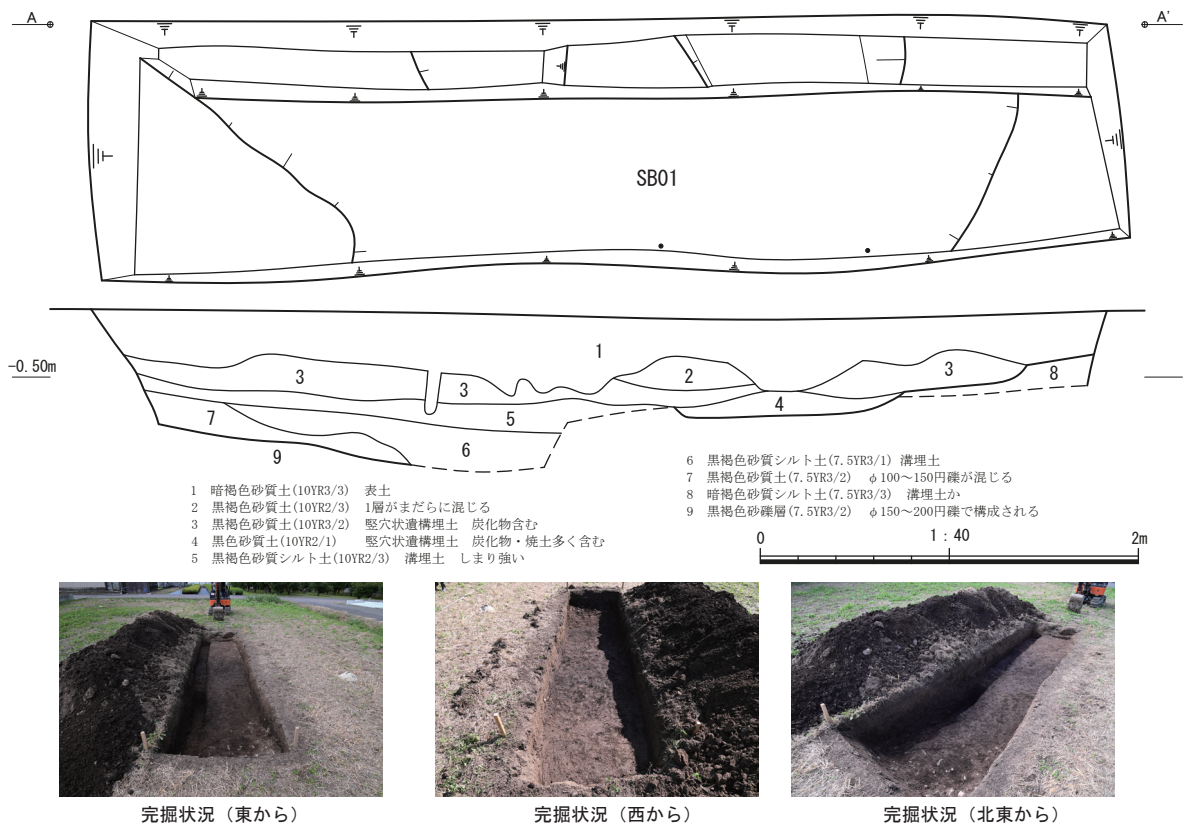


図1-63 東山浦遺跡 2021-2 地点

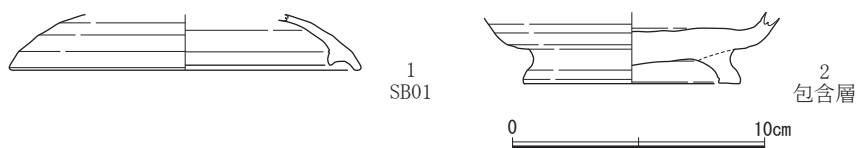


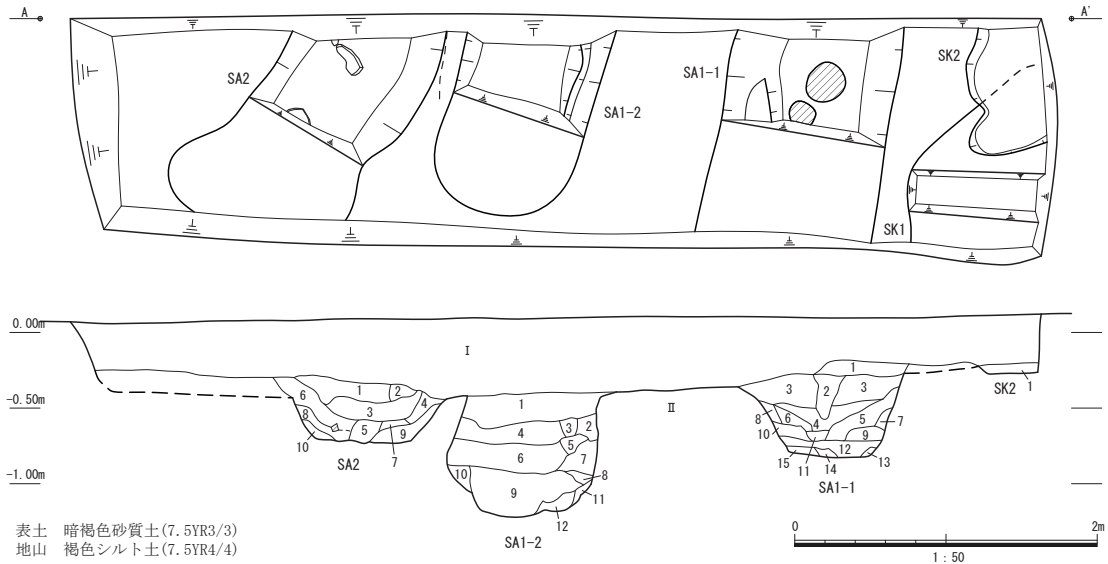
図1-64 東山浦遺跡 2021-2 地点出土土器 (S = 1/3)

東山浦遺跡 2021-3 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅新築工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町滝田字東山浦
- ・調査期間 令和3年11月18日
- ・調査面積 9.0㎡
- ・調査概要 1.0 × 5.0m のトレンチを設定して調査を行った。布掘のある掘立柱建物（総柱建物の可能性が高い）2棟 ※柱当たりを確認した。布掘のある掘立柱建物は当該遺跡にて過去に2棟確認されている。規模や埋土の様相は非常に似ている。傾きと掘方の深さの違いから別の2棟（立替か）と判断した。工事掘削は当該検出面まで及ばないため、埋土の一部だけ半裁して埋め戻した。



図1-65 東山浦遺跡遺跡 2021-3 地点位置図



- <SK2>
1. 暗褐色砂質シルト (7.5YR3/3)
- <SA2>
1. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 2. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) φ50mmの黒色ブロック・褐色土ブロックがまばらに混じる
 3. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 4. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒が僅かに混じる
 5. 黒褐色砂質土 (7.5YR3/2)
 6. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 下部にφ30mmの褐色土ブロックを多く含む
 7. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) φ30mmの褐色土ブロックを多く含む
 8. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒が混じる
 9. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 10. 褐色砂質シルト土 (7.5YR4/4) 黒褐色土が全体の1/3程混じ
- <SA1-2>
1. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 炭化物が混じる
 2. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 3. 褐色砂質シルト土 (7.5YR4/4) 黒褐色が混入
 4. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒が混じる
 5. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 6. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土ブロックが全体の1/5程混じる
 7. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土ブロックがまばらに混じる
 8. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒が混じる
 9. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒が混じる
 10. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) φ50~200mmの礫と砂粒で構成される
 11. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土粒がまばらに混じる
 12. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 赤褐色土粒が僅かに混じる
 13. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 赤褐色土が僅かに混じる
 14. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 赤褐色土ブロックが混入
 15. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
- <SA1-1>
1. 暗褐色砂質シルト土 (7.5YR3/3)
 2. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) しまりあり、砂を僅かに含む
 3. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 炭化物混じる、焼土粒混入
 4. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 5. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土ブロック混入
 6. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)
 7. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土(地山土)が1/2程混じる
 8. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) 混じりのない土
 9. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土(地山土)が1/3程混じる
 10. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土(地山土)がまばらに混じる
 11. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 褐色土ブロック混入
 12. 暗褐色砂質土 (7.5YR3/3) しまりない、ほぼ砂粒で構成される
 13. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 赤褐色土が僅かに混じる
 14. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2) 赤褐色土ブロックが混入
 15. 黒褐色砂質シルト土 (7.5YR3/2)



完掘状況 (西から)

図1-66 東山浦遺跡 2021-3 地点

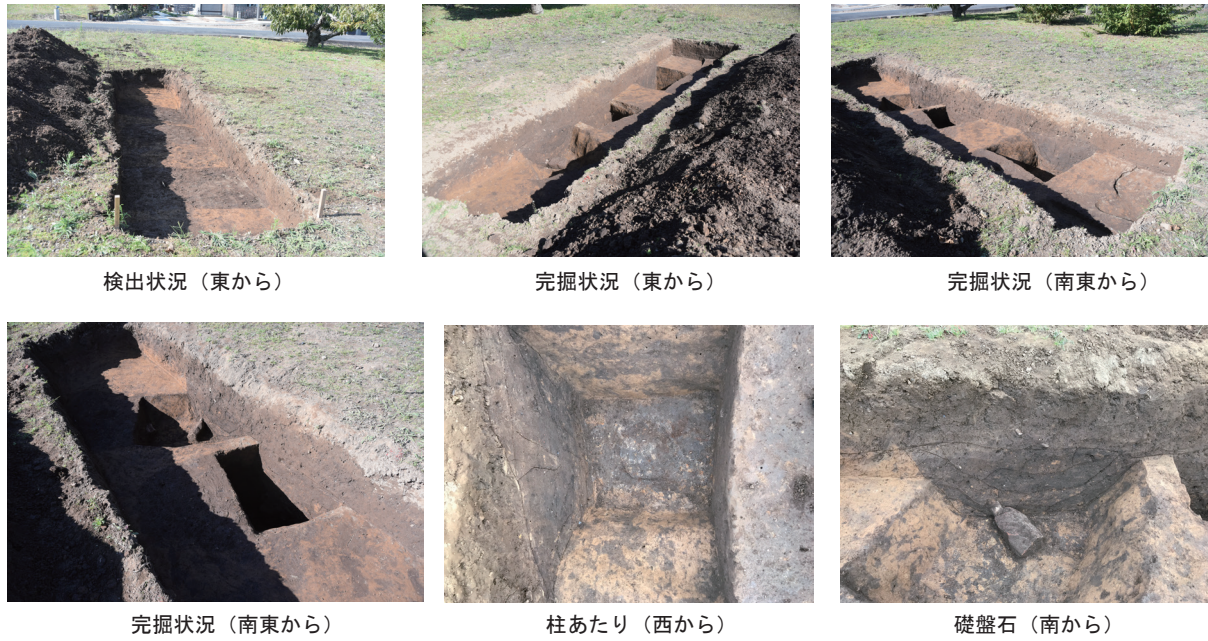


図1-67 東山浦遺跡 2021-3 地点 調査写真

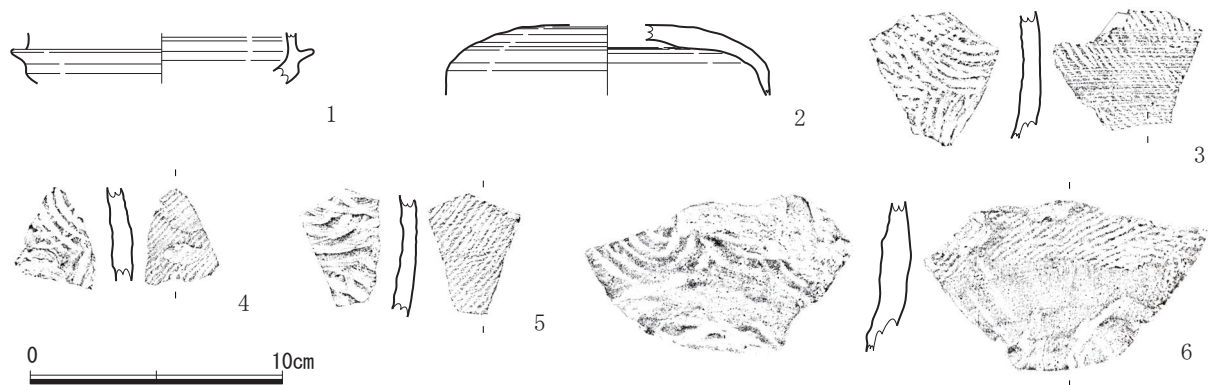


図1-68 東山浦遺跡 2021-3 地点 出土遺物実測図 (S = 1/3)

表2 羽生・東山浦遺跡出土遺物観察表

図版番号	報告番号	遺跡名	地区	層位等	種類	器種	時期	口径	器高	調整等
1-49	1	羽生	2021	地山直上	須恵器	坏	美濃須恵窯Ⅲ期	(10.2)	—	内外面ロクロナデ
	2	羽生	2021	柱穴埋土	須恵器	坏蓋	美濃須恵窯Ⅲ期	(12.8)	—	内外面ロクロナデ
	3	羽生	2021	柱穴埋土	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕
	4	羽生	2021	柱穴埋土	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ、内面同心円当具痕
	5	羽生	2021	地山直上	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕
	6	羽生	2021	地山直上	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕
1-68	1	東山浦	2021-3	地山直上	須恵器	坏	美濃須恵窯Ⅲ期	(10.2)	—	内外面ロクロナデ
	2	東山浦	2021-3	柱穴埋土	須恵器	坏蓋	美濃須恵窯Ⅲ期	(12.8)	—	内外面ロクロナデ
	3	東山浦	2021-3	柱穴埋土	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕
	4	東山浦	2021-3	柱穴埋土	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ、内面同心円当具痕
	5	東山浦	2021-3	地山直上	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕
	6	東山浦	2021-3	地山直上	須恵器	甕	美濃須恵窯	—	—	外面タタキ後ヨコナデ、内面同心円当具痕

東山浦遺跡 2021-4 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅新築工事
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町滝田字東山浦
- ・ 調査期間 令和3年11月17日
- ・ 調査面積 7.5㎡
- ・ 調査概要 15 × 5.0m のトレンチを設定して調査を行った。約20cmの表土を剥ぐと、褐色シルト土の地山層に至る。表層の堆積土が非常に薄い。遺物・遺構、包含層ともに確認されなかった。



図1-69 東山浦遺跡遺跡 2021-4 地点位置図

隣接する2021-3地点では地山までの堆積が40～50cmであることを考えると、緩やかに西へ向かって傾斜する地形と考えられる。また当該地点の東隣のB地点（駐在所）では7世紀後葉と8世紀後葉の竪穴建物が確認されており、建物群と2021-3総柱倉庫との間の空閑地であった可能性が考えられる。

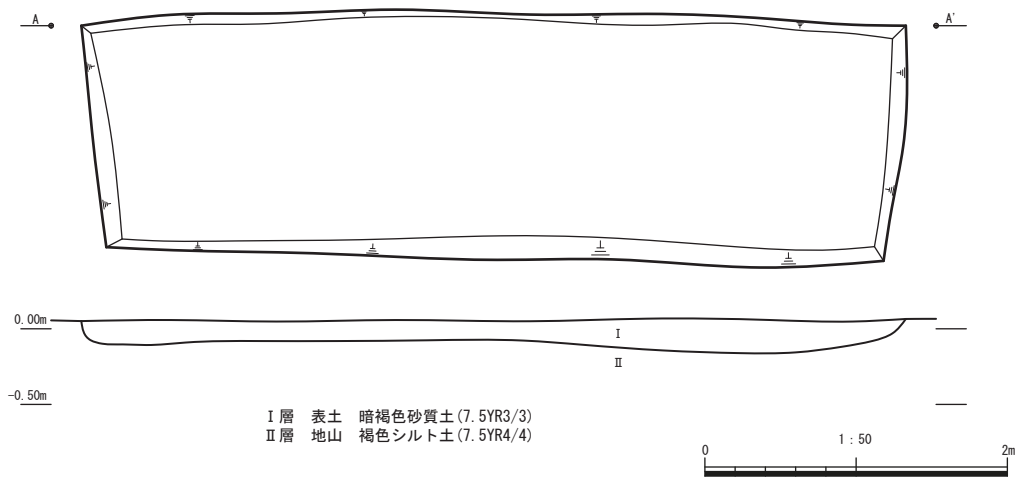


図1-70 東山浦遺跡 2021-4 地点

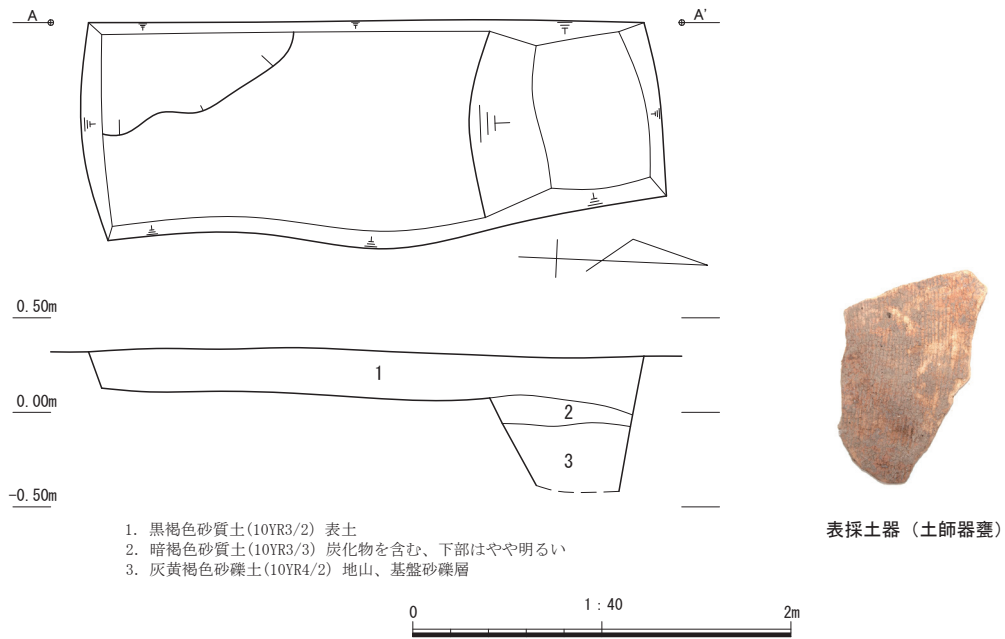
東山浦遺跡 2022 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 個人住宅新築工事
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町滝田字東山浦
- ・ 調査期間 令和5年1月16日
- ・ 調査面積 3.0m²
- ・ 調査概要 1.0 × 3.0mのトレンチを設定して調査を行った。表土の堆積が薄く、後世の攪乱の影響をかなり受けている。敷地の西側とは0.8 mほどの高低差があるが、かなり以前（土地改良時の昭和50年代か）に擁壁で法面保護をしており、本来は西へ傾斜した土地を造成しているようである。以上の点から敷地の東寄りに試掘トレンチを設定したが攪乱の影響がみられたことから、造成時に全面的に土地を改変していると思われる。



図1-71 東山浦遺跡 2022 地点位置図

なお表土にて土師器甕を表採した。8世紀の濃尾型甕の胴部と思われる。



完掘状況（北から）



完掘状況（北西から）



完掘状況（北東から）

図1-72 東山浦遺跡 2022 地点

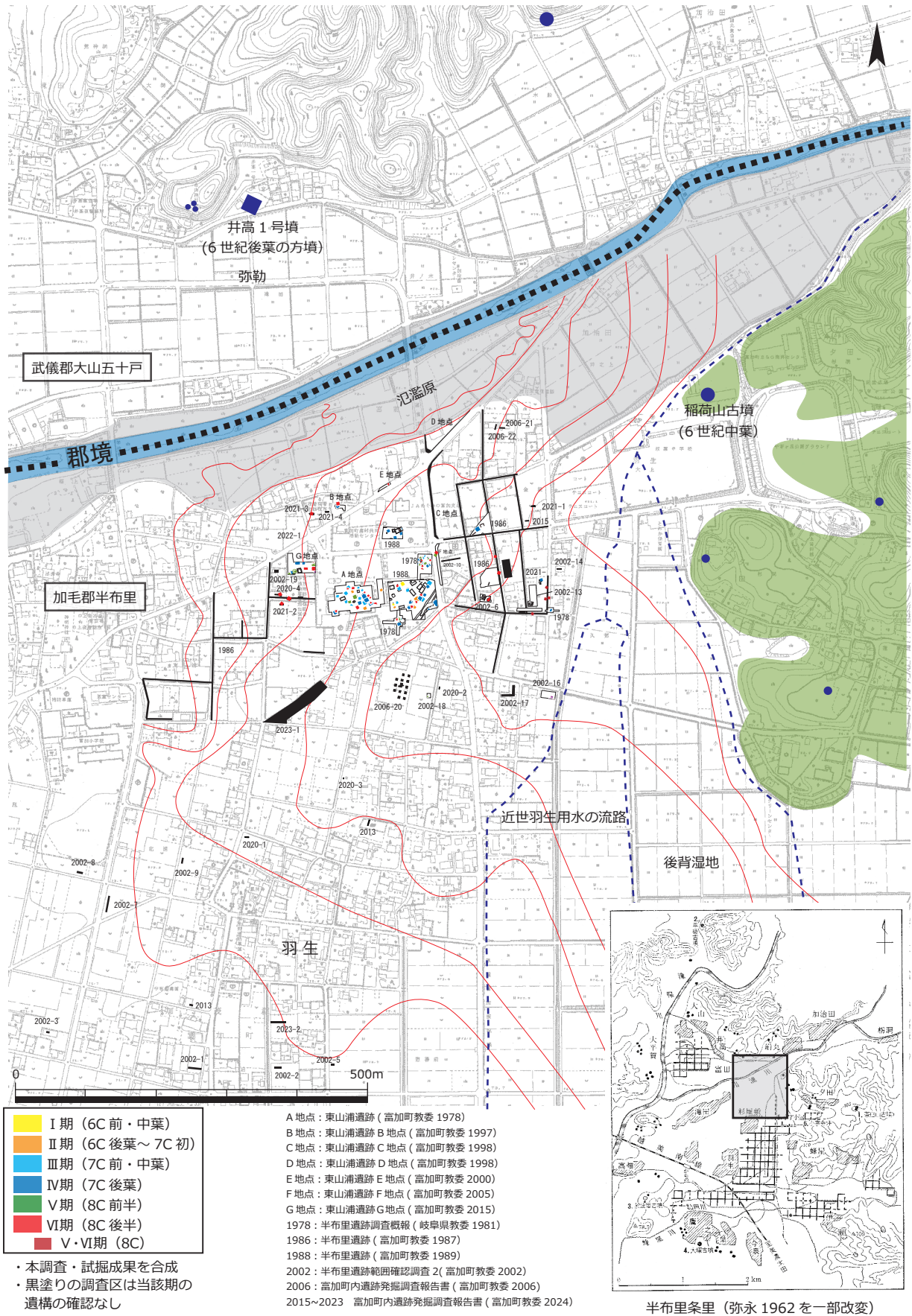


図1-73 東山浦・羽生遺跡における古代建物分布 1:8000

第4節 高畑地区の調査



図1-74 高畑地区調査箇所位置図

恵日山遺跡 H25 地点（平成 25 年 6 月 23 日立会調査）、恵日山遺跡 R05 地点（令和 5 年 4 月●日立会調査）では、工事掘削が造成土内で完結し地表掘削が無かったため詳細報告を割愛する。

市場裏遺跡 H20 地点 試掘調査

- ・ 調査原因 工場用地造成工事
- ・ 調査種別 試掘調査
- ・ 所在地 富加町高畑字市場裏
- ・ 調査期間 平成 20 年 9 月
- ・ 調査面積 116㎡
- ・ 調査概要

平成 19 年 10 月に事業者から開発協議申請が提出され、富加町土地開発事業対策連絡会議にて計画地の東端が、周知埋蔵文化財包蔵地である市場裏遺跡に該当し、文化財保護法による届出の必要があると指示した。その後、届出が提出され試掘調査を実施することとなった。

計画地にトレンチ 1 m × 10 m を 9 本と 1 m × 11 m、1 m × 15 m の計 11 本を設定し、地山まで掘削して遺構および遺物包含層の有無を確認した。トレンチ名はそれぞれ T①～⑪と呼称する。

計画地は、以前に養豚場が営まれており、切土や盛土がおこなわれており、土地の形状はかなり改変

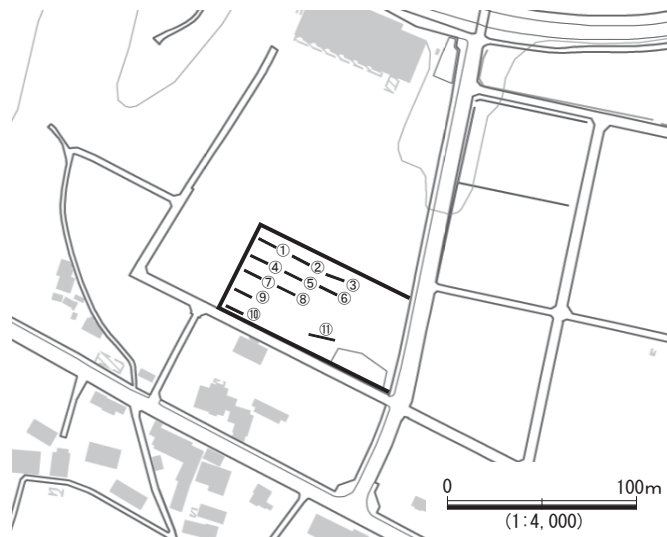


図1-75 市場裏遺跡 08-1 地点試掘トレンチ配置図

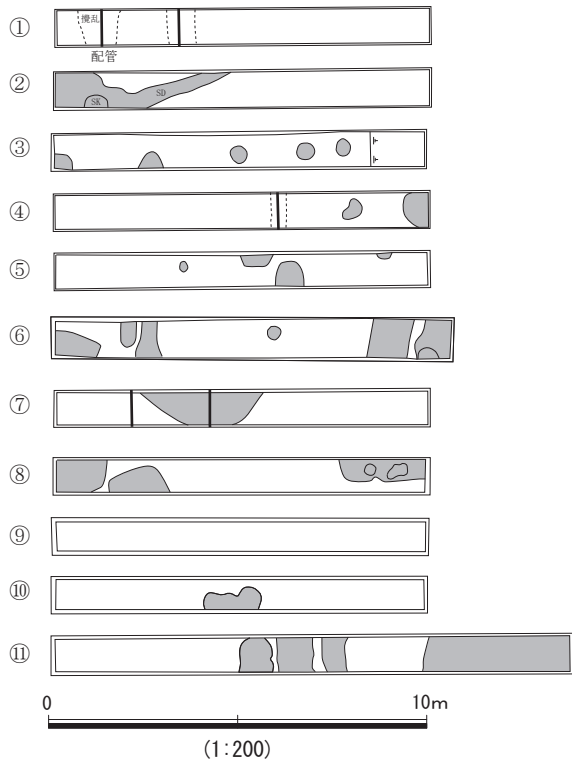


図1-76 市場裏遺跡 08-1 地点試掘トレンチ平面図

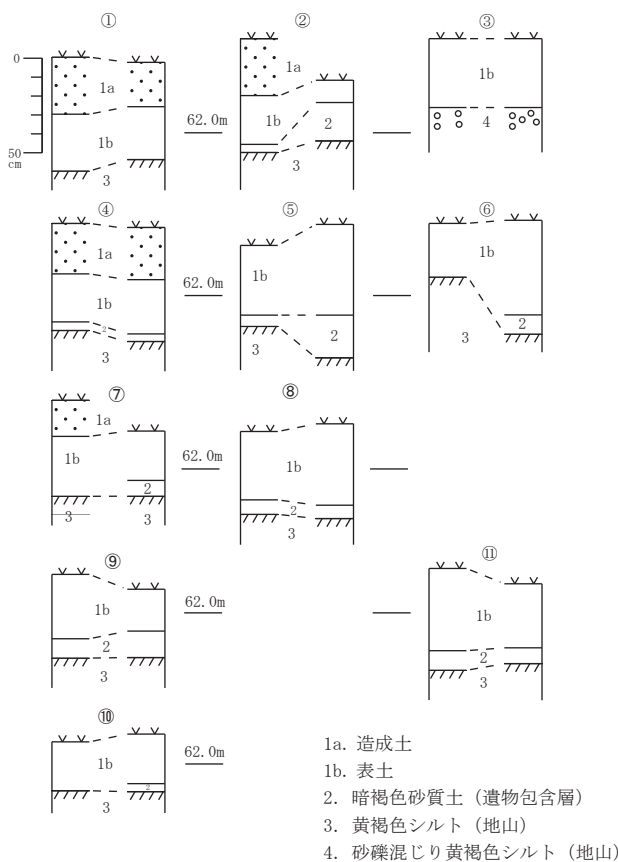


図1-77 市場裏遺跡 08-1 地点試掘トレンチ平面図

を受けていた。1層はa盛土が部分的に見られ、b表土に重なる。盛土からは瓦やトタンなどの廃棄物も認められた。2層が遺物包含層であり遺構埋土でもある。3・4層が地山であり、遺構を検出した面である。周辺の基盤層である。遺物包含層である2層はT①と③以外のトレンチでは確認できたが、調査地西半のトレンチでは遺物をそれほど包含していなかった。

各トレンチの出土遺物量をみるとT①が0点、T②が20点、T③が1点、T④が0点、T⑤が4点、T⑥が27点、T⑦が0点、T⑧が16点、T⑨が2点、T⑩が28点、T⑪28点であった。T②・⑥・⑧・⑩・⑪の包含層で遺物が多く出土しており、時期が特定できる遺構はT⑤・⑥・⑧・⑪で確認している。これらの出土遺物と遺構の濃淡から考えると、遺跡は調査地の東半から東南方向に広がっており、西側へは薄くなっていると考えられる。

検出した遺構は土坑あるいは溝と考えられるもので、建物に関わる遺構は確認されていないため集落遺跡かどうかは定かではないが、近くには稲荷1号古墳や関市の唐鋤遺跡などもあるため集落が隣接する可能性は考えられる。

出土遺物から古代の遺構と考えられるのはS11、S20、S28、S29である。遺構埋土の遺物は須恵器の甕が多く詳細な時期特定は難しいが、8世紀後葉の濃尾型甕(図1-78-10)や、包含層出土の須恵器坏身(図1-78-4~6)・坏蓋(図1-78-2・3)をみると8世紀のものが占めており、所属時期を示していると考えられる。7世紀~8世紀初頭の須恵器は見られない点と、灰釉陶器片が僅かな点からも8世紀前半~9世紀前半が遺跡の存続時期だろう。

・調査後の措置

遺物包含層にかかる標高62.0m以下は削平を実施せず採石盛土にて造成し、貯水池についても遺物包含層へ影響が及ばないように設計の見直しをおこなった。

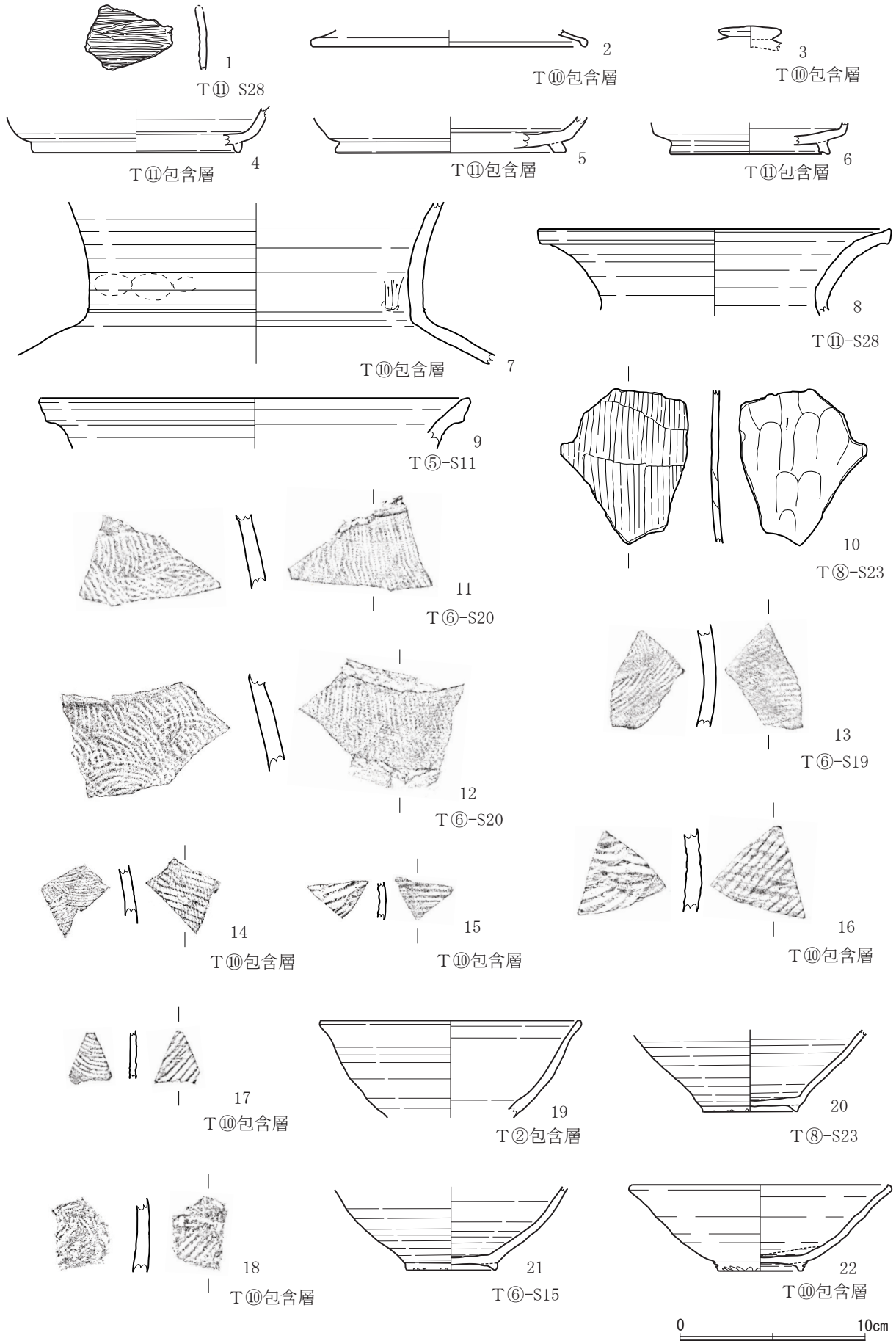


図1-78 市場裏遺跡 H20 地点 出土遺物実測図 (S = 1/3)

稲荷遺跡H21地点 試掘調査

- ・調査原因 駐車場造成工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町高畑字稲荷
- ・調査期間 平成21年9月14～16日
- ・調査面積 23m²
- ・調査概要

平成21年8月に事業者から駐車場造成工事の事前協議を受けた。計画地が、周知の埋蔵文化財包蔵地である稲荷遺跡に該当するが、既往の調査データが不足しているため試掘調査を実施することとなった。

計画地にトレンチ1.5m×3mを3本と1m×1mを2本、1.5m×5mの計6本を設定し、掘削して遺構および遺物包含層の有無を確認した。トレンチ名はそれぞれT①～⑥と呼称する。できるだけ地山まで掘削をしたが、当初の予想よりも堆積が厚くT②は地山が検出できなかった。

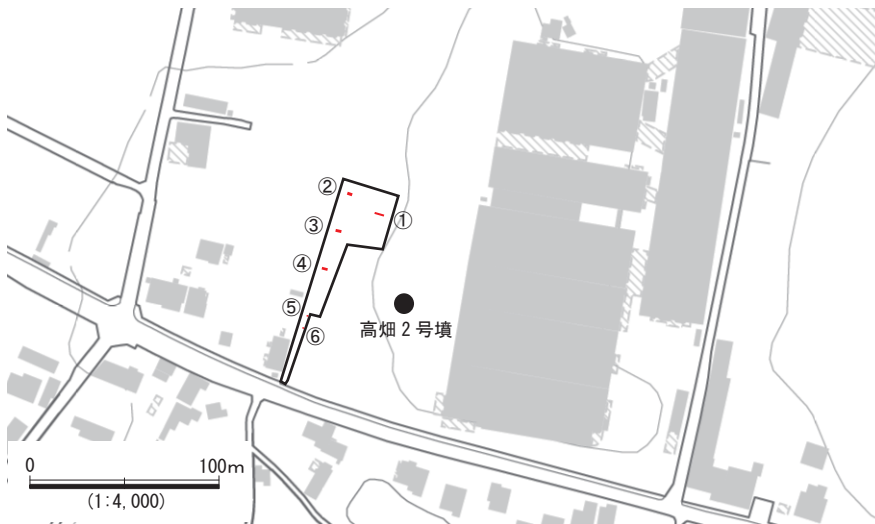


図1-79 稲荷遺跡H21地点 試掘トレンチ配置図

調査地は、T①が丘陵斜面部、T②～④が谷部、T⑤⑥が丘陵裾部にあたる。T②・③では旧表土と考えられる3層の黒色土上部にサバ土が厚く滞積している。丘陵上のT①で確認された地山5層が褐色土であるので、それが流出した可能性もあるが、層理が比較的明瞭であるため二次的な客土

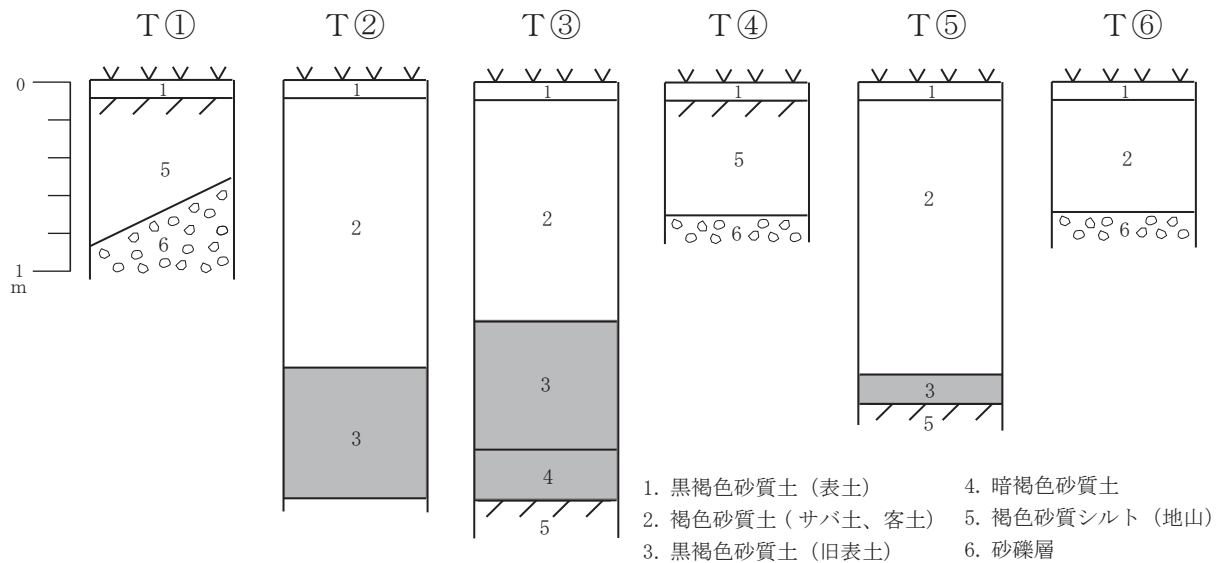


図1-80 稲荷遺跡H21地点 土層柱状図

の可能性も考えられる。いずれにしろ比較的新しい時期に谷部が埋没して厚い堆積に覆われたことは確かである。

T⑤においても客土と考えられる2層が堆積しているが、拳大礫が混入しており、おそらく東側の駐車場を造成する際に丘陵を削平し、削平土を広げているものと思われる。

T③で確認した4層から須恵器甕片など若干の遺物が出土している。4層の暗褐色土はT③でしか確認されていない。

・調査後の措置

T③付近には遺物包含層が広がる可能性が考えられたが、GL - 2mの深さにあるため駐車場造成工事の切り土の影響は及ばない。工事による埋蔵文化財包蔵地への影響はないと考えられるため慎重工事にて対応した。

恵日山遺跡 H28 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅新築工事
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町高畑字北野
- ・調査期間 平成29年1月10日
- ・調査面積 5㎡
- ・調査概要

恵日山遺跡は、川浦川と津保川が合流点の丘陵から段丘上にかけて広がる遺跡。旧石器時代の細石刃が表採されることで有名である。住宅の基礎工事はベタ基礎施工であったが、周辺の堆積データが皆無であったため試掘調査を実施した。

建物計画箇所に1m×5mのトレンチを設定し、地山まで掘削した。表土（黒褐色砂質土）が40cm、その下は地山（褐色シルト）となる。現表土（耕作土）直下でシルト層の地山となる。層理が明瞭であり土地改良の影響がみられる。遺物、遺構ともに確認されなかった。

・調査後の措置

遺物遺構の検出が無かったため慎重工事にて対応した。

市場裏遺跡 R01-1 試掘調査

- ・調査原因 町道拡幅工事
- ・調査種別 試掘調査



図1-81 恵日山遺跡 H28 地点 試掘トレンチ配置図

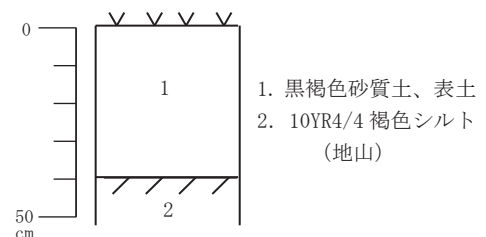


図1-82 恵日山遺跡 H28 地点土層柱状図

- ・所在地 富加町高畑字稻荷地内
- ・調査期間 令和元年10月16～21日
- ・調査面積 10m²
- ・調査概要

平成19年10月に事業者から開発協議申請が提出され、富加町土地開発事業対策連絡会議にて計画地の東端が、周知埋蔵文化財包蔵地である市場裏遺跡に該当し、文化財保護法による届出の必要があると指示した。その後、届出が提出され試掘調査を実施することとなった。

交差点をはさんで2箇所にて1m×5mのトレ

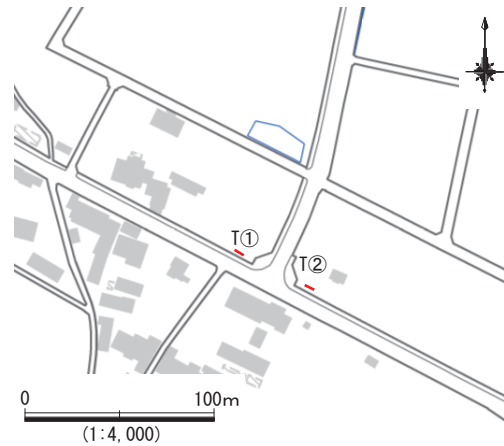
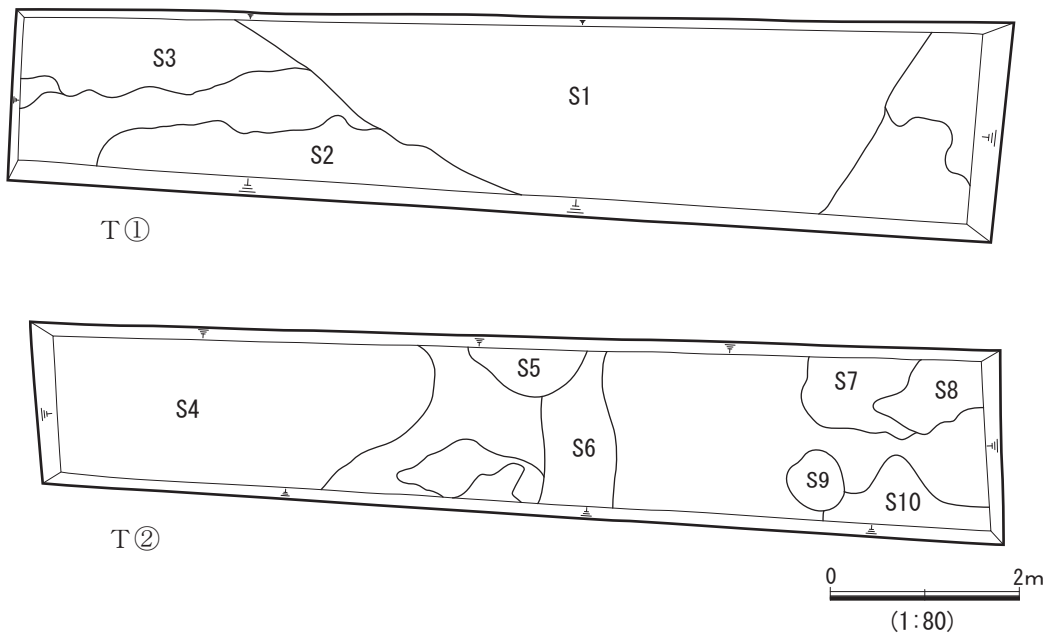


図1-83 市場裏遺跡 R01 地点試掘トレンチ配置図



T①完掘（西から）



T②完掘（東から）

図1-84 市場裏遺跡 R01-1 地点試掘調査T①②平面図

ンチを設定し確認調査にあたった。交差点の西側をT①、東側をT②と呼称する。

T①では、東端にてGL-400で地山面を検出したことから、GL - 400のやや上面までバックフォーで掘削を行った。掘削中のGL - 350 ~ 400 (やや明るい暗褐色土)で遺物が出土したため、一括で取り上げた。その後、GL - 400直上から手掘りに切り替え遺構検出を試みた。その結果、竪穴建物と思われる遺構 (S1)と不明遺構 (S2)、東西方向に伸びる溝状遺構 (S3)を地山面で検出した。なお試掘調査では全て遺構検出に留め、記録作業を行ったため、この後の本調査では遺構の見解に変更の可能性があるため留意願いたい。T①の層序は、1層が20cm程度の表土で暗褐色砂質土、2層が20cm程度のやや明るい暗褐色砂質土で、遺物包含層と推定した。3層が地山である褐色粘質土である。

次にT②であるが、重機にて表土掘削を始め、東端にてGL - 500で地山面を検出したことから、GL - 450まで掘削を行った。その後、GL - 450以下は手掘りに切り替え遺構検出を試みた。その結果、性格不明遺構 (S4 ~ 10)を地山面で検出した。掘削は検出までとし、完掘後、平板測量にて記録作業を行った。T②の層序は以下の通りである。耕作や既設のU字溝敷設時の掘削の影響が地山まで及んでいる。1層は表土で暗褐色砂質土、2層は褐色砂質土、

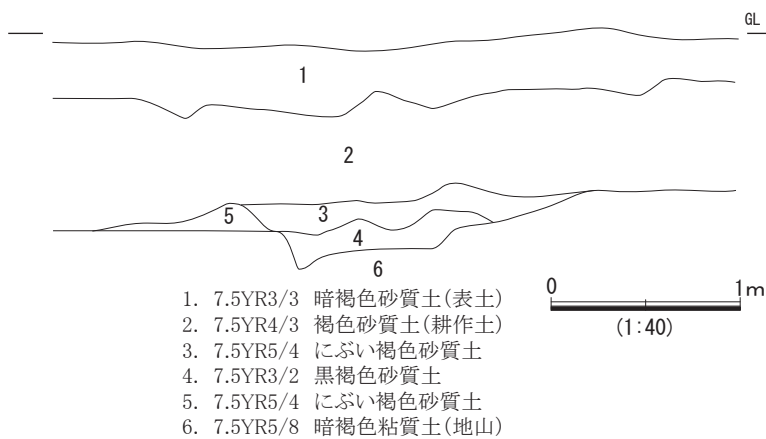


図1-85 市場裏 R01-1 試掘調査T②土層断面図

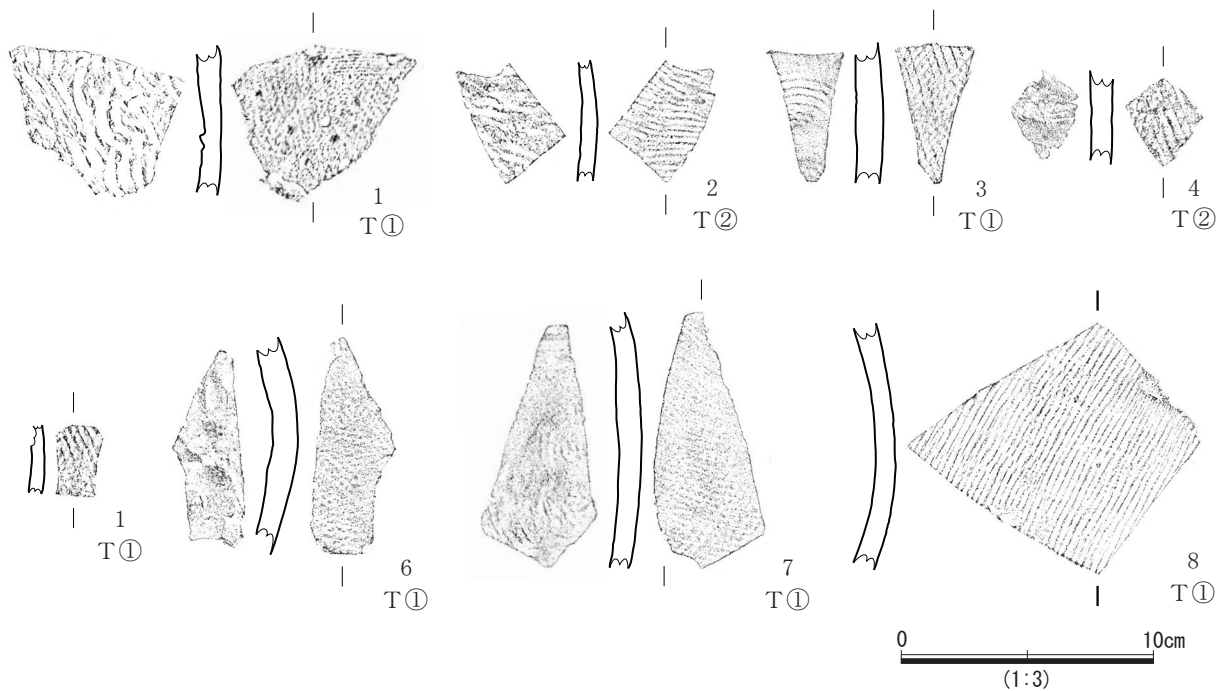


図1-86 市場裏遺跡 R01-1 地点 出土遺物実測図

3層が褐色砂質土、4層が黒褐色砂質土、5層が地山で褐色粘質土であった。

・調査後の措置

交差点から西側では古代の遺構を検出したため発掘調査を実施し、東側では耕作や側溝敷設による影響が大きいと考えられことから工事立会での対応となった。

市場裏遺跡 H19 立会調査

・調査原因 町道拡幅工事

・調査種別 立会調査

・所在地 富加町高畑字稲荷地内

・調査期間 平成19年1月10日

・調査概要

町道の拡幅工事計画地が周知の埋蔵文化財包蔵地である市場裏遺跡の西端あたりに一部かかることが判明した。しかし、工事計画地が幅0.8mの狭小な掘削であるため、該当工区部分について工事立会にて対応することとなった。

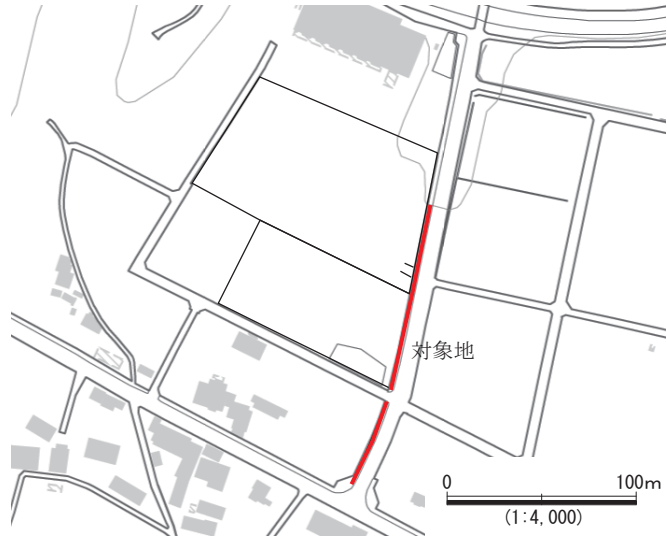
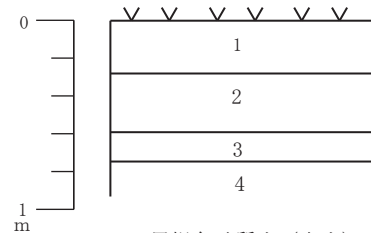


図1-87 市場裏遺跡H19立会調査位置図

工事掘削の後に、壁面を精査して遺構・遺物の有無や堆積状況の確認をおこなった。

基本層序は、現耕土1層の下に旧表土と思われる暗褐色土2層が堆積し、1・2層で約0.6mの厚さになる。2層の下部には部分的に黒色土3層の堆積がみられる。この3層は工区南では認められず、工区北に所々で堆積している。今回は3層から遺物が確認される事はなかったが、周辺で確認される遺物包含層と似ているため、今後とも注意を要する。



- 1. 黒褐色砂質土（表土）
- 2. 暗褐色砂質土（旧耕土）
- 3. 黒褐色砂質土（部分的）
- 4. 褐色砂質シルト（地山）

図1-88 市場裏遺跡H19地点 土層柱状図

今回の工区では遺構の確認は無かった。

・調査後の措置

遺構遺物は確認されなかったため、予定どおり施工した。

稲荷遺跡 H20 地点 立会調査

・調査原因 道路拡幅

・調査種別 立会調査

・所在地 富加町高畑字稲荷地内

・調査期間 平成20年1月15日～2月10日

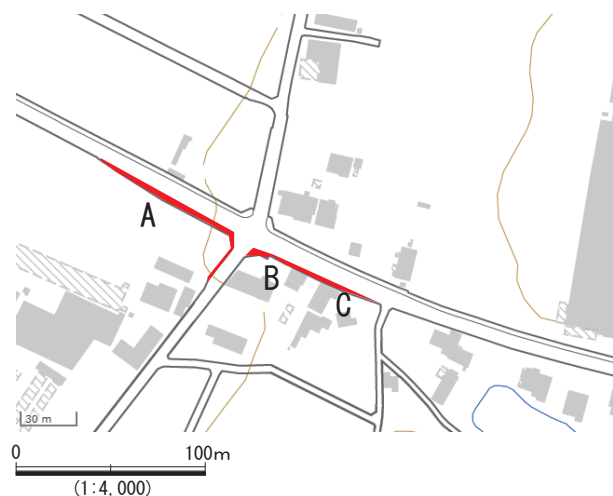


図1-89 稲荷遺跡H20地点 立会調査位置図

・調査概要

旧国道 248 号線（現在は町道）の交差点部分の拡幅計画により可茂土木事務所より 94 条通知が提出された。幅 1 m 程度の狭小な工事であるため工事立会にて確認することとなった。

道路敷の下部には旧表土が残っている箇所が多い。旧表土は 10 ～ 20cm の厚さの黒褐色土である。下部が漸移的になり地山の黄褐色砂質シルト土に至る。遺構や遺物の確認はなかったが、A 地点では漸移層で火焚きの所産である赤色粒を確認した。年代は不明である。

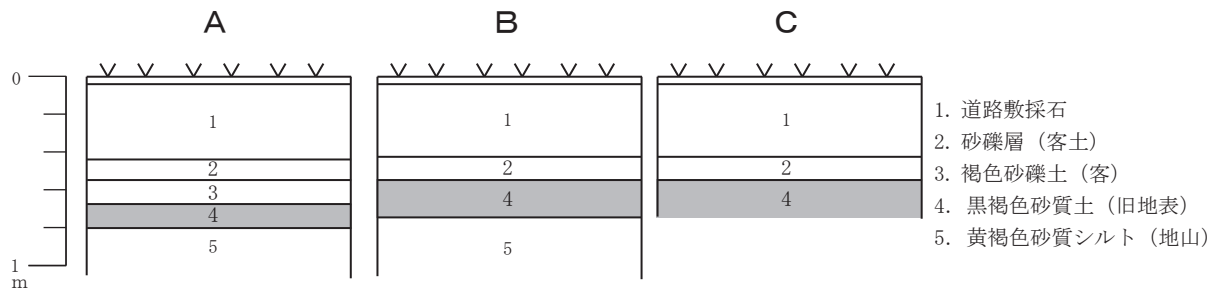


図 1-90 稲荷遺跡 H20 地点 立会調査 土層柱状図

恵日山遺跡 H25 地点 立会調査

・調査原因 個人住宅新築

・調査種別 工事立会調査

・所在地 富加町高畑地内

・調査期間 平成 25 年 6 月 7 日

・調査概要

厚さ 30cm の表土にはプラスチックやコンクリート破片が混入しており、造成土と思われる。掘削は 20 cm 程度であるため表土内で完結し、下層の状況は不明であった。



図 1-91 恵日山遺跡 H26 地点 立会調査位置図

恵日山遺跡 H26 地点 立会調査

・調査原因 個人住宅増築

・調査種別 立会調査

・所在地 富加町高畑地内

・調査期間 平成 26 年 5 月 9 日

・調査概要

既設住宅の造成による客土の下に旧表土が残存する。旧表土中で基礎掘削が完了したため地山の確認はしていない。旧表土から遺構・遺物の確認は無かった。

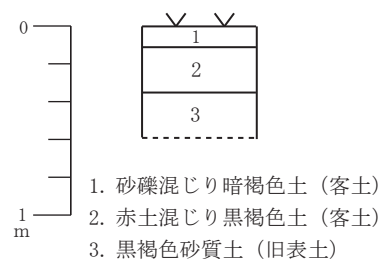


図 1-92 恵日山遺跡 H26 地点 土層柱状図

市場裏遺跡 R01-2 立会調査

- ・調査原因 工場用地造成
- ・調査種別 立会調査
- ・所在地 富加町高畑字稲荷地内
- ・調査期間 令和元年5月13日～6月24日
- ・調査概要

平成30年12月に埋蔵文化財包蔵地の照会を受け、用地の南東隅が僅かに市場裏遺跡の範囲に該当するため93条の届出が提出された。対象地は牛舎が複数棟も南北に並び建ち牧草や糞尿処理場などで土地利用がなされ土地の改変が著しいと考えられるため、工事立会での対応となった。



図1-93 市場裏遺跡 R01-2 立会調査位置図

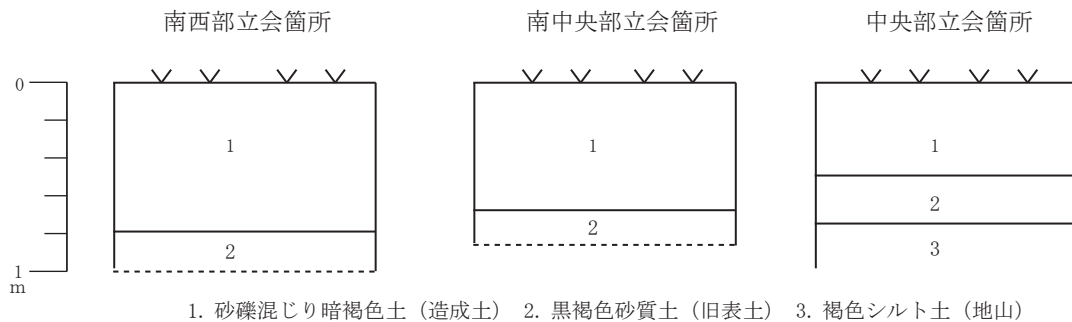


写真1 立会箇所の堆積状況



写真3 落ち込み状遺構 S2



写真2 立会箇所の堆積状況

図1-94 市場裏遺跡 R01-2 地点 土層柱状図及び立会写真

立会調査は、①既設建物の基礎撤去、②既設フェンス解体及びL型擁壁施工時、③敷地南東側の進入口部分施工時に実施することとなり、先駆けて施された①撤去時には遺構遺物の確認は無かった。

②では対象地と隣接地（南）にはフェンスがあり、本工事では既設フェンスの撤去と現場打ちL型擁壁施工時に狭小面積であるが地表下を掘削するため、壁面精査を実施したが、遺物・遺構の確認は無かった。客土である造成土がGL-600～800ほど厚く盛土されていることが分かった。そのため、中央部ではGL-750で地山である褐色シルト土層に至ることが分かったが、他の地点では地山まで掘削が及んでいなかった。

③の敷地南東側の進入口部分施工時の工事立会では、工事車両等が出入りするために開発事業者が新に設けた乗入口の南側法面に、黒色土の広がり（幅3.5m、深さ50cmほど）を確認した。精査すると黒色土層には炭や焼土が含まれており、遺構埋土である可能性が考えられたため開発事業者へ協力を依頼し、工事を中止して部分的な確認調査を実施した。

調査は5月30日に職員2名と作業員1名にて実施した。黒色土の広がりを精査し面的に追っていくと、遺構の大半は以前に牛舎を営んでいた時の既設入口の切土で壊されていることが判明した。遺構は全体像が不明なためS1としたが、カマドラしき遺構が確認されたことから、おそらく一辺5mほどの竪穴建物の可能性が高い。残存部は、その南西辺と考えられ、北西辺隅にあたる箇所にカマドの袖と思われる焼けた粘土塊を検出し、その南東に焚口と考えられる炭化物と焼土の堆積する窪みを確認した。

さらに周辺の表土をめくると、S1の東側に中世陶器が出土する落ち込み状の遺構S2が確認された。

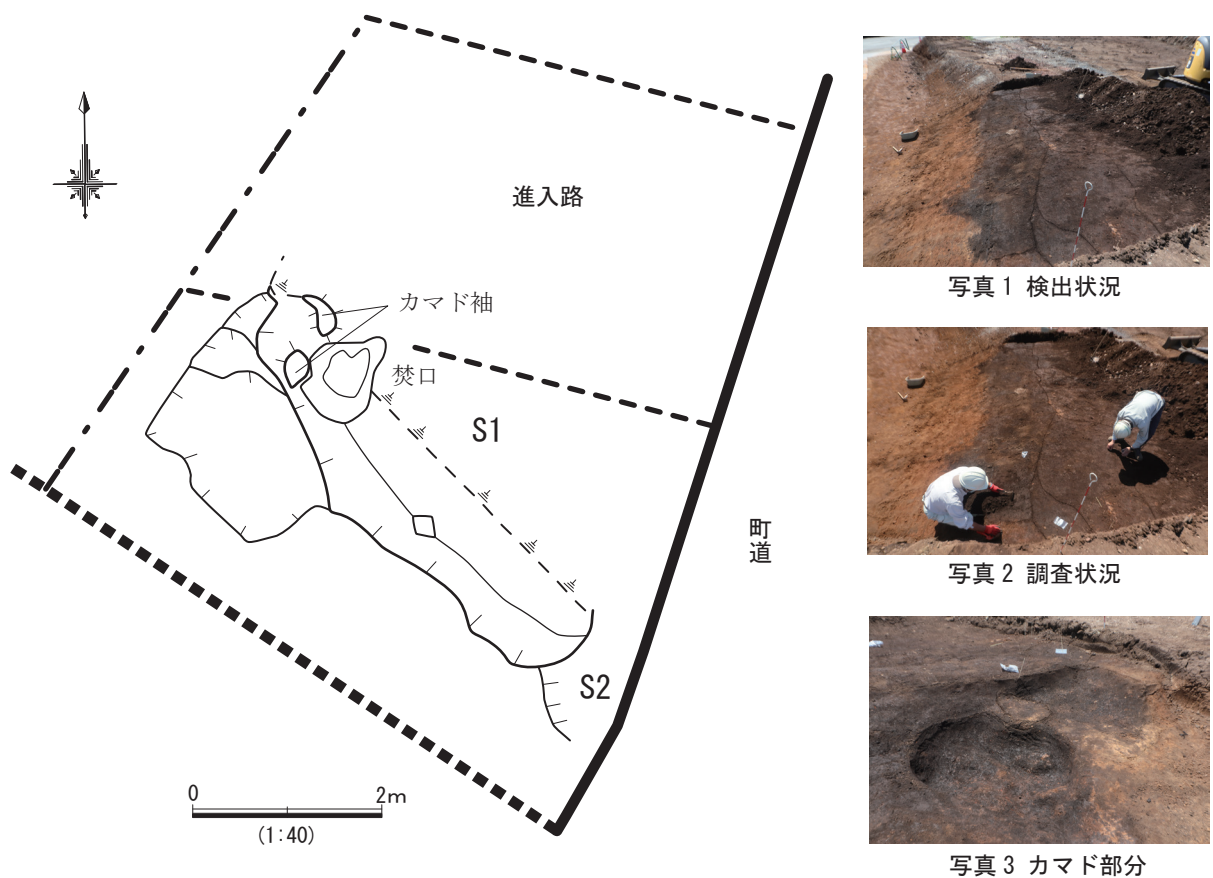


図1-95 市場裏遺跡 R01-2(立会調査) 竪穴建物平面図

攪乱により明確な遺構の平面形を特定できない状況であり、写真で記録して遺物を取り上げた。

S1 から出土した須恵器は坏類、碗類、瓶類、甕類など生活具が揃っていることから考えて、竪穴住居跡の可能性が高い。高台杯（図1-96の1～3）は美濃須恵IV-3期、椀は美濃須恵V期の所産と考えられることから、S1には8世紀後葉～9世紀初頭の年代が与えられる。図1-96の5は瓶類の底部と考えられるが、内面にも灰かぶり釉がみられることから考えると口の大きい横瓶などの可能性がある。

三日月高台の灰釉陶器碗（図1-96の7）は0-53・北丘7号窯段階と考えると10世紀中葉頃、S2に伴う山茶碗（図1-96の16）は明和1号窯段階と考えると13世紀後葉頃の所産である。

断片的ではあるが、奈良時代には集落が展開し、中世前半までは遺跡が存続するものと考えられる。

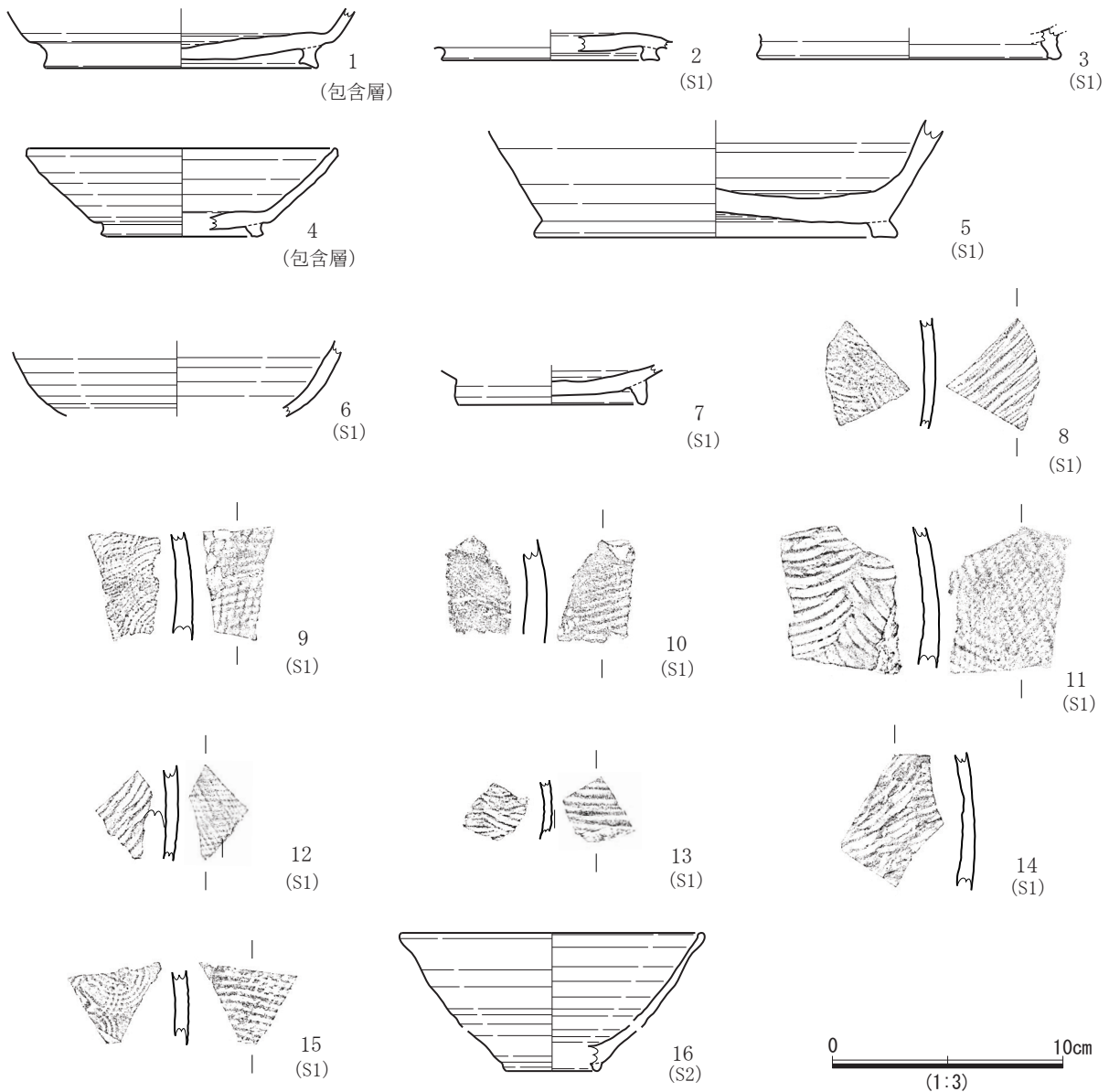


図1-96 市場裏遺跡 R01-2 地点 出土遺物実測図

第5節 大平賀・大山地区の調査



図1-97 大平賀・大山地区調査箇所位置図

本節では、大平賀・大山地区で実施された試掘調査1件について報告する。

なお、3ヶ所の工事立会調査地点については、結果の記載のみとする。

中屋敷北遺跡 H23 地点

立会調査で、盛土造成により擁壁の基礎掘削も表土のみであった。

大山北野遺跡 H22 地点

既存造成盛土内の掘削で、旧地表に達しなかった。

池下遺跡 H28 地点

既存造成盛土内の掘削で、旧地表に達しなかった。

中屋敷遺跡 R05 地点

太陽光発電施設の建設工事であったが、杭打ち込みで本数が少数であったため、打ち込み箇所と本数の確認のみでの工事立会であった。

中屋敷遺跡 R01 地点 試掘調査

- ・調査原因 個人住宅増築
- ・調査種別 試掘調査
- ・所在地 富加町大平賀字中屋敷
- ・調査期間 令和元年6月25日
- ・調査面積 5.0㎡
- ・調査概要

中屋敷遺跡は、津保川右岸の段丘上に立地し、過去の分布調査で古墳時代～戦国期にかけての遺物（須恵器・灰釉・山茶碗・大窯など）を採取したことから、周知の埋蔵文化財包蔵地（散布地）としている。近

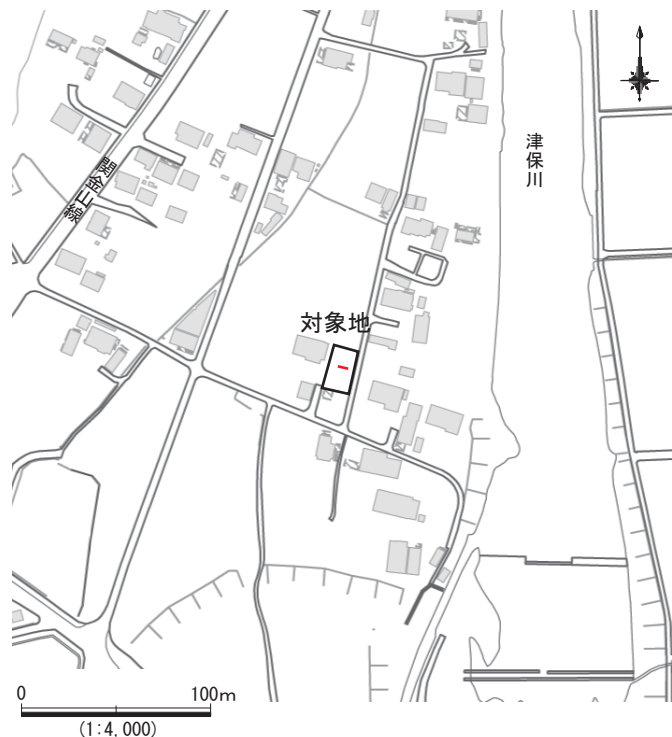


図1-98 中屋敷遺跡 R01 地点 試掘調査位置図

接地には、古代～中世にかけての散布地（本郷遺跡・中屋敷北遺跡）や古墳群（衾宜屋古墳群・閩田古墳群）があるなど、津保川右岸側の段丘上及び丘陵地には遺跡が広がっている。

敷地北側に幅1m・延長5mのトレンチ1本を設定し、試掘調査を行った。GL - 300～350で地山に至り、地山面で遺構検出を試みた。その結果、土坑6基（S1～S6）、性格不明の落ち込み状遺構2基（S7・S8）を確認

した。土坑は不整形で直径20cm～50cm、深さ3cm～20cmで遺物の出土は無かった。落ち込みでは土師器片4点を確認したが遺構に伴うものかは確定できないため、時期不明の遺構として扱う。遺物は、山茶碗4点（白土原1～明和1号窯期、13世紀中葉～14世紀初頭）、近世陶器（瀬戸美濃）1点が出土しているが、明確な遺物包含層は確認できない。おそらく耕作で攪乱されていると思われる。

・調査後の措置 基礎掘削等の影響が狭小であるため、工事立会にて対応した。

・工事立会での所見 令和元年11月12日に境界ブロック積み基礎及び基礎工事に立会し、11月25日に柱状改良の施工確認をおこなった。基礎掘削は耕作土で完結し、地山に達していない。西側の基礎掘方より同一個体と思われる弥生土器片12点が出土した。弥生土器の時期は判断が難しいが、胎土の様子からは近隣の東山浦遺跡で確認される中期の貝田町式の壺と似ている。碎片であるが同一個体であり、近隣に弥生時代の集落が所在する可能性が高く、今後の注意を要する。

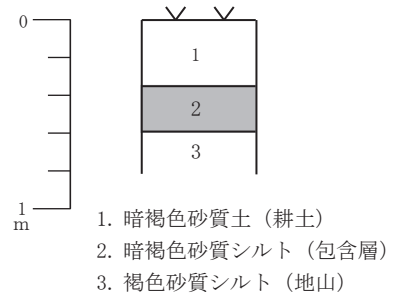


図1-99 中屋敷遺跡 R01 地点 土層柱状図

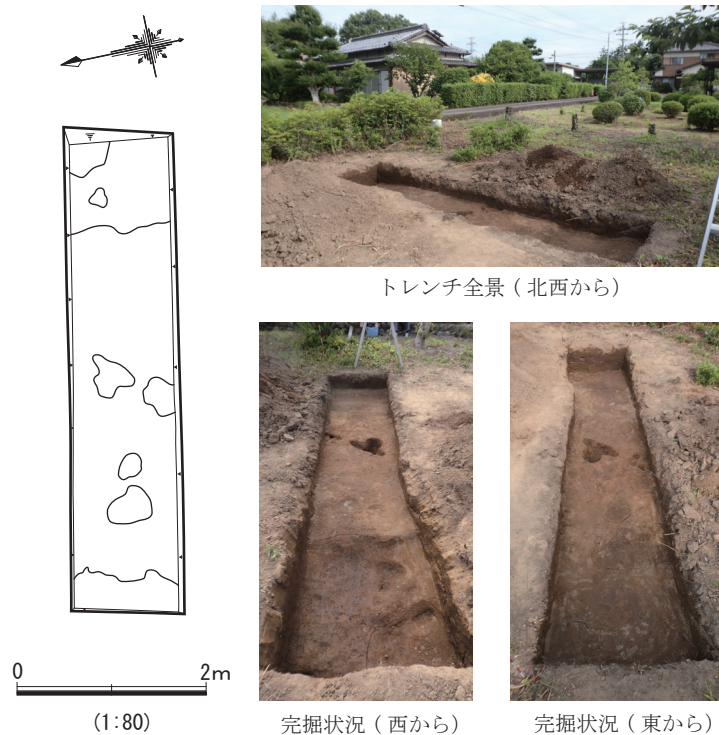


図1-100 中屋敷遺跡 R01 地点試掘トレンチ

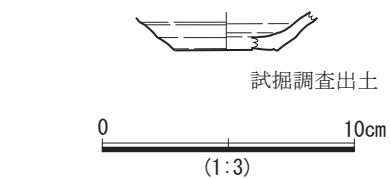


図1-101 中屋敷遺跡 R01 地点出土遺物

第2章 閨田1号古墳の墳丘測量と地中レーダー探査

第1節 経緯と目的

閨田1号古墳は町内で最も保存状態の良い円墳として以前より周知されており、町のHPやパンフレット等でも紹介をしている。令和2年度に地権者から町に対して土地が譲渡されたのを機に、社会教育や学校教育の中で活用できるよう周辺環境の整備（看板・広場の設置）を実施したいと考えており、そのための基礎資料を整備する目的で調査を実施した。

昭和45年当時の記録によると南側に開口部があったとされており、埋葬施設は横穴式石室と想定されるが、現状は目視で埋葬施設を確認できない。古墳の築造年代を絞り込むためには埋葬施設の位置や規模・構造に関する情報を得る必要がある。そのために令和4年度に墳丘測量と地中レーダー探査を実施した。（島田）

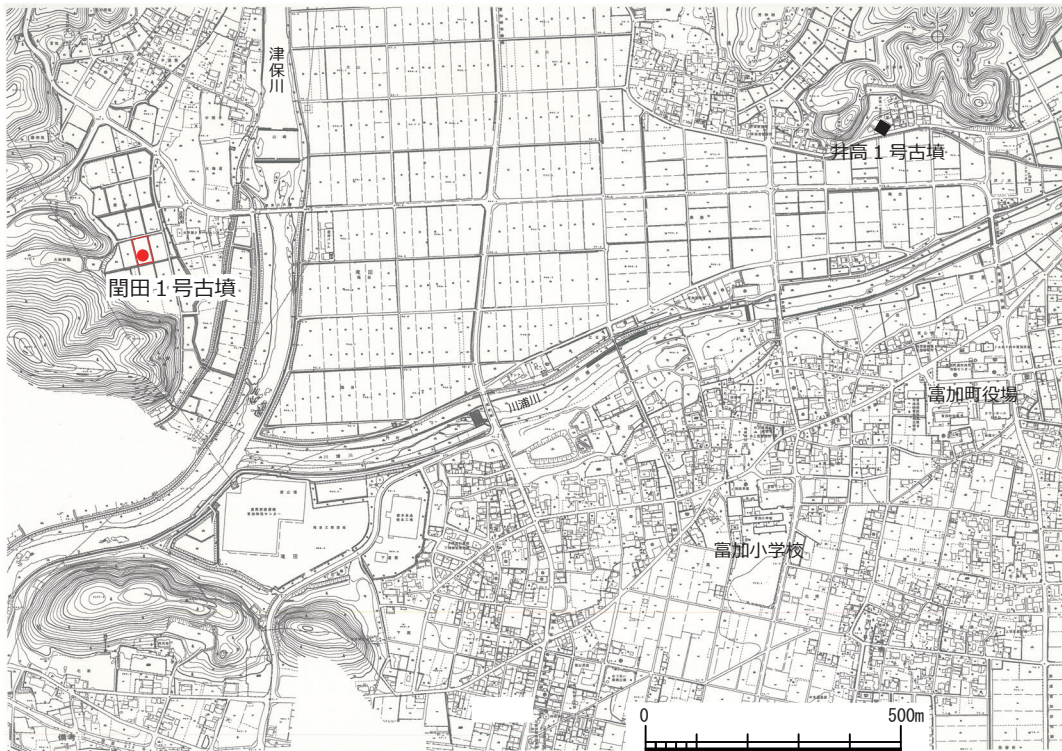
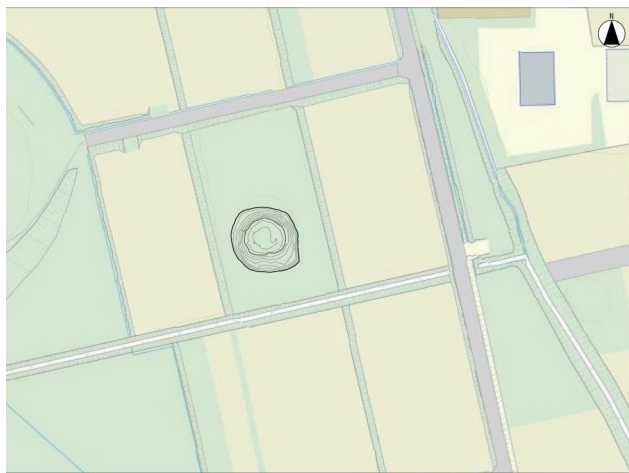


図2-1 閨田1号古墳位置図（1：1500）

第2節 墳丘測量

三次元レーザースキャナーを用いて、墳丘及びその周辺をレーザースキャンし、三次元データを作成している。三次元レーザー計測で使用した機器は、50mで位置精度6mm以内及び距離精度3mm以内の性能を有するもので、2軸コンペセータを内蔵（補正精度2秒以下）し、モデリング（データ合成）精度±4mm以内とした。測定環境への安全に配慮し使用するレーザー強度はクラス1とし、現況の把握及び計測した点群データに色（RGB）データを付加させるため、計測位置と同位置から内蔵のCCD等により画像を取得した。取得した画像は計測された点群データとの合成表示を行った。各ポジション間のデータ合成には、測量用ターゲット等を使用し、各ポジション4点以上のマージポイント（既知点）を設け、座標合成している。



閔田1号古墳遠景（北東から）

0 50m
1:2000

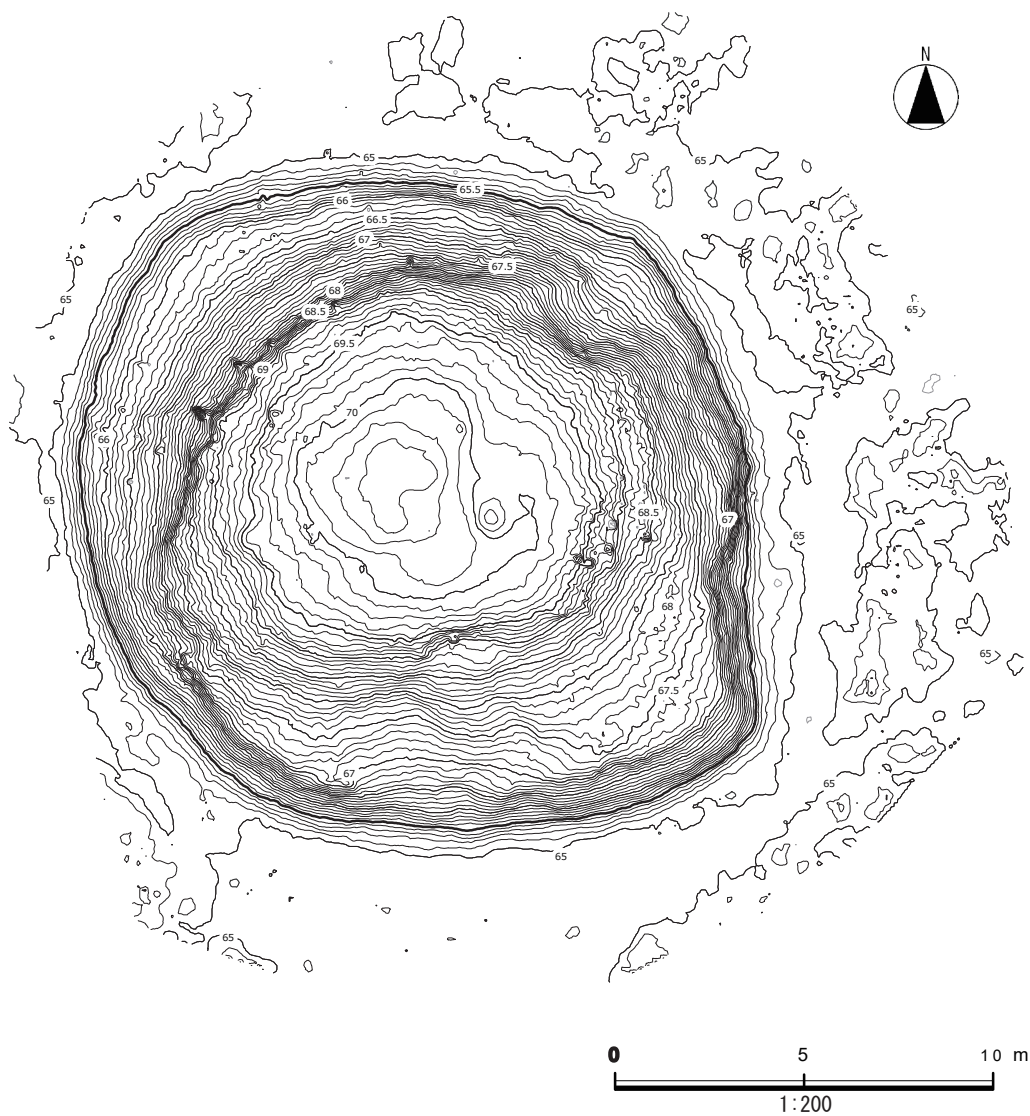


図2-2 閔田1号古墳 墳丘測量図（1：200）

第3節 地中レーダー探査

(1) 調査概要

墳丘部法面レーダー探査（単測線） 11 測線（延長 232m）
墳丘部平場レーダー探査（タイムスライス） 測線（延長 186m²）

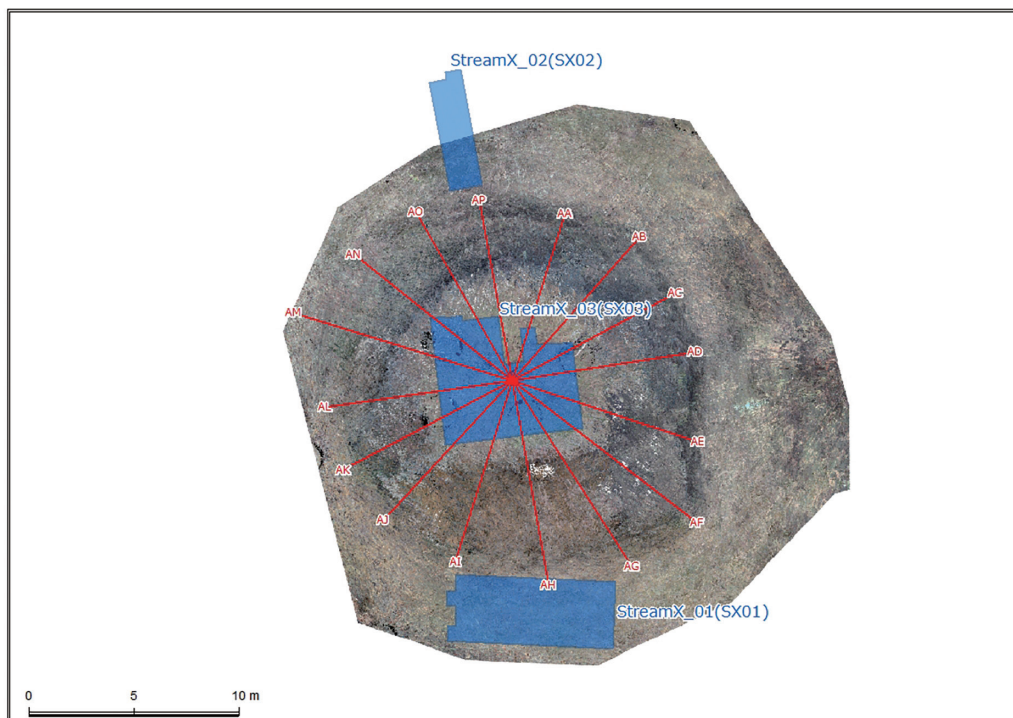


図 2-3 測線位置図

(2) 探査機器

探査では IDS Georader 社製 Stream-X、Hi-Mod を使用した。Stream-X は 200MHz のアンテナを 7 つ搭載しており、一度の計測で 7 断面取得し、合わせて水平断面（タイムスライス）を取得することができる。Hi-Mod は 2 周波アンテナを有し、一度の計測で 200, 600Mhz のデータを取得できる。データの取得および表示は Panasonic 社製 TOUGH BOOK を用いた。



Stream-X



Hi-Mod

図 2-4 地中レーダ機材

表1 地中レーダー機材 特性表

	Stream-X	Hi-Mod	
アンテナタイプ ^{※1}	VV : 200MHz	HH : 200MHz	HH : 600MHz
探査深度 [m] ^{※2}	6	6	4
観測幅 [m]	0.72	1.2	
観測断面数	7	4 ^{※3}	
横断サンプリング [cm]	12	40	
機材の性能	・ 観測幅が広い	・ 2周波アンテナ	
	・ 探査深度 < 2 ~ 3 m		

※1 : VV は縦断方向、HH は横断方向に感度を持つアンテナ

※2 : 土壌状態により異なる

※3 : Hi-Mod は合計 8 断面

(3) 埋設物の抽出

地中レーダーにより取得したデータは、受信した反射波の反射強度に応じてグレースケールで表示される。グレースケールは 256 段階の色調を割り当て、白色が最も反射強度が強く、黒色が最も反射強度が弱くなる (図 2-5)。

レーダー波の反射は、媒質中の音響インピーダンスに差異が生じた面 (埋設物や地質の境界面) に起こり、反射パルスが強い場合は、媒質中の比誘電率が急激に変化している (異なる素材や地質の境界面) とみなすことができる。

地中レーダーによる反射面の深度は、反射波がアンテナに戻ってくるまでの時間 (往復反射時間) で表示され、地層の比誘電率を推定することにより、電磁波の伝播速度が求められる。

地中レーダーの測定記録は、縦軸に電磁波の反射往復時間 (深度)、横軸にアンテナ中心の移動距離を表示したものであり、簡易断面図的に表現される。この断面図に表示されるのは物体の形状そのものではなく、電磁波の反射強度を色分けしたものであり、均一な地質下において映像に変化が認められる場合は、地下埋設物や地層の変化といった、然るべき理由が存在し、その範囲について分析を行うことが必要となる。

地表下に埋設された瓦礫などは反射強度が比較的高く、白色~灰白色で表示される。土間やコンクリート、硬化面など、周辺の土壌よりも固く締まっている場合は、そうでない土壌と比べると反射強度も高く、やはり白色~灰白色で表示されることが多い。マンホールや躯体など、電磁波が透過できないもの場合は、電磁波が全反射するため、

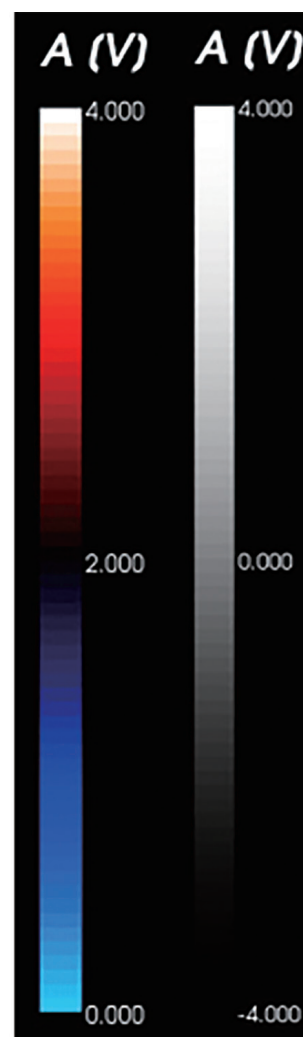


図 2-5 反射強度凡例

その部分だけが強調された映像となり、構造物下部の状況を反映した画像にならないので注意が必要である。

表土・包含層・盛土層・自然堆積層などは反射強度が相対的に弱く、灰色～黒色で表示されるが、土質の違いに応じて反射強度が異なるため、土質の境界を判読することは可能である。包含層以下において反射強度が比較的強い場合は、礎石や石垣、杭、板材などの構造物部材や遺物である可能性が考えられる。こうした、状況に応じて判断することにより、地下埋設物の抽出を行なった。埋設物を判定する際に参考にした反射パターンを第2-6図に示す。

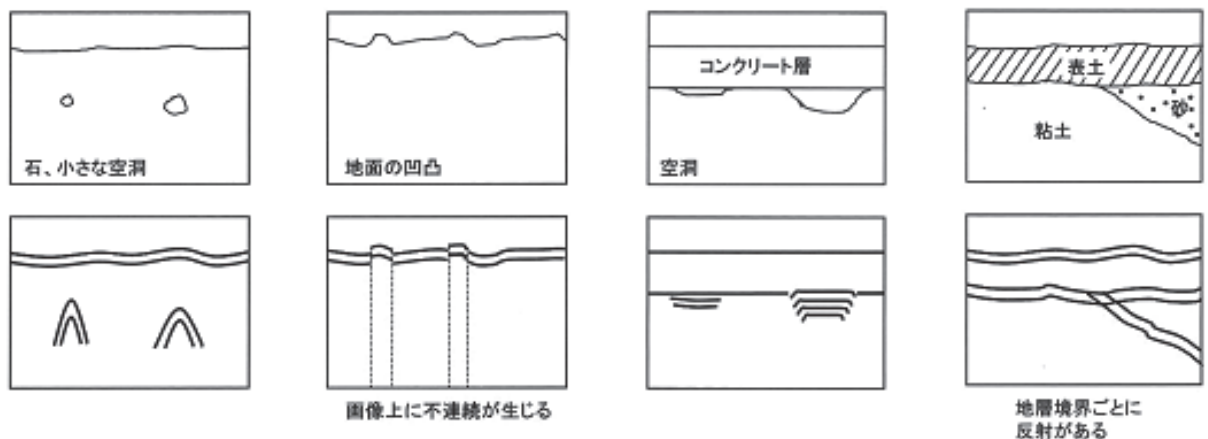


図2-6 反射パターン凡例

(4) 探査方法

地中レーダー探査に先立ち、探査測線の設置を行った。探査測線は単測線による「墳丘部法面レーダー探査」、墳丘部平場におけるタイムスライス（水平断面）による「墳丘部平場レーダー探査」に分けて設置した。

探査本数は「墳丘部法面レーダー探査」において232m、「墳丘部平場レーダー探査」において186mを設定した。「墳丘部法面レーダー探査」ではHi-Mod（単測線）による断面上の地質相違による信号の変化を計測した。「墳丘部平場レーダー探査」では周溝、土橋、墳頂部の地中の面的な反応（タイムスライス）を計測した。

探査完了後、既知点及びGNSS測量機を用い基準点を設置、測線起点と終点の座標を取得した。レーダー探査と並行して、閏田1号墳の平面図、地形図作成を目的としたレーザー計測を実施した。すべての調査終了後測線のピンを回収し現地作業を終了した

(松本 拓)

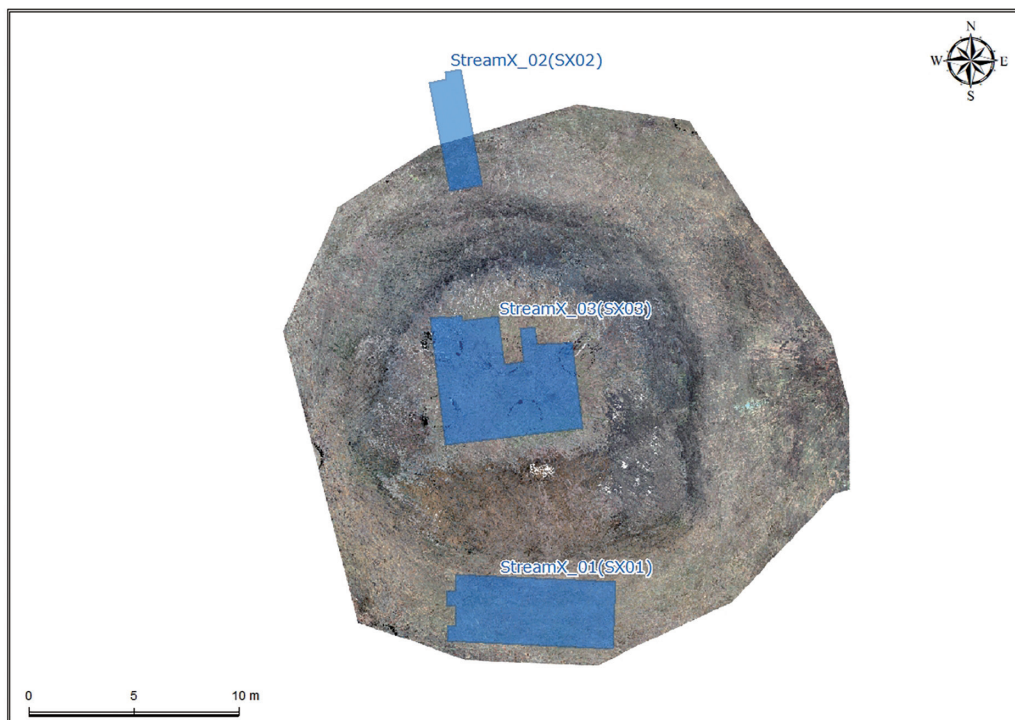


図2-7 地中レーダー測線位置図 (Stream X)

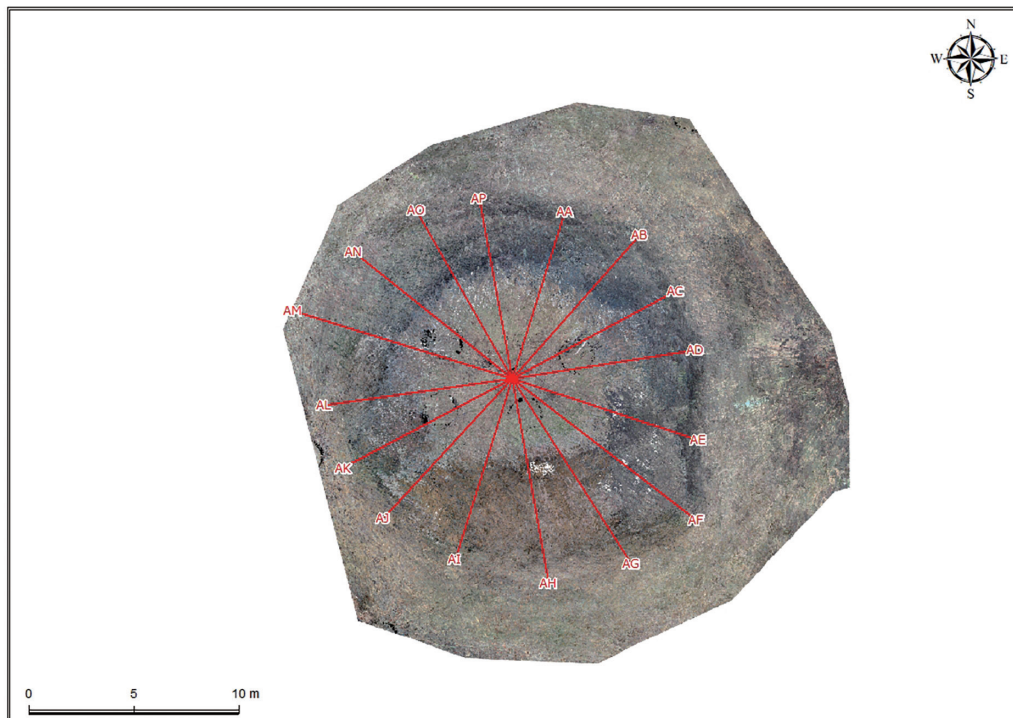


図2-8 地中レーダー測線位置図 (Hi-mod)

(5) 探査結果

今回の探査で調査した測線数、測線距離・面積は下記の通りである。探査成果としてタイムスライス平面図と断面図を作成した。

表2-2 地中レーダー探査実施数量

測線名	種別	周波数	平面距離(m)	測定距離(m)	備考
AA	単測線	200/600Mhz	8.32	4.80	障害物のため距離程4.8mで測定終了
AB	単測線	200/600Mhz	9.14	2.85	障害物のため距離程2.85mで測定終了
AC	単測線	200/600Mhz	8.79	4.65	障害物のため距離程4.65mで測定終了
AD	単測線	200/600Mhz	8.84	11.00	
AE	単測線	200/600Mhz	9.32	10.75	
AF	単測線	200/600Mhz	11.07	11.60	
AG	単測線	200/600Mhz	10.47	11.50	
AH	単測線	200/600Mhz	9.87	10.75	
AI	単測線	200/600Mhz	9.02	10.80	
AJ	単測線	200/600Mhz	9.03	10.60	
AK	単測線	200/600Mhz	9.08	10.75	
AL	単測線	200/600Mhz	9.00	10.80	
AM	単測線	200/600Mhz	10.91	4.85	障害物のため距離程4.85mで測定終了
AN	単測線	200/600Mhz	9.63	10.75	
AO	単測線	200/600Mhz	9.25	10.55	
AP	単測線	200/600Mhz	8.73	10.50	
測線名	種別	周波数	測線数	面積(m ²)	備考
SX01	タイムスライス	200Mhz	4	24.49	
SX02	タイムスライス	200Mhz	2	8.47	
SX03	タイムスライス	200Mhz	8	32.67	

5-1 墳丘部の単測線

墳丘部では岡田1号古墳における石室の規模、主軸、構造（横穴か縦穴か）の確認を目的に調査を行った。調査では墳丘部の断面に沿ってレーダー探査を行う「墳丘部法面レーダー探査（以下、単測線）」と、墳頂部平場で水平方向に探査を行う「墳丘部平場レーダー探査（以下、タイムスライス）」を実施した。

単測線の探査では墳丘の中心から放射状に測線を設定（AA～AP）し、周波数は200Mhzと600Mhzにて探査を行った。探査成果はまず、中心から直線でつながる測線同士を1本の測線とした測線素図を作成し、その後平行して行ったレーザー計測結果から作成した断面図に合わせ加工し、測線図を作成した。また、立木や下草等により途中で計測不能になったデータについては計測できた部分のみ作図した。

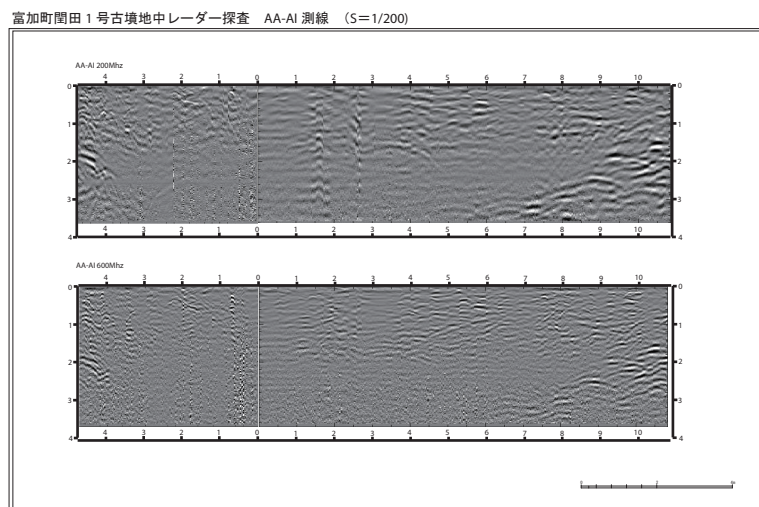


図2-9 測線素図（AA—AI断面）

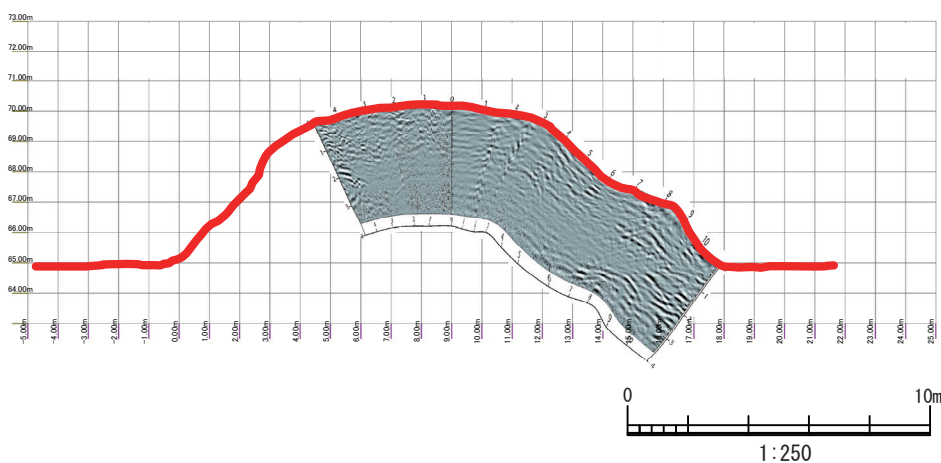


図2-10 測線図（AA—AI断面）

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AA-AI断面 200Mhz(S=1/250)

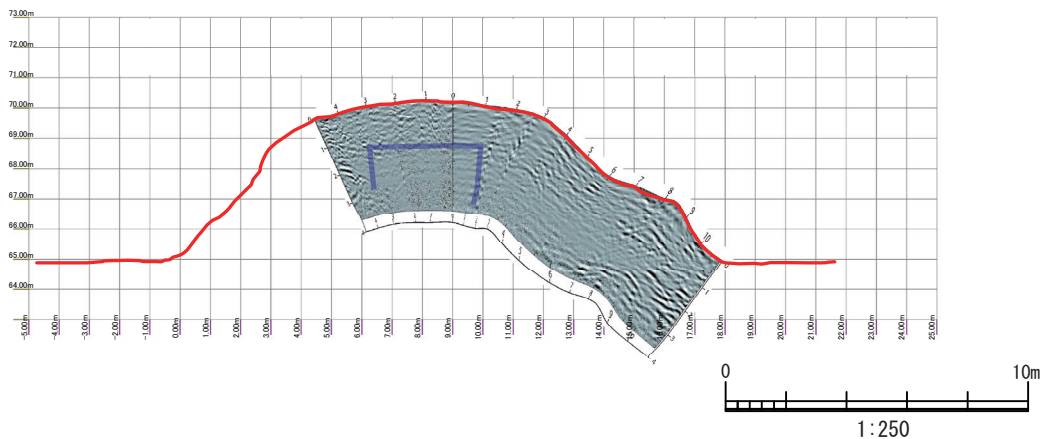


図2-11 測線図 (AA — AI 断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AB-AJ断面 200Mhz(S=1/250)

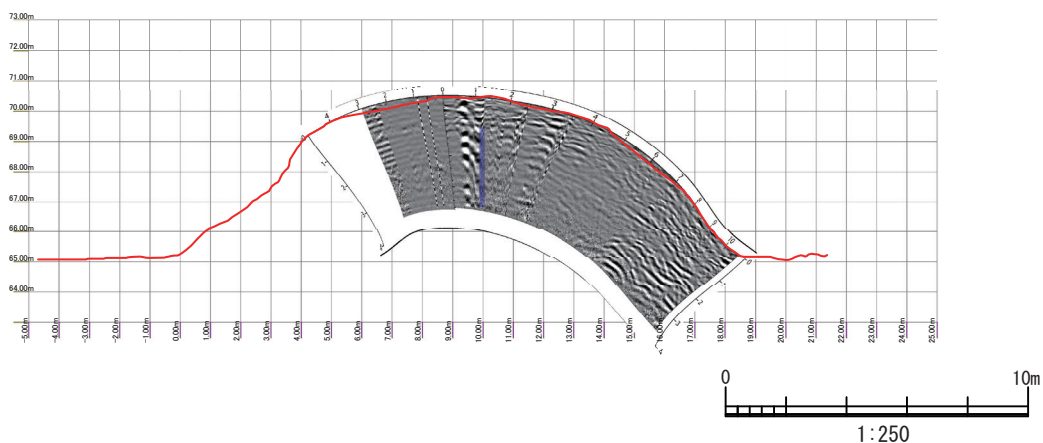


図2-12 測線図 (AB — AJ 断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AC-AK断面 200Mhz(S=1/250)

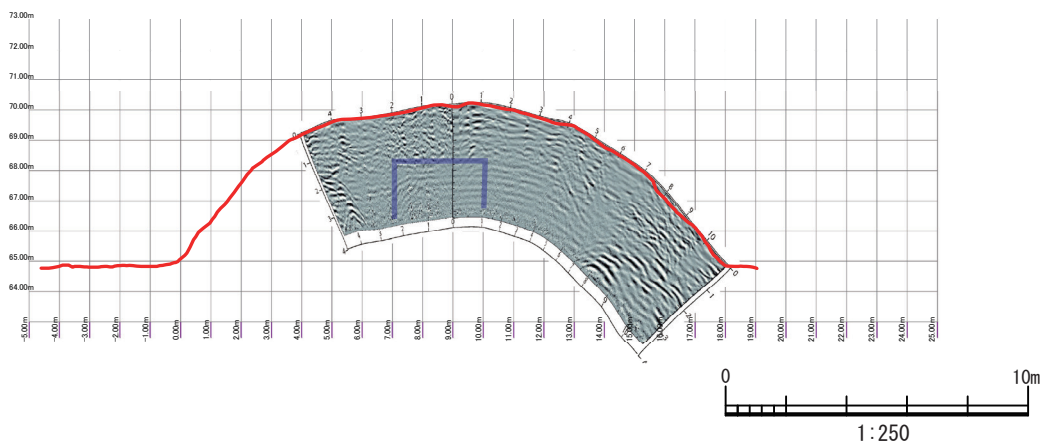


図2-13 測線図 (AC — AK 断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AD-AL断面 200Mhz(S=1/250)

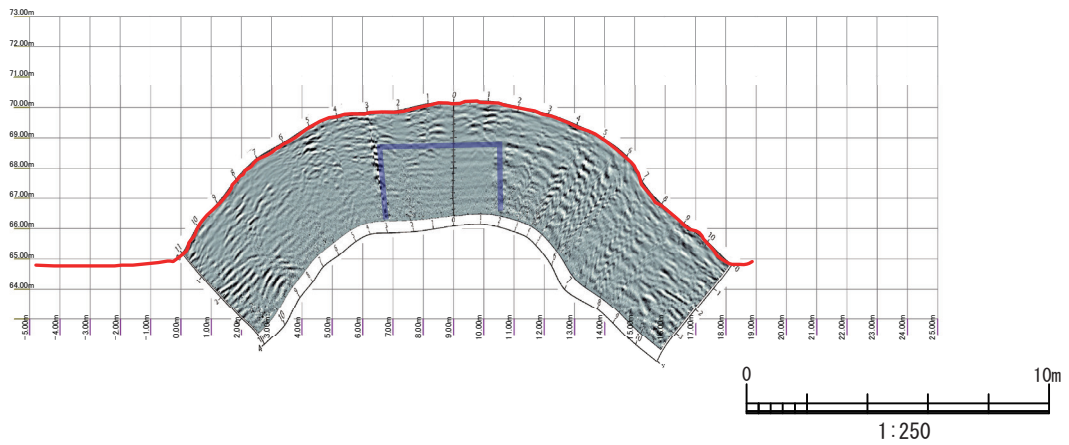


図2-14 測線図 (AD—AL断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AE-AM断面 200Mhz(S=1/250)

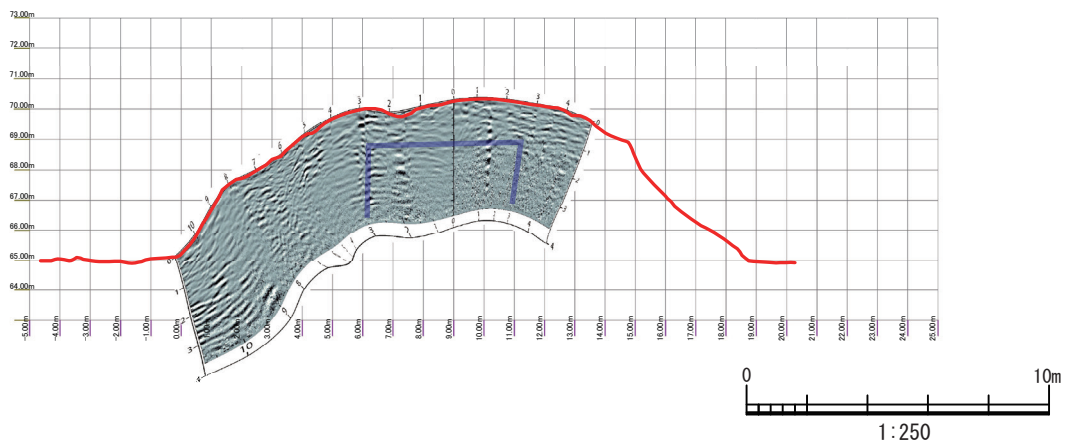


図2-15 測線図 (AE—AM断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AF-AN断面 200Mhz(S=1/250)

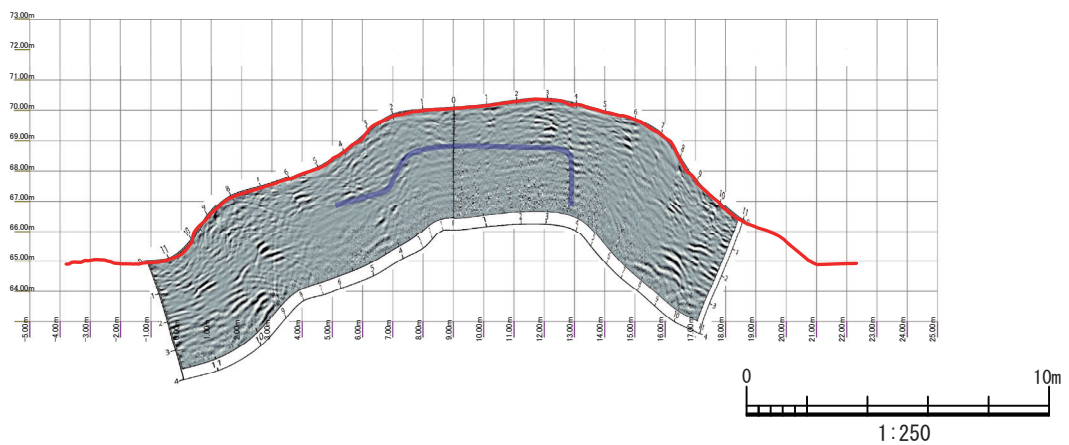


図2-16 測線図 (AF—AN断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 AG-AO断面 200Mhz(S=1/250)

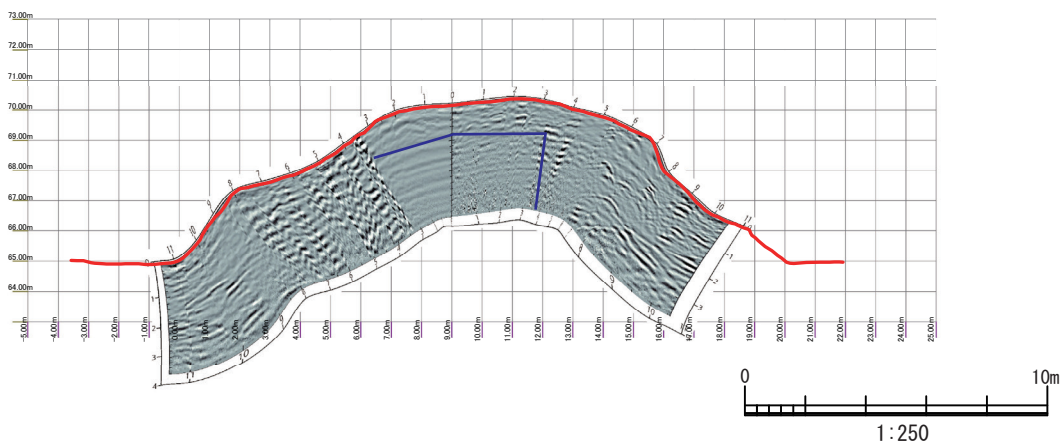


図2-17 測線図 (AG—AO断面)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 A-AP断面 200Mhz(S=1/250)

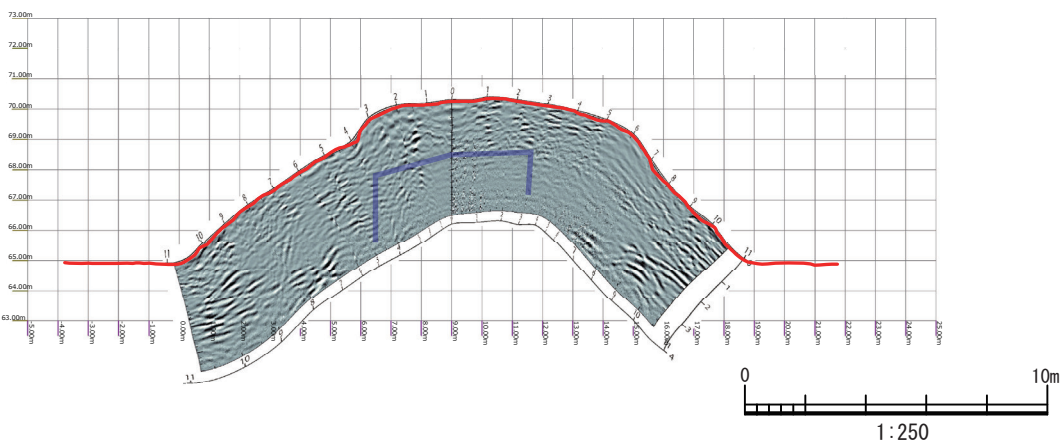


図2-18 測線図 (AH—AP断面)

全体的な傾向としては表層から深度2 m程度までは細かな反応が多く認められ、特に深度1～2 m程度ではやや大きめの石などの反応が認められる。一方、墳丘中央部においては深度2 m以下より反応が弱い部分が認められる。この傾向はノイズが多く、詳細が判別できないAB—AJ測線を除く、すべての測線において認められる。周囲に石などの反応があり、中央部に反応が薄い（石などが混在しない）層がある可能性が指摘できる。

また、AA—AI、AC—AK、AH—APでは反応の弱い部分が5m程度であるのに対し、AF—ANでは9m程度認められることから、反応の弱い部分は南東-北西方向に長く、北東-南西方向に短い可能性が高いことが分かる。

5-2 タイムスライス

墳丘部におけるタイムスライス探査では、墳頂部平場のほぼ南北方向に測線を設け、探査を行った。タイムスライス探査では探査した測線からコンピュータ処理により3cm刻みの水平断面を作成した。探査は深度5 m付近まで行っている。以下主な反応が認められた深度の測線図を示す。

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-59.96cm)

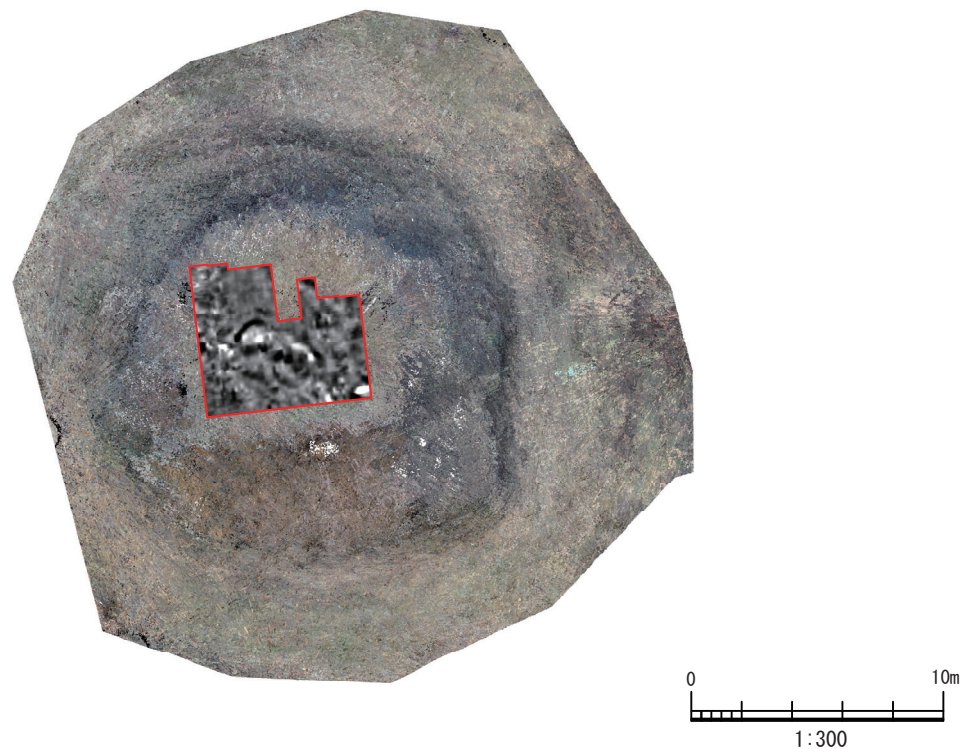


図2-19 水平断面図 (深度：-59.96cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-159.89cm)

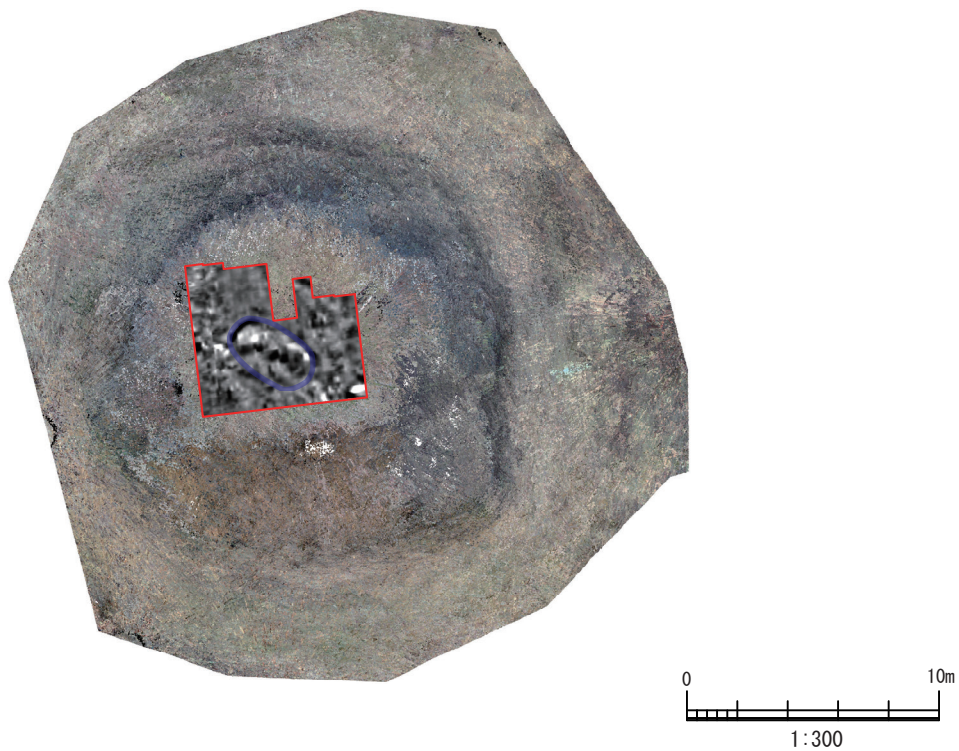


図2-20 水平断面図 (深度：-159.89cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-199.86cm)

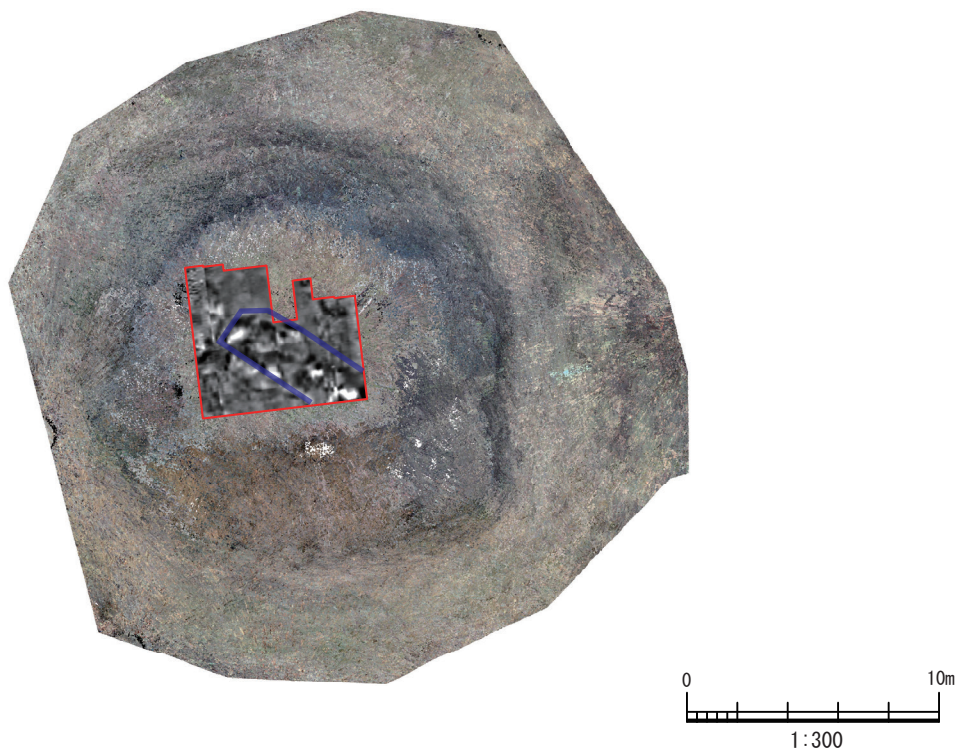


図2-21 水平断面図 (深度：-199.86cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-239.83cm)

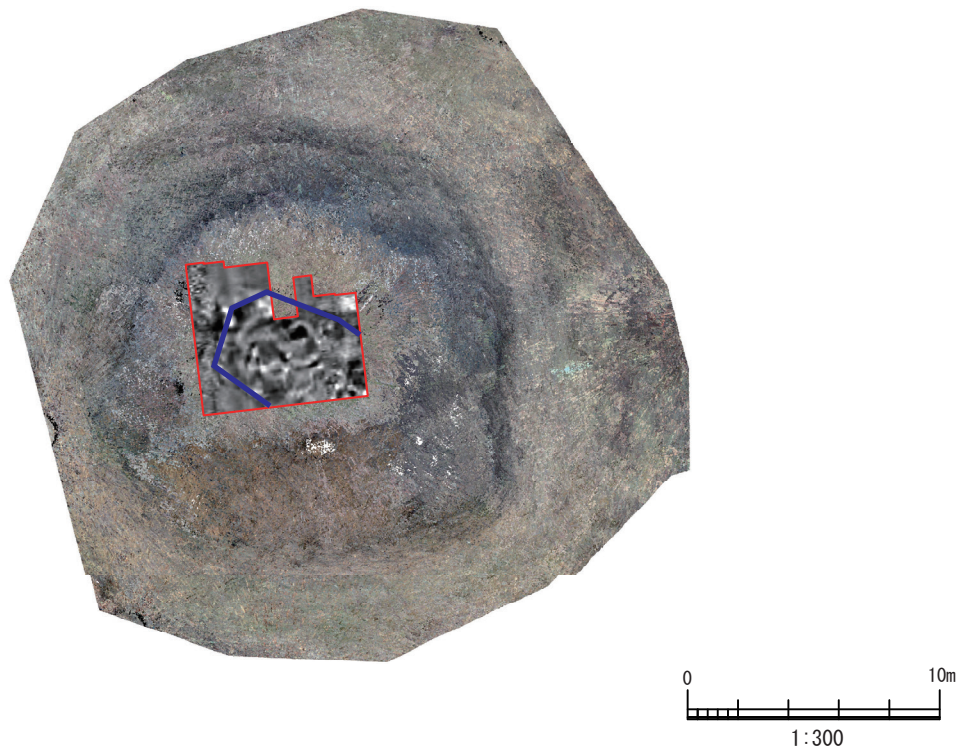


図 2-22 水平断面図 (深度：- 239.83cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-259.82cm)

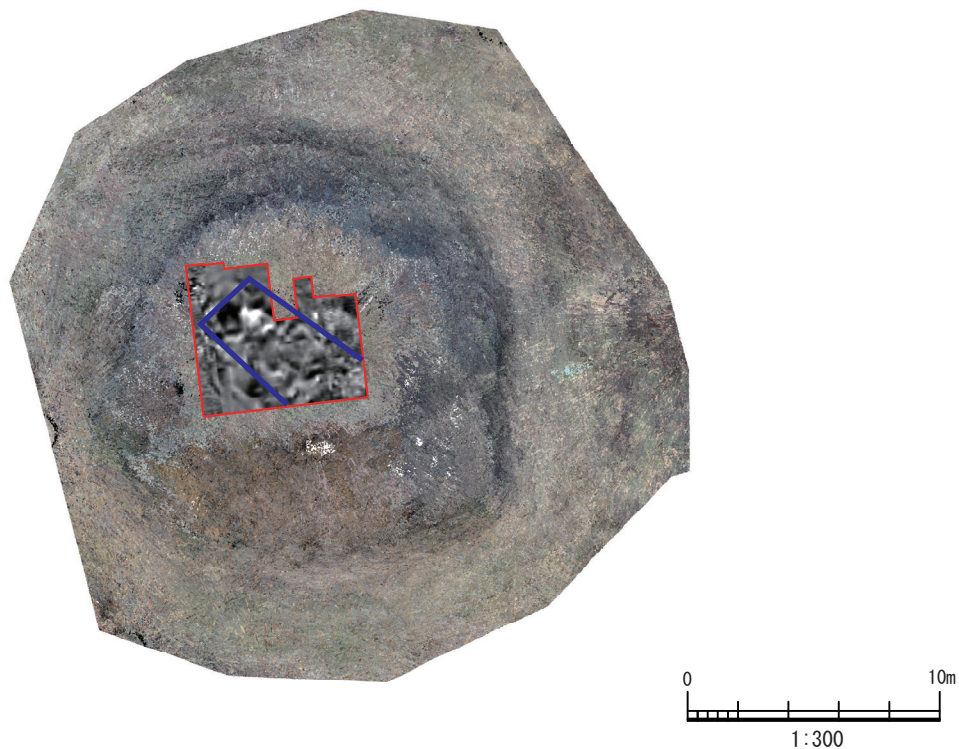


図 2-23 水平断面図 (深度：- 259.82cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-299.79cm)

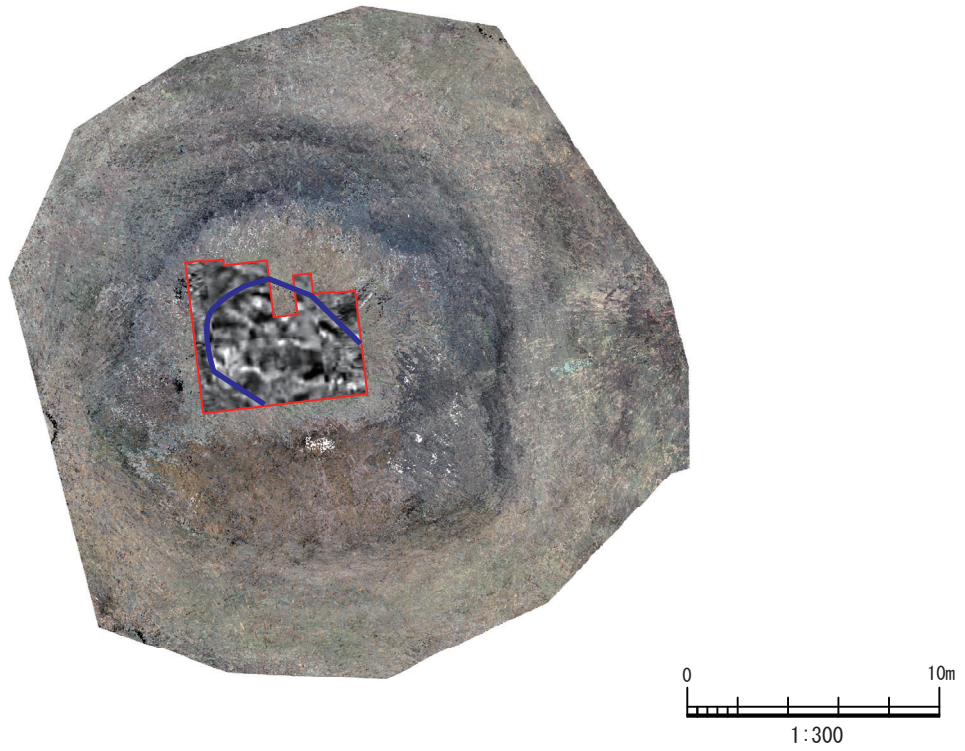


図2-24 水平断面図 (深度：-299.79cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-299.79cm)

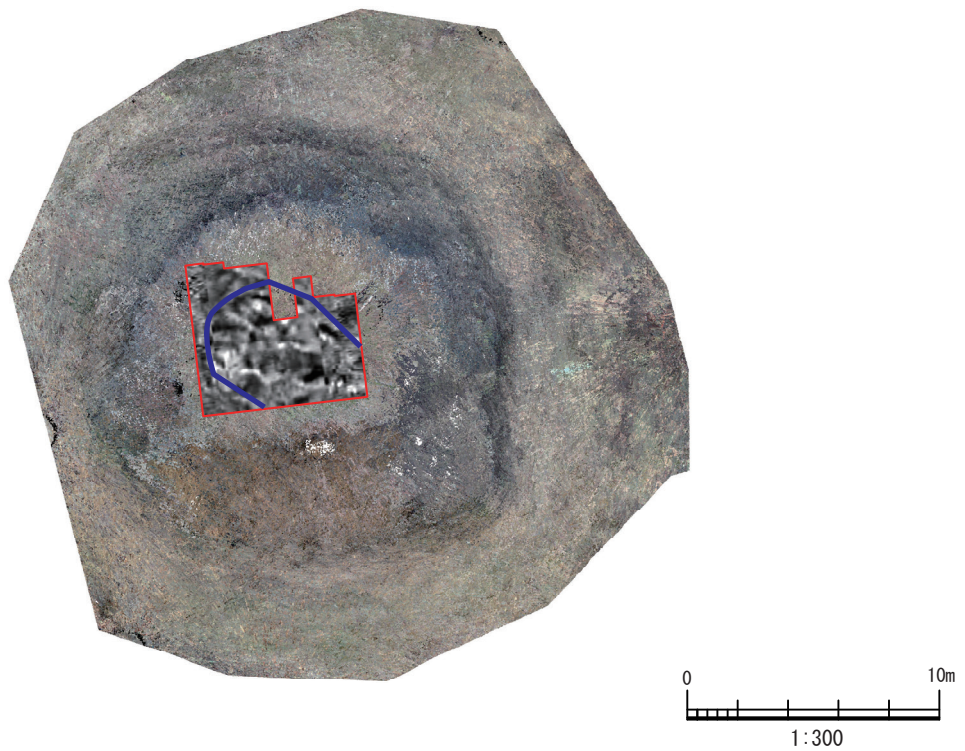


図2-25 水平断面図 (深度：-359.75cm)

タイムスライスでは地表より深度 150cm 程度までは、20cm 程度の石を含むと考えられる細かな反応を多く示すが、深度 150cm 以降では中央に楕円形のプランが確認される。このプランは下層に行くにしたがって拡大し、特に深度 200cm 程度で最も明瞭なプランを呈する。

南東側に狭まるような形状を示し、北西側で広いプランを呈する。深度 200m 付近では全長 570cm 程度、全幅 277cm 程度と想定される。深度 200cm 以降ではプランが徐々に不明瞭になり、深度 300cm 以下ではほぼ消滅する。

5-3 小結

以上のように墳丘部の調査では、単測線、タイムスライスともに墳丘中央部の内部、墳頂より深度 200cm 程度にプランが検出される。このプランは周囲の反応等から、石などの比較的硬質なものに囲まれていると想定され、内部は空洞もしくは土等で充満していると考えられる。主軸方向は南東 - 北西方向と推定される。

5-4 墳丘裾部のレーダー探査結果

閩田 1 号古墳に周溝や土橋が設けられているかについて確認するため、部分的ではあるが、タイムスライスによる探査を行った。

(ア) 北側墳裾

富加町閩田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-19.93cm)

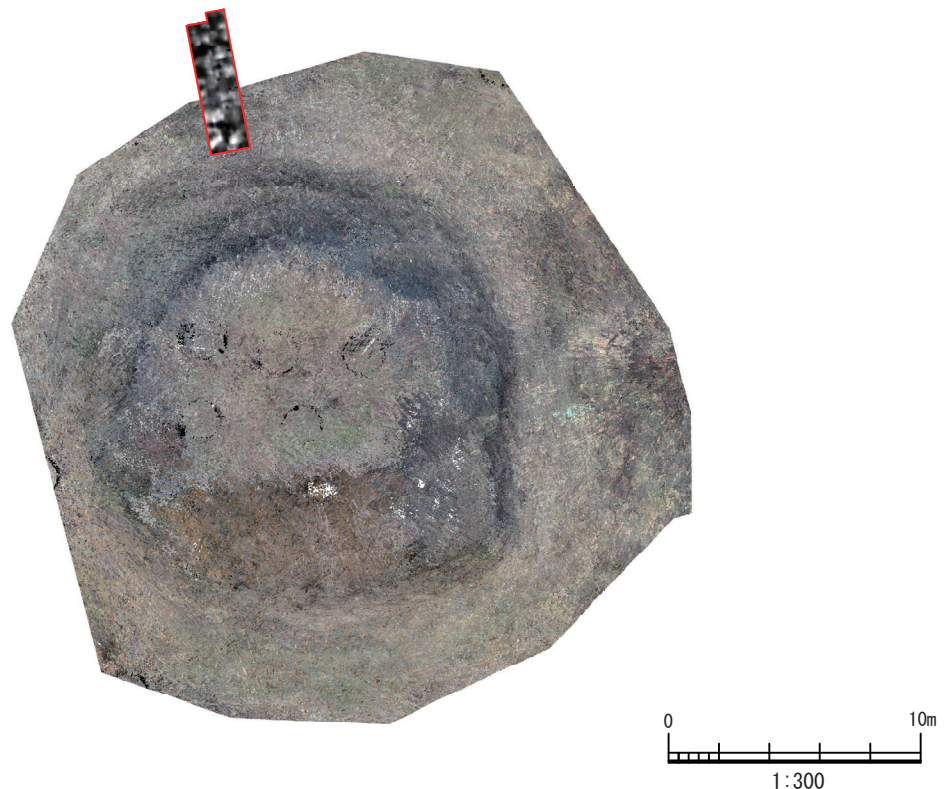


図 2-26 水平断面図 (深度：-19.93cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-39.97cm)

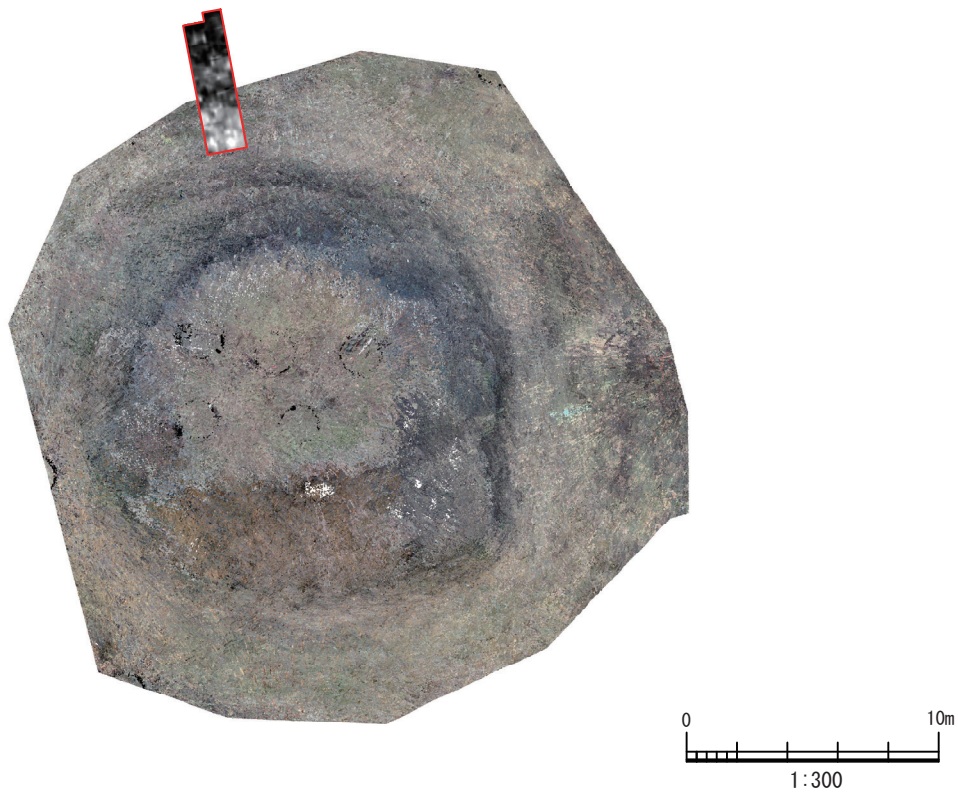


図2-27 水平断面図 (深度：-39.97cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-59.96cm)

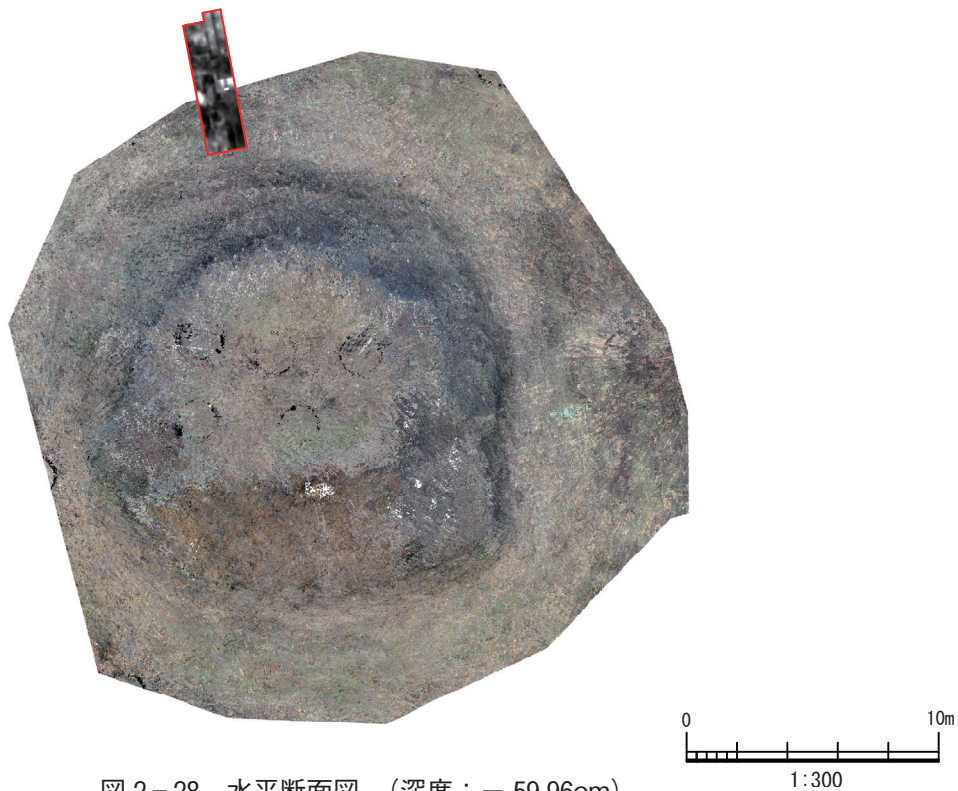


図2-28 水平断面図 (深度：-59.96cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-79.94cm)



図2-29 水平断面図 (深度：-79.94cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-119.92cm)

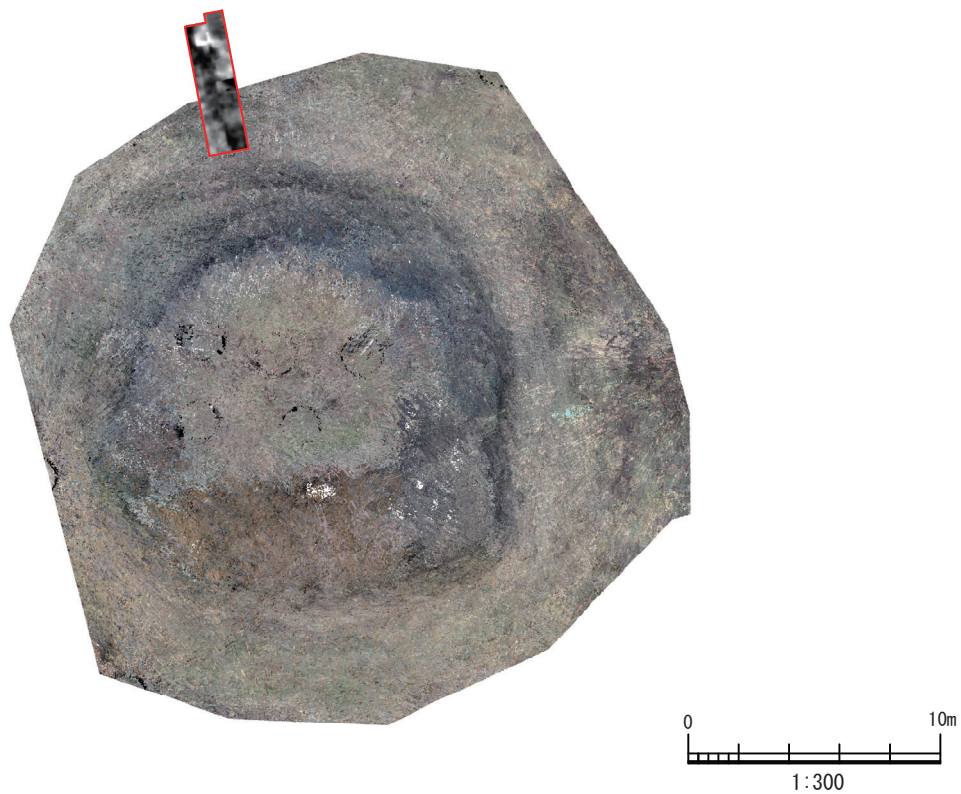


図2-30 水平断面図 (深度：-119.92cm)

深度 30cm 程度までは特に大きな反応は認められない。しかし、深度 30cm ～深度 80cm 程度にて周囲と反応の異なる部分が認められる。深度 30 ～ 50cm 程度までは周囲より強い反応が認められ、深度 50 ～ 80cm では周囲よりも弱い反応が認められる。周囲より強い反応は覆土、弱い反応は地山と想定すれば、深さ 30cm ～ 50cm 程度の浅い溝の可能性もある。

(イ) 南側墳裾

過去の記録等によると墳丘の南に開口部ありとのことであった。そのため墳丘南側を探査することで土橋等の確認も視野に入れていたが、墳丘レーダー探査により、石室入口が南東側であることが判明したため、今回の測定では土橋の確認はできなかった。

深度 60cm 程度より深度 120cm 程度までの間に南東 - 北西方向に長軸 220cm、短軸 127cm の反応が確認される。反応の強度から複数の石の反応と考えられる。

(松本拓・島田崇正)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-19.99cm)

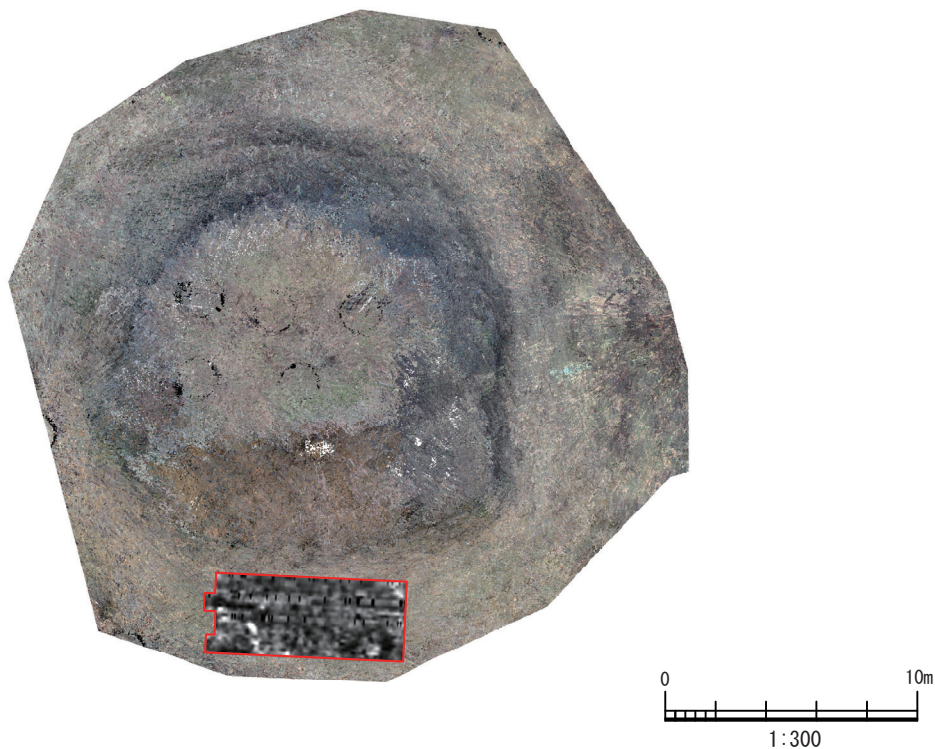


図 2-31 水平断面図 (深度：- 19.99cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-59.96cm)

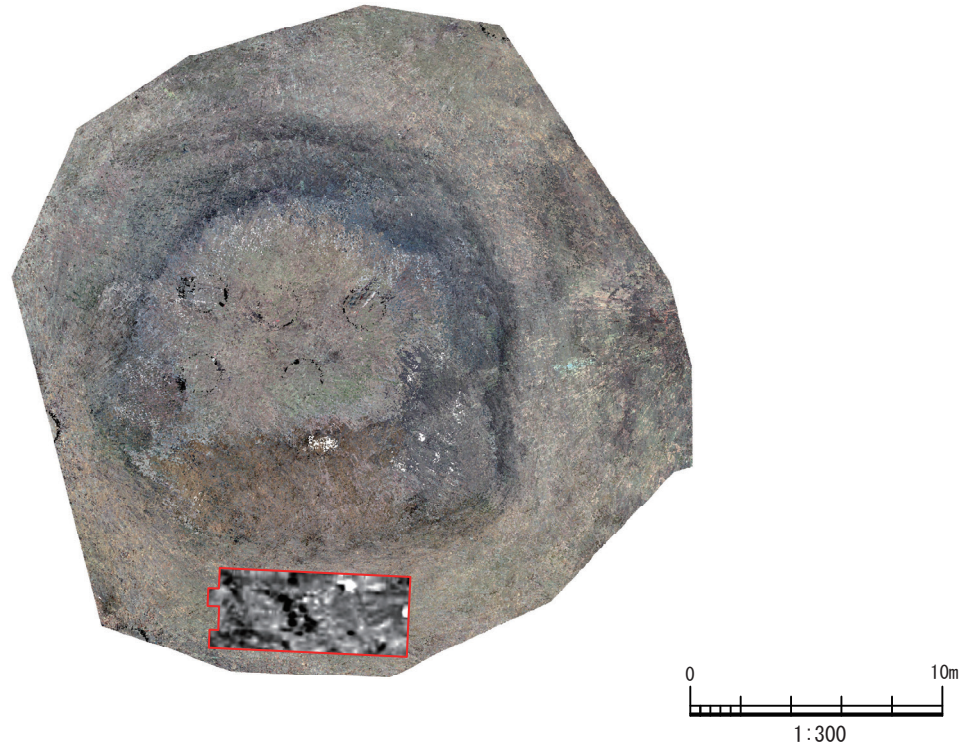


図2-32 水平断面図 (深度：-59.96cm)

富加町閨田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-79.94cm)

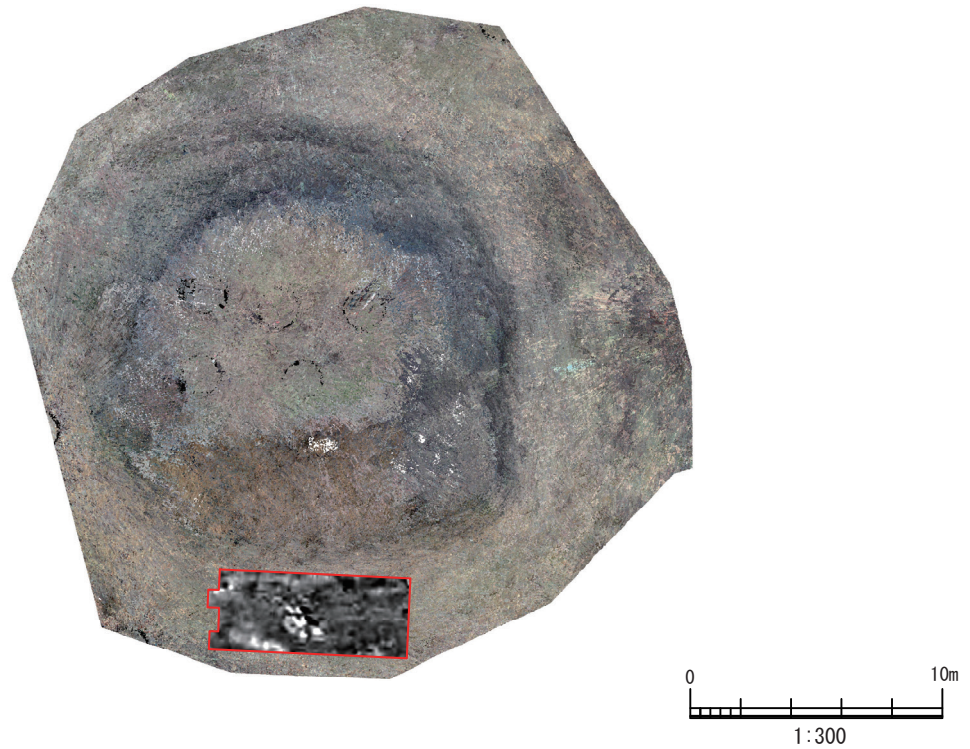


図2-33 水平断面図 (深度：-79.94cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-119.92cm)

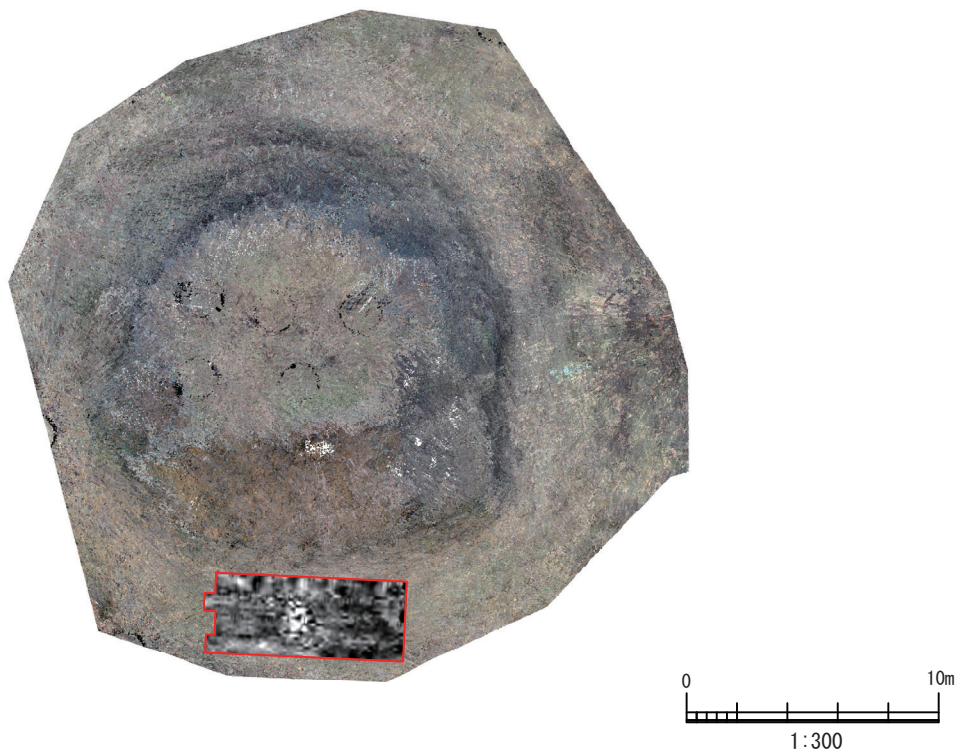


図2-34 水平断面図 (深度：-119.92cm)

富加町関田1号古墳地中レーダー探査 測線図 水平断面図(深度：-159.89cm)

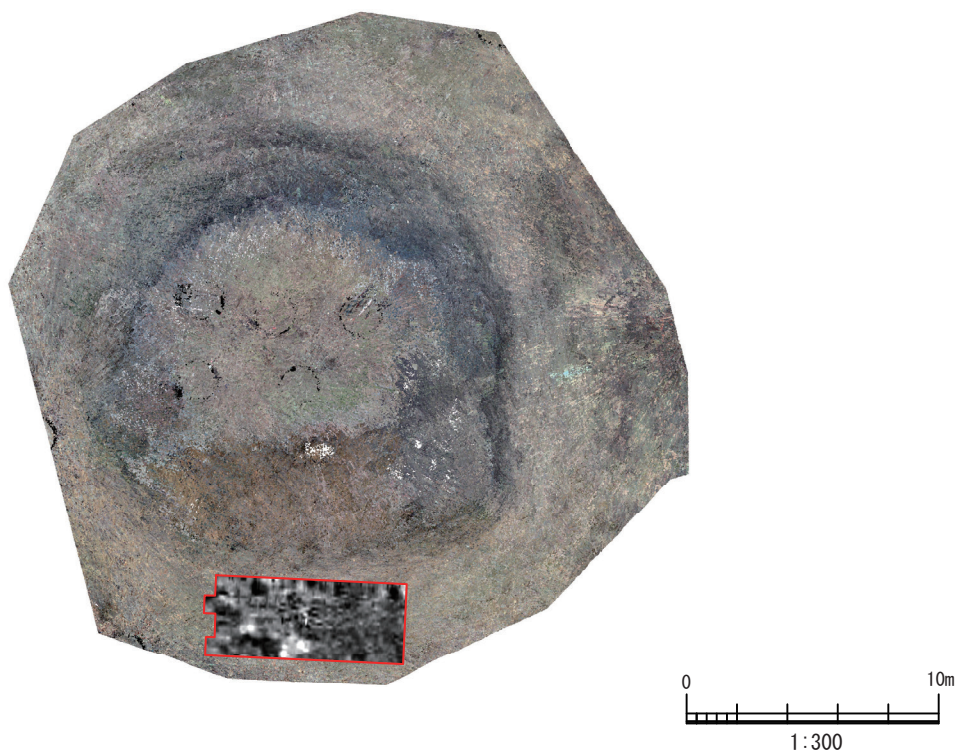


図2-35 水平断面図 (深度：-159.89cm)

第4節 まとめ

閨田1号古墳の最も古い記録は昭和6年(1931)刊行の郷土研究資料に掲載された小川栄一氏による「加茂郡古墳調書」(小川1931)である。小川氏は周辺を踏査して古墳の分布図を作成し、閨田1号古墳を「丸山」と記載し、規模についても「径七半高一丈四尺」と記載している。次に、昭和45年(1970)に刊行された『富加村の古墳』において、吉田英敏氏は、現況で南北16.7m、東西16.95m、水田面からの高さ4.6mを測るが裾部を耕作で削平されているため、本来は直径20mほどの規模であったと想定し、地元古老からの聞き取りを参考に南側の窪み部分が石室開口部ではないかと指摘している(吉田1970)。

上記を参考としながら、今回の墳丘測量及びレーダー探査の成果から閨田1号古墳について若干の考察を記し、まとめとしたい。

墳丘の形と大きさ 墳丘測量図(図2-2)をみると墳丘東側の形がいびつで、直線的である。これに関しては、墳丘の西側(北西～南西側)にかけて人頭大の円礫が表面で確認できるが、北～東側ではみられない状況から、後世の耕作等により墳裾部分が削平されたためと推測できる。人頭大円礫については葺石と考えているが、北～東側は大きく削平されたため、葺石が損壊している可能性がある。

墳形は葺石を留める北西～南西部分の形状から考えて円墳と考えて問題ないだろう。規模については、残存している最大径が図2-8のAF—AN(図2-16)ラインであり、この部分の長さは約20mになる。このAF—ANラインを軸に直径20mの円弧を墳丘測量図に重ねたものが図2-36の下であるが、この円弧のカーブと葺石が最も残存する北西～南西側の形状が一致する。このことから、吉田英敏の指摘(吉田1970)が妥当であり、本来の墳丘規模は直径約20mと推定できる。そして本来の墳形が正円であったとすれば、削平は南側で1m程度、北～東側で2m程度、内側へ掘り削られている事になる。

埋葬主体部 墳丘に内包される埋葬主体部については、図2-16で羨道部と思われる天井の低い空間を捉えたことから、横穴式石室の可能性が高い。また、単測線およびタイムスライスの反応を総合すると、石室の主軸は「南東—北西」を軸とすると考えられる。つまり横穴式石室の開口部は「南東」に向いていた可能性が高い。昭和45年刊行『富加村の古墳』では「南方向に口を持つ横穴式石室」(吉田1970)とされていたが、真南ではなくやや東へ振っているようである。

横穴式石室の位置 単測線での反応点を墳丘平面図にプロットし検討した(図2-36)。厳密な大きさは判別できないが、大まかに石室の位置を把握することはできた。単測線で反応のあった各点を結んだのが図2-36の下に掲載した図である。これは反応の表れた境目を結んでいるので、石室石組みの外側の大きさを表していることになる。これはタイムスライスでの面的な反応とも整合的であるため、現段階で妥当な復元案と考えられる。

また、単測線AF—AN(図2-16)ではAF側で一段下がる形状と考えられ、玄室と羨道の境界部の可能性がある。楣石(まぐさいし)と考えれば、これによって玄室の規模が推定できる。

玄室・羨道の規模 側壁・奥壁ともに厚さ50cmと仮定すると、全長5m、幅2m程度を想定できる。玄室内の高さについて、墳頂部から約1.5m下の68.5～68.9m付近で天井石の反応が認められ、タイムスライスでは墳頂部から約3m下で反応が弱くなる。単測線でも66.5m付近が底面と考えられる。

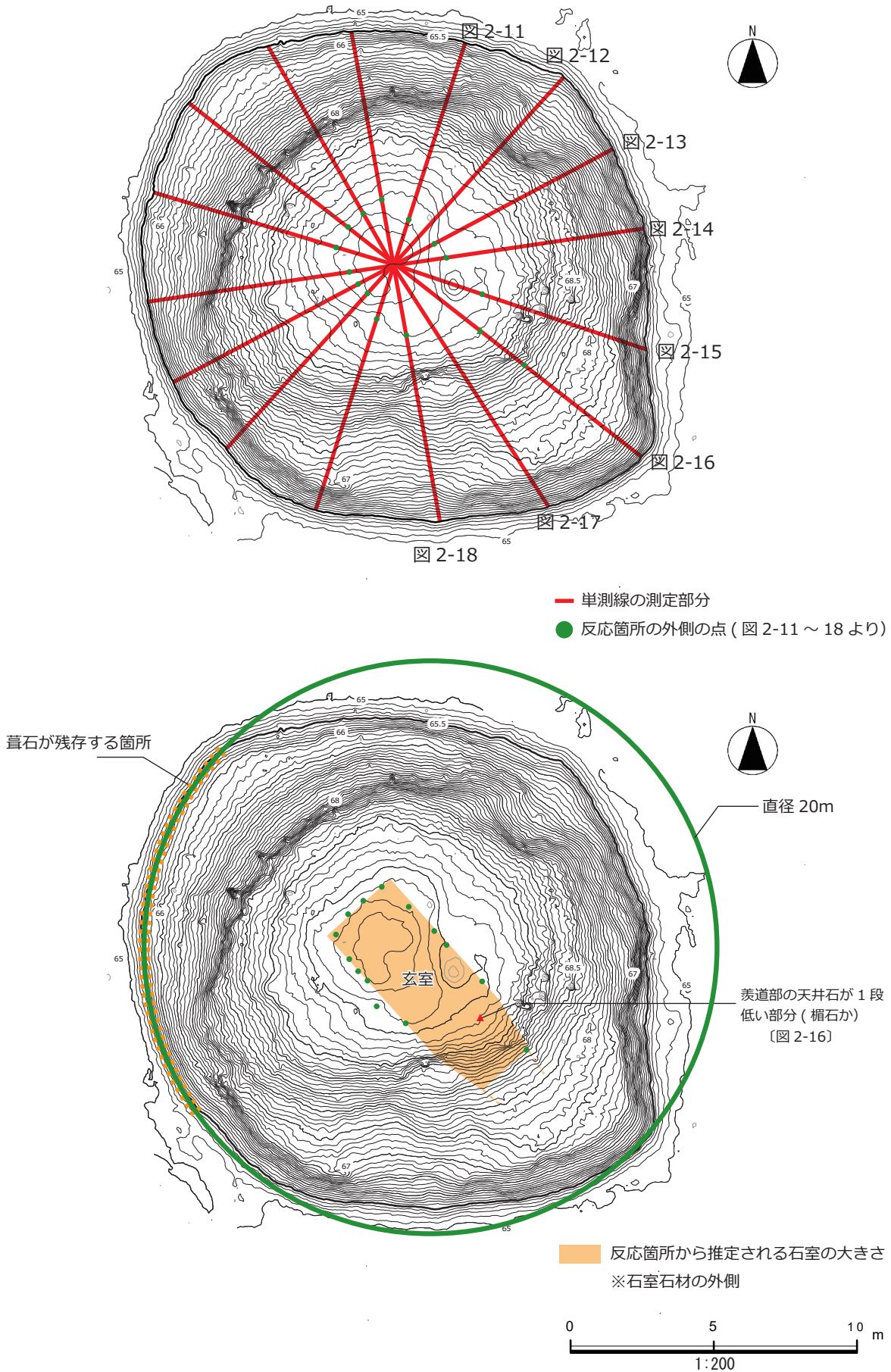


図 2-36 単測線による墳丘部法面レーダー探査の反応箇所から推定する石室の規模

これにより、天井石の厚さを0.5～1.0 m程度と仮定すれば、玄室内の高さは2.5～2.0 m程度となり、大人が立って歩行できる空間を有していると考えられる。羨道の規模については、幅は判然としないが、反応を見る限り長さは2 m程度と推定する。

墳丘の高さ 現況では地表65.0 m、墳頂部70.5 mで比高差は約5.5 mであり、かなり腰高な墳丘である。しかし、石室床面は66.5 m辺りと想定されるため、地表との高低差が1.5 mとなり、若干高すぎる感がある。この点については、昭和45年刊行の『富加村の古墳』に「裾部を水田に接しているため高さ0.8～1.0 m程削られており」と指摘されており、地元からも、圃場整備等で均しが行われ、その際に近くで石や陶器が出たとの証言もある。こうした点を考慮すれば本来の地表は今よりも若干高かった可能性が考えられる。仮に65.5～66.0 mと想定すれば、石室床面との高低差も1 m以内に収まることとなり、墳丘高も4.5～5.0 mほどの想定となる。

墳丘内の横穴式石室の位置 ところで、若干気になる点としては、復元した横穴式石室と前述の直径20 mの復元案を照合すると、墳丘の中央よりやや南西に石室が寄ることになる(図2-36復元図)。東面は街道や川など開けた側に面するため、この部分を大きくみせるための意図と理解することもできるが、墳丘及び石室の復元案の齟齬の可能性も考えられる。今回の調査ではここまでの言及に留めるほかないが、この点については今後調査をする際に検証する必要がある。留意を促したい。

周辺の古墳との関係 大平賀地区には複数の円墳および群集墳が点在する(図2-37)。特に閩田1号墳の周辺の字閩田・中障子・大海道には、平地に立地する中障子1・2号墳や、丘陵の群集墳と思われる閩田古墳群(群集墳)が確認される(図2-38)古墳密集地である。中障子1号墳では横穴式石室の一部が露呈している。これら閩田1号古墳、中障子1・2号古墳、閩田群集墳は立地的に関連性が深いと考えられるため、今後は「閩田古墳群」とまとめて通称することとする。今回の調査成果や周辺の古墳群の状況を加味すれば、閩田古墳群は6世紀中葉以降に築造された古墳群と考えておきたい。

さて、閩田古墳群が立地する小字「大海道」は、街道地名の名残りであると考えられ、郡上街道から枝分かれした飛騨への街道が閩町を通過して市平賀村、肥田瀬村の山際を通り、この「大海道」へ抜ける。さらに下之保・神測・飛騨金山を通過して飛騨高山に至る。飛騨支路や飛騨西街道と通称され、現在は県道関金山線がほぼ同じルートを通っている。この飛騨支路(飛騨西街道)が、閩田1号古墳と中障子1・2号古墳の間を通過することは興味深い(図2-37)。また、今回の調査で閩田1号古墳の石室開口部が南東を向く事が新たに分かったが、この方向は街道方向を向いていることになる。閩田古墳群の南側を遮る丘陵から抜けたあたりを向いていると推測され(図2-37)、街道の往来を意識した立地と考えられるのではないだろうか。街道を少し北へ上った字後平には5世紀末の造り出し付円墳である後平茶臼古墳があり、そこでは木心鉄板張輪鏝などの馬具が出土している点も興味深い。

次に少し東に視点を移すと、津保川対岸には一辺23mと推定される大型方墳である井高1号古墳がある。明治期の地図では字大海道を少し北へ上った所で渡河し、延喜式内社「大山神社」の前を通る街道が井高1号古墳の前へ繋がっている(図2-38)。この道も神測・下麻生など飛騨川方面へ繋がり飛騨へ抜ける街道の1つであった。こうした街道は戦国期には確実に成立しているが古墳時代に遡る確証は無い。しかし後世の広域街道の分岐点に閩田古墳群が立地している事象には注目しておく必要である。築造主体である地域首長が、広域交通路の掌握あるいは街道の整備を勢力基盤の背景とした可能性も考えられ、古墳築造の契機を考えるうえでも重要な視点である。



昭和23年(1948)米軍撮影空中写真



図2-37 関田1号古墳と関田古墳群(1:6000)



遠景 (南東から)



遠景 (北から)



近景 (北から)



近景 (東から)



近景 (南から)



近景 (西から)



推定開口部 (南東から)



レーダー探査風景

図2-39 閩田1号古墳現況写真

また、閩田古墳群が立地する近くには、江戸期ではあるが肥田瀬村（関市）の水田地帯へ引水する用水の引き込み口が設けられていた。肥田瀬用水は、肥田瀬村、鑄物師村、市平賀村の約300町歩を養う大用水であり、取水口を管理する大平賀村は上記3村から敷地料として年30俵を受けていた（『富加町史』）。

このように閩田古墳群は水利と交通の要衝に立地した有力首長墓群の可能性が考えられる。

（島田 崇正）

引用参考文献

- 弥永禎三 1962 「御野国加毛郡半布里戸籍の故地について」『地方史研究』56、57号
- 小川栄一 1931 「加茂郡古墳調査」『郷土研究資料』第3号、岐阜縣師範学校郷土研究室
- 島田崇正 2004 「中濃東部における6・7世紀の土師器煮沸具の様相と地域社会の変化」『美濃の考古学』7号
- 島田崇正 2024 「美濃国加茂・武儀郡における古代集落の構造と変遷」古代集落の構造と変遷4研究報告資料、奈良文化財研究所
- 高田徹 1998 「天守台研究をめぐる諸問題—特に用語・概念上の問題を中心として」『織豊城郭』第5号
- 高橋徹 2013 「7～8世紀の美濃須衛古窯跡群出土須恵器の再検討」『文化財の新地平』奈良文化財研究所
- 松田千春 1992 『土に生きた羽生の里』ぎふ常民文化特別号
- 吉田英敏 1970 「古墳の分布」『富加村の古墳』富加村教育委員会
- 渡辺博人 1984 「美濃須衛古窯跡群における須恵器編年」『美濃須衛古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会
- 岐阜県教育委員会 1981 『半布里遺跡調査概要(1)』
- 富加町 1980 『富加町史 下巻 通史編』
- 富加村教育委員会 1970 『富加村の古墳』
- 富加町教育委員会 1978 『東山浦遺跡—庁舎建設敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 1986 『半布里遺跡—県営木曾川右岸ほ場整備事業』
- 富加町教育委員会 1989 『半布里遺跡—タウンホールとみか建設工事』
- 富加町教育委員会 1992 『目と足で知る羽生用水』
- 富加町教育委員会 1996 『東山浦遺跡B地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 1997 『東山浦遺跡C地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 1998 『東山浦遺跡D地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 1998 『東山浦遺跡E地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 2002 『半布里遺跡範囲確認調査2』
- 富加町教育委員会 2005 『東山浦遺跡F地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 2006 『富加町内遺跡発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 2015 『東山浦遺跡G地点発掘調査報告書』
- 富加町教育委員会 2014 『夕田茶臼山古墳範囲確認調査報告書』
- 富加町教育委員会 2002 『古代のむらと家族—大宝二年戸籍から考える』半布里戸籍1300年歴史シンポジウム資料
- 富加町教育委員会 2019 『夕田墳墓群総括報告書1』
- 富加町教育委員会 2021 『夕田墳墓群総括報告書2』

報告書抄録

ふりがな	トミカチヨウナイイセキハックツチヨウサホウコクシヨ2							
書名	富加町内遺跡発掘調査報告書2（平成20年～令和5年度）閩田1号古墳地中レーダー探査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	富加町文化財報告書							
シリーズ番号	第31号							
編著者名	島田崇正							
編集機関	富加町教育委員会							
所在地	〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511 TEL 0574-54-2177							
発行年月日	西暦2024年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
				° , "	° , "			
東山浦遺跡等	ぎふけんかもぐん 岐阜県加茂郡 とみかちようたきだ 富加町滝田 あざひがしやまうら 字東山浦	21502				2008.9.1 ～ 2024.1.31		試掘確認調査
閩田1号古墳	ぎふけんかもぐん 岐阜県加茂郡 とみかちようおおひらが 富加町大平賀 あざおおかいどう 字大海道	21502	4320	35度 48分 75秒	136度 96分 21秒	2022.6.14 ～ 2023.3.12		現況測量・地中 レーダー探査

富加町文化財報告書 第31号
町内遺跡発掘調査・閨田1号古墳レーダー探査報告書

発行年 西暦2024年3月21日

発行者 岐阜県加茂郡富加町教育委員会

〒501-3392 岐阜県加茂郡富加町滝田1511

TEL 0574-54-2177 FAX 0574-54-2461

印刷 西濃印刷株式会社

